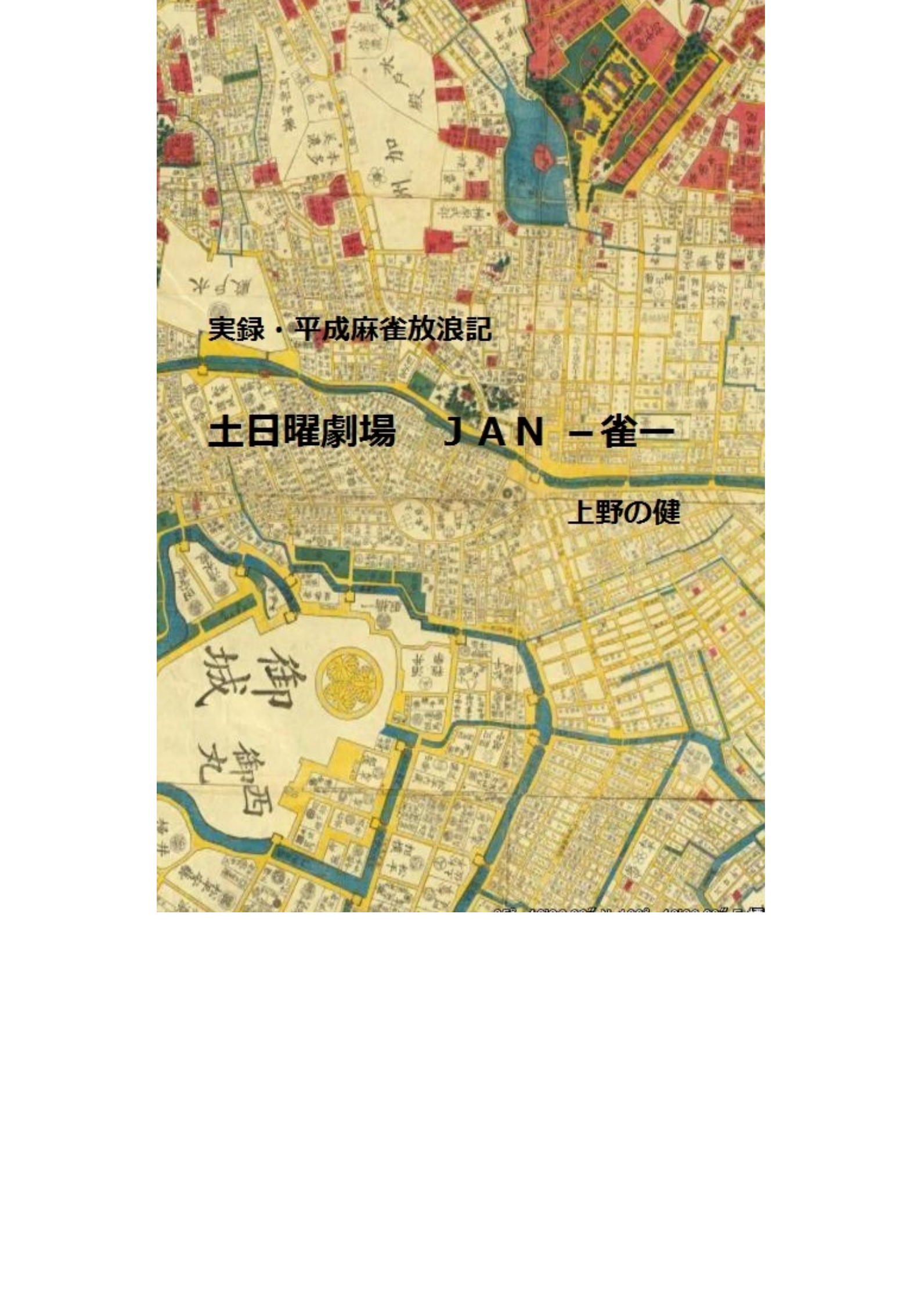




実録・平成麻雀放浪記

土曜劇場 JAN - 雀一

上野の健

御城

西御丸

はじめに

はじめに

これは私上野の健のブログ「[上野の健 実録平成麻雀放浪記](#)」で連載していた「[土曜劇場 J A N - 雀 -](#)」に加筆・修正を加えたものです。内容はTBSドラマ「日曜劇場 J I N - 仁 -」の世界観をモチーフに「歴史麻雀小説」とでも言うような内容を書いたオマージュ作品です。

麻雀や闘牌に重きを置くというよりは人物像にスポットを当てて描いていますので、麻雀を知っている人も知らない人も読める内容になっていると思います。麻雀を知っている方がより楽しめると思います。通勤のお供にでもお楽しみいただければ幸いです。

■□■□どうぞお気軽にコンタクトを！何かお言葉をもらえるだけでもとても嬉しいです！■□■□

上野の健

twitter [@nogamiken](#)

メール nogaminoken@mbr.nifty.com

ブログ <http://jangblo.cocolog-nifty.com/>

第一話 雀竜位戦決勝

ある日曜日の午後。飯田橋にある麻雀荘「東風荘」では、真ん中の卓に人ばかりができていた。他に動いている卓はない。真ん中の一卓だけだ。その一卓に皆の視線が注がれていた。

「ツモ、五百オール」

の音が響くと同時に、その一卓だけの麻雀を見ていたギャラリーがざわめきだした。

「え、ここで和了るのかよ。伏せれば勝ちなのに？」

「いや、何かあったんじゃないか？」

「この五百オールはすごいな」

いろんな声が混じっていた。点棒の受け渡しが終わりに、一卓だけの麻雀は次局に突入した。ざわついていたギャラリーも再び静まり返った。

局は淡々と進み、ポンの声もチーの声もない。牌を打つ音だけが淡々と規則正しく響いていた。数分後その局は終了し、半荘も終了した。同時にどよめきがおこり、どこからともなく拍手が沸き起こっていた。

「では、集計します。点数は、これでいいですね？」

大会委員は集計シートに記入した点数をプレイヤー四人に見せ、確認した。プレイヤーは皆シートを覗き込み、うなづいた。

「では、表彰式に移ります。ギャラリーのみなさんはこちらに移動して、ここから先の場所を空けてください」

進行役に促されてギャラリーは移動し、プレイヤーは順に所定の位置に先導されていった。

「では、表彰式を始めます。大会委員長、お願いします」

「えー、雀竜位は、見事防衛で2連覇を成し遂げました、南方雀！南方雀君、前へ」
大会委員長は優勝トロフィーを持ち、前に歩いていった。南方もおずおずと前に出た。

「南方君、おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

南方は大会委員長からトロフィーを受け取り、握手を交わした。

「では、二連覇の南方プロ、一言お願いします」

南方は進行役からマイクを渡された。

「あ、あの一...今回は防衛戦だったわけですが、あまりそういう気持ちもなく、挑戦者だという気持ちで臨みました。でも、あまり気負うこともなく、いい麻雀が打てたと思います。みなさん、ありがとうございました」

「南方プロに、もう一度盛大な拍手をお願いします！」

進行役が促すと、会場は再び大きな拍手に包まれた。

（オレ、どうもこういう自分が主役っていうの、苦手なんだよな）

南方は、照れくさそうにお辞儀を繰り返していた。

「じゃあ、ボクはこれで」

表彰式も終わり、南方は帰ろうとした。

「いやいや、ちょっと待てよ。打ち上げもあるし、まだ聞きたいこともあるんだけど」

先ほど決勝で同卓していた、同期の杉田プロが声をかけた。

「いやあ、まさか勝つと思ってなかったんで。実はこの後仕事の予定いれちゃってるんだ」

「えー、お前マジかよ。去年も同じこと言ってなかったか？」

「いやー、ホントゴメン。未来、行こう」

南方は、友永未来に声をかけた。未来は南方の経営する雀荘で働いている女流プロで、南方の恋人でもあった。

「はーい、今行きまーす」

未来は返事をしながら、ギャラリーの隙間をくぐりぬけるように出てきた。

「お待たせ」

「じゃ、行くか」

「はい」

二人はそそくさと会場を出て行った。

「まったく、あいつらときたら…」

杉田プロは呆れた表情でぼやいていた。すると先ほど雀竜位戦決勝と一緒に打っていた野口プロがギャラリーをかき分けてやってきた。野口プロは、今期最年少で団体最上位のAリーグに昇級し、今回は雀竜位戦の決勝まで上り詰めた新進気鋭の若手プロだ。

「あれ？南方プロは？」

野口プロは辺りを見回し、杉田に尋ねた。

「ん？野口か。あいつ、今年も仕事だって言って友永プロと帰っちゃったよ」

「えー本当ですか！これから打ち上げもあるし、聞きたいこともいっぱいあったのに！」

「あいつは昔からそういうヤツなんだよ。こういう派手な場が嫌いなんだ」

「えー、雀竜位がそんなんでもいいんですかねえ…いろいろ広報したり付き合いをしたりするのも雀竜位のつとめだと思うんだけどな」

「うん、アイツはそういうのに興味がないんだよ。昔からな…そこがいいところでもあるんだけどな」

杉田と野口は、力が抜けた様子で立ちつくしていた。

主役の雀竜位が帰ってしまったにもかかわらず、会場はまだざわざわとした喧騒につつまれていた。

南方と未来は雀荘を出ると、表通りに出てタクシーを拾った。

「運転手さん、新宿。西口の方ね」

南方は後部座席に乗り込み、運転手にそう告げた。未来は驚いて南方に聞いた。

「ちょっとジャン、仕事ってお店行くんじゃないの？店は池袋でしょう？」

南方はいたずらっぽい笑みを浮かべながら答えた。

「この後仕事なんて、ないよ」

第二話 二人だけの祝勝会

南方と未来は、新宿のシティホテルに来ていた。

「予約した南方ですが」

「ご予約の南方様ですね。お待ちしております。お手数ですが、こちらにご署名をお願いいたします」

南方は署名し終わると、宿泊カードをすっと前に出した。

「ありがとうございます。お部屋は１０階の１０５８号室になります」

「ありがとう」

南方はキーを受け取ると、未来と寄り添ってエレベーターに向かった。

（この人、雀竜位取る前からアタシと来るためにシティホテル予約してたんだ。何て人なの...）
未来は呆れ、驚き、同時に嬉しさもこみ上げてきた。雀竜位２連覇の後の時間を自分とすごすためにあててくれたのだ。なんとも複雑な感情に未来は揺さぶられていた。

バスルームから未来がバスローブ姿で髪を拭きながら出てきた。シャワーを浴びたばかりで、未来の胸元はピンク色に染まっていた。濡れた髪も色っぽさを増していた。未来は色白でスレンダーな美人で、肉感的なタイプではないが、さわやかな艶っぽさを出していた。

（うん、やっぱり未来はいいな）

と南方は思った。

「あれ？」

未来はテーブルの様子が変わっていることに気づいた。

「あ、シャンパンなんか用意してある！」

南方はちょっと照れながら答えた。

「未来がシャワー浴びてる間にルームサービスをとったんだ。せっかくのシティホテルなんだ。ちょっとだけお祝いしよう」

「うん、そうね。お祝いしましょう」

未来はバスタオルを置いて南方と並んでソファに座り、用意されていた足の長いシャンパングラスにシャンパンを注いだ。

「ジャン、雀竜位２連覇おめでとう」

「ありがと。」

二人はグラスを合わせると、シャンパングラスに口をつけた。風呂あがりの未来は一気に飲み干した。南方は口をつけ、すこしだけ口に含んだ。

「いい飲みっぷりだね」

「お風呂あがりだからね。美味しいわ」

南方は未来のグラスにシャンパンを注いだ。

「そういえばジャン、シャンパンは飲めるの？」

「いや、オレは酒全般ダメだよ。これ一杯ぐらいが限度だ。」

「じゃ、これは全部アタシのものね」

「未来は酒豪だからな。一本ぐらい楽勝だよな」

二人は顔を見合わせて笑った。未来はかなり酒はいけるクチだが、南方は下戸だった。昔はもう少し飲めたのだが、無茶な生活で体を壊してからは本当に飲めなくなった。おそらくこのシャンパンを2杯も飲めば、かなり怪しい状態になるだろう。

夜も更けてきて時計は九時を指していた。二人の宴は続いていた。南方はウーロン茶に、未来は追加注文した赤ワインに切り替わっていた。

「ジャンも本当にいいの？打ち上げとか祝勝会とかほっぼりだして」

「祝勝会はここでやってるだろ？」

「確かにね。でもああいうイベントごとには打ち上げはつきものよ」

「でもオレ酒も飲めないし。シラフで酒飲んでるヤツの相手するって結構キツイんだよな。そういうことできるヤツもいるんだけど、オレにはできないんだ。それに第一、優勝なんてしちまったらオレが主役の飲み会になっちゃうんだぜ？もうそんなの悪夢でしかないよ」

「ジャンはアレね、コミュ障ってやつかもしれないわね」

「なんだよそれ？」

「人とコミュニケーションするのが苦手な人のことよ。本当に心の病気の人もあるけど、単に人とのコミュニケーションが苦手な人のこともそう言ったりするわ。ジャンはどっちかといえば、そういうタイプなんじゃない？」

「ハハハ、言われてみれば確かにそうかもな。ひとりが大好きだし」

南方は確かにあまりすすんで前に出るタイプではない。どちらかと言えば、孤独を愛するタイプだ。仕事ではそうでもないが、それ以外のところではあまり積極的に人には関わらない。酒の飲めない理性的な南方には、飲み会で騒ぐのも、その相手をするのも苦痛でしかない。

また、雀竜位として祭り上げられるのもあまり好きではなかった。タイトルを持っている以上役目は果たすつもりではいるが、必要以上にちやほやされることを好ましく思っていなかった。

「ホント、そうよ。普通はイヤでも付き合いぐらいはするものよ。ましてや雀竜位2連覇なんだし。『仕事があるんです』なんて適当な言い訳もつけちゃって。本当は仕事なんてなくて、アタシとこうしてるだけなのに」

「ハハハ、まあいいじゃん。それにさ、ああいう対局終わった後って、神経が疲れてそういうことがシタくなるんだよ。イヤなこと強制されてやるより、こっちのほうがずっといいよ」

「まったく、男の人ってよくわからないわね」

「そうかな。女より分かりやすいさ」

南方と未来は見つめあいながらお互いに含み笑いを浮かべていた。

「そうだ、酔っ払わないうちに聞いておかなくちゃ」

未来は思い出したように言った。

「今日の最後の半荘のオーラスよ。あそこでどうして五百オールなんて和了るの？和了り止め無しなんだから、あんな和了りは普通しないわよ？ノーテンで終わらせるのが普通じゃない？」

「ああ、あれなあ。あれはな…」

南方はちょっと真剣な目になって語りだした。

「ああ、あれなあ。あれはな」

南方はちょっと真剣な目になって語りだした。

「対面の野口、あいつ役満張っただろ」

「アタシはジャンの後ろで観戦してたからよくわからないのよ。ただ、表彰式終わった後に『あの大三元がなあ』なんて言ってる人は確かにいたわ」

「たぶん、それは決勝のオーラス0本場の野口の手のことだろう」

南方はタバコを取り出して火をつけながら答えた。

雀竜位戦決勝のオーラス、ラス親の南方は二位の野口に四万点以上の差をつけてトップに立っていた。野口が南方をまくるには、三倍満直撃か役満ツモしかない状況だった。南方はそこで五百オールを和了った。和了り止めもないので、ここでそんな安手を和了る意味などほとんどない状況だった。

未来は質問を続けた。

「じゃあ、ジャンはあの時、野口プロに役満が入ってるって分かったの？」

「ああ、わかってたよ」

「でも、捨牌からじゃわからないわよ？決勝のオーラスって、どうしてもかたよった捨牌になるのが普通だし。三元牌が高くて全然不思議じゃないわ」

不思議そうな顔をする未来に、南方はちょっといたずらっぽく笑いながら答えた。

「気づかなかった？あいつ、三巡目ぐらいに右手を一回卓の下におろしたぜ。普段は右手は卓の上に乗ったままなんだけどな」

「わからなかったわ。でも、それって何か関係あるの？」

「おおありだよ（笑）。あいつ、普段の麻雀では何があっても表には出さないだろ？でも、さすがに決勝のオーラスで、おそらく配牌に三元牌がドサッと入ってさすがにシビれたみたいだったな。ツモも多分来てたんだと思うよ」

「どういうこと？」

南方は未来に笑いかけながら答えた。

「クールに振舞っていても、体は正直なんだよな。あいつ、手が震えるか手汗をかくか、とにかく手に出ちまったんだと思うよ。卓の下でこっそり手のツボを押してやがった」

「ツボ？」

「ああ。手に緊張が出たときに手の震えや手汗を押さえるツボがあるんだ。手の甲の、このへん。ためしに、自分で押してみな。中指の骨の横あたりに押すと気持ちいいところがあるから」

南方は自分の右手のツボを左手で押して未来に見せた。

「あー、あるある。ここがそういうツボなの？」

「そうそう」

「でも、卓の下のぞいたわけじゃないんだから、そんなことしてるかどうかは分からないんじゃない？」

「わかるさ」

「どうやって？」

「ハハハ、他のヤツには言うなよ」

まだ不思議そうな顔の未来に、南方は笑みを浮かべながら、少し小声で話し出した。

「野口な、アイツは顔には出さないけど、左ウデにはすこしクセがあるんだ」

「左？打つほうの右じゃなくて？」

「そう、左」

南方は少し間を置いてから、野口のクセについて話し出した。

「アイツなあ、なんでもないときは左手を下にだらんと下げて打ってるんだ。いろいろ考えて勝負に来るときには無意識に左腕をまげて自分の体の前に持ってくる。そのとき、すこし左脇がしまるんだ。だから、オレはあの時ヤツの左の脇を見てた」

「で、あの時はどうだったの？左脇はしまってたの？」

「いや、あの時は逆に左脇が空いたんだ。おかしいなと思ったら、右手も下ろしてた。で、ピンときたんだ。こいつ、しびれて手にきやがったなと。ウソだと思ったら、ためしに普通に右手の甲のツボ、左手で揉んでみな。左脇が空くから」

未来はさっき教えてもらった右手の甲のツボを左手で実際に揉んでみた。

「ホントだ。左脇が少しあくわ」

「だろ？」

南方はウーロン茶を飲みながら、いたずらっぽく笑った。

「でも、ジャンも野口プロもよくそんなツボを知ってるわね？普通、そんなこと知らないわよ？」

「麻雀ていうのは、顔に出るのもよくないけど、手に出るのが一番よくないんだ。人も注意して見てるし、手汗もまずい。だから、麻雀プロの間では実はよく知られたツボなんだ。未来も役満張ったり、タイトル戦でしびれちゃったときには、このツボ押すといいよ。実は手だけじゃなくて体の緊張をほぐす効果もあるから、対局前に押すのもいいよ」

「まったく、ジャンの観察力ってほんとスゴいわね。アタシもそんな風に観察されてるのかしら？」

未来はジャンの顔をのぞきこむようにして言った。

「ははっ、オレ、女は全然読めないんだ。だから、女流プロ相手だと勝てる気がしないよ」

「本当かしら？」

「本当だよ。女は本当にわからないね」

そう言って南方はタバコの煙を吐き出し、タバコの火を消した。

南方の麻雀の強さの秘訣は、この並外れた観察眼にあった。人間同士が打つ麻雀では、その人の精神状態が体のいろんなところに現れるということに気づき、その観察を実践していた。フリー麻雀で打つ一般の人たちと比べて、プロ同士で打つ麻雀ではそのクセも小さい。だが、プロの場合でも些細なクセがみんなにあり、それがほとんど修正されるものでないことも分かっていた。南方はそれを利用して雀竜位にまで上り詰め、防衛も果たした。南方は達成感を感じていた。

（さて、次は何をやるかな）

南方はそんなことを考えていた。

第四話 目指すもの

「ねえ、ジャンってば。朝よ。起きて！」

南方は未来に起こされて目が覚めた。

（そうか、雀竜位戦決勝のあとシティホテルに来たんだっけか...）

まだ頭もまわらずぼーっとしてはいるが、南方は思い出した。と同時に未来から追い討ちがかかった。

「アタシ、もう準備できちゃったわよ。早く起きて。朝ごはん食べにいくわよ」

だいたい女というのは出かけるまでの時間が長いものだが、未来は違った。未来はどちらかと言えば実利主義で、あまり飾るということをしない。南方の雀荘でもそうで、その辺にある事務用のダブルクリップで髪をとめてテキパキと店の掃除をしているような女だった。そんな飾り気のない働き者の未来に、南方は他の女性とは違う魅力を感じていた。

「ああ、未来。おはよう」

南方はようやく体を起こした。

「おはよう。さ、顔洗って着替えて。朝ごはんに行くわよ」

「へーい」

南方はすっかり未来に主導権を握られていた。

南方と未来はホテル最上階のレストランに来ていた。朝食はビュッフェスタイルで、好きなものを取ってきて食べる形式だった。未来はクロワッサンにスクランブルエッグ、ソーセージ、パスタ、サラダ、スープ、オレンジジュースと一揃い取ってきてテーブルに並べていた。

（まったく、朝からよく食うよな）

南方は思っていた。未来とはよく食事に行くが、未来は本当によく食べる。この細くて小さい体のどこに入るのかと思うくらいだ。一方南方は少食で、いつも未来が食べるのをながめていた。今日の朝食もロールパンとサラダ、あとはコーヒーだけを持ってきた。

「ジャン、今日はこの後肉体労働だってわかってる？ 食べないと持たないわよ？」

「ああ、そうだったか」

未来にそう言われて南方は気づいた。今日は南方の経営する雀荘では新しい自動卓の搬入が行われる日だった。フリーの卓は自動配牌のアルティマをあてて運営していたが、他の卓もお客様からの要望に応じてアルティマにすることにしていた。

アルティマというのは、今時の雀荘がこぞって導入している、牌山に加えて配牌まで自動で出てくる卓だ。南方は自動配牌卓はあまり好きではなかったが、お客様の要望とあれば応えないわけにはいかなかった。

（麻雀てのは、サイコロ振って取り出し決めて配牌とるもんだとおもうんだけどな）

と南方は思っていた。だが、配牌の面倒をなくすことで初心者も雀荘に来やすくなり、麻雀の裾野が広がることはよいことだとも考えていた。

（でもまあ世の中の流れだし、麻雀やる人が増えることはやっぱりいいことだよな。お客さんも

喜ぶし。金はかかるけどな)
南方は心の中で苦笑していた。

「ねえ、ジャン、私昨日から思ってたんだけどさ」
未来が朝食を食べ終えて、食後のコーヒーを飲みながら南方に話しかけた。
「なんか、雀竜位二連覇したわりには、あんまりうれしそうじゃないわよねえ」
「いやいや、そんなことはないよ。うれしいよ」
南方は手を振りながら答えた。
「普通、プロ雀士だったら団体の最高峰タイトルを二連覇したらものすごくうれしいはずよ。もっとこう、打ち上げではしゃいだり、飛び上がって喜んだりするくらい。なのにジャンったら、打ち上げにもいかないし、こんなひっそりとしかお祝いしないし。クールにもほどがあるんじゃないかな」
未来はちょっと不思議そうな顔をして南方に聞いた。
「うーん、そうだなあ。団体のタイトルはオレの最終目標でないことは確かかな」
「やっぱりね。そうだと思った。もう、他の人にそんなこと言ったら怒られちゃうわよ」
「大丈夫だよ、よそでは言わないから。未来もこのことよそで言っちゃだめだよ」
「わかってるわよ。で、何がやりたいの？」
未来はちょっといたずらっぽい視線を南方に送りながら聞いた。
「うーん、まだ漠然としてるんだけどね...」
南方はタバコに火をつけて答えた。無意識のうちに、まだまわっていない頭にスイッチをいれようとしていた。南方は少し考えてから答えた。
「麻雀ってさ、『ゲームの王様』って言われるぐらいの、すごく面白いゲームだよな？」
「うん、そうね」
「でもさ、『ゲームの王様』って割には、世間での扱いがあまりにも低すぎないか？」
「まあ、賭け麻雀だって捕まれば犯罪者になっちゃうしねえ。いまだにフリー雀荘は怖いところだってイメージは普通の人にはあるみたいね」
「そうだろう？まだうまくは言えないんだけど、そういうところを何とかしたいっていう気持ちの方が強いかな。プロ団体に腕をみがいてタイトルを取ることが、そっちの方の目的と違うとは言わないけど、そんな大したことじゃないなあ、という気がしてるんだ」
南方は自分のもやもやとした思いを口に出してみたが、じゃあ、具体的に何をすればいいかということまでは考えをまとめきれずにいた。
「じゃあ、世の中の麻雀の扱いを良くするために、行きましょうか」
未来はそう言ってコーヒーカップを置き、立ち上がった。
「ん？どこへ行くんだよ？」
「あなたの店よ。いい雀荘を運営して気持ちのいいサービスをすることが、ジャンの目的に近づくことになるんじゃないかな？雀竜位二連覇よりも、こっちのほうがためになるかもよ？」
(それもそうだな)

南方はそう思って苦笑した。言われてみれば、南方が雀荘を経営しだしたのも、元はといえばそういう思いが根底にあったからだった。

「じゃあ、行くか」

そう言って南方も席を立った。二人は連れ立ってレストランを後にした。

第五話 雀荘「ジャンスリー」

南方は未来と連れ立って自分の経営する雀荘「ジャンスリー」に向かって歩いていた。雀荘「ジャンスリー」は、池袋駅西口から徒歩数分の雑居ビルの三階にある。卓数は8卓でさほど大きくない、落ち着いた雰囲気のある雀荘だ。池袋駅西口を出てから店のある通りに入ると、自分の店の前にトラックが止まっているのが見えた。

「あら、もう来てるのかしら？」

未来はちょっと小走りに店のほうへ急いだ。南方も早足で後を追っていった。店の前に着くと、雀卓メーカーの営業マンの三浦がタバコを吸いながら待っていた。

「あ、社長、友永さん、おはようございます」

三浦は営業マンらしく、さわやかに挨拶した。

「ああ、三浦さん、おはようございます。待たせてすみません」

「いえいえ、こちらが早く着いただけで。いつでも搬出・搬入始められますよ」

「わかりました。友永さん、店の中確認してきてくれ」

「はい。確認してきます」

未来は元気に階段を駆け上がっていった。

「そういえば社長、このたびはおめでとうございます」

「ん？何が？」

「何がって社長、雀竜位二連覇されたじゃないですか～」

「ああ、そうだった。どうもありがとう」

南方は苦笑しながら軽く頭を下げて言った。本当ならみんなから「おめでとう」を言われなれているはずなのだが、祝勝会をエスケープしてきた南方にとっては、未来以外の人に初めて言われた「おめでとう」だった。

「もう、社長ったら本当に面白いですね。うちもタイトル戦には協賛してるんで、昨日の決勝戦も見てましたよ。オーラスの500オール、本当にびっくりしました。私は野口プロの後ろで見てたんですけど、手牌が透けてるのかと思いましたよ」

「ハハハ、本当に透けてるのかもよ」

「いやあ、そんな素材で牌を作ってるつもりないんですけどねえ。ハハハハ」

談笑していると、未来が階段を駆け下りてきた。

「社長、今はお客様いないようなので、作業OKです」

「友永さん、ありがとう。じゃあ三浦さん、搬出搬入お願いします」

「わかりました。よし、はじめようか」

三浦はトラックに乗って待っていた作業員に声をかけた。

三浦と作業員を店内に招き入れ、未来の仕切りで自動卓の搬出搬入作業が始まった。

「えーと、それではこの卓、この卓、この卓を搬出してください。この1台だけはそのまま残してください。でいいですよ、社長？」

「はい、それでいいです」

「ということで、お願いします。で、社長は。。搬出したところから、床を掃除してってください。私は搬出、搬入を手伝います」

「はい、わかりました」

（こいつと結婚したらこんな調子でやられちゃうのかな。。）

南方はそんなことを考えながら、バケツに水を汲みにいった。

未来の仕切りもよく、自動卓の搬出搬入作業は一時間程度で終了した。

「今日はどうもお疲れさまでした」

未来は今日作業してくれた三浦と作業員に、お茶とお茶菓子を振舞っていた。

（こういう気がつくところも、未来のいいところだよなあ）

南方はそう思いながら、一緒にお茶を飲んで三浦たちと談笑していた。

「そうだ、社長、この後なんですけど。社長のところは以前に一回導入いただいでるので、詳しい説明はいらないと思いますが、牌を実際に入れてみて動作確認をして終了にしましょう。オイ、牌と点棒全部もってきて」

「わかりました。オレ、行ってきますよ」

作業員の一人が立ち上がった。

「ああ、私も行きますよ。みなさんは、お茶でも飲んで休んでてください。」

南方も立ち上がった。なにせ、南方は掃除をしていただいで、他の人たちは力仕事をして休んでいる最中だ。自分が行くのが筋だろうと南方は思った。

「いいですよ社長。私が行きますから」

三浦も立ち上がったが、

「いやいや、いいです。どうぞ、休んでいてください。じゃあ、行きましょうか」

南方は立ち上がった作業員に声をかけ、一緒に階下まで降りていった。

「じゃあ、すみませんが、これお願いします」

と、トラックの荷台に乗った作業員から、麻雀牌五セット分を渡された。

（お、重い...）

アルティマ用の牌は、予備も合わせて十セット発注していた。作業員と二人で一人五セットずつもったが、それでも十キロぐらいにはなってしまう。それがかさばってすごく持ちにくい。二人はエレベーターに乗り込み三階へ上がった。

だがエレベーターを降りるとき、南方は重ねて持っていた麻雀牌のセットのバランスを崩し、前につんのめってしまった。

「あーとっと、、」

南方は麻雀牌を落とすまいとして前に出た。だが、そこには階段があった。

「あ、あ、あーっ」

とさけんで、そのまま階段を転げ落ちてしまった。

「あーっ、南方さん！！」

という作業員の声が響いた。

この声が南方のこの世界での最後の記憶となった。南方の意識はここで途絶えてしまった。

「おぬし！、おぬし！、大丈夫か、おぬし！」

薄らいだ意識の中でそんな声が遠くで聞こえている。そしてだんだんと意識がはっきりしてくるにつれ、大きく聞こえてくるようになってきた。南方は意識を取り戻し目を開いた。

「おお、戻ってきたか。おぬし、どうした、大丈夫か？」

南方の目にはちょんまげを結い家紋が入った羽織を着て、刀を二本差した侍らしき若者の姿が見えた。どうやらこの侍が気を失っていた南方を揺り動かし元に戻してくれたようだった。

南方は辺りを見回し、自分の周囲の状況を確認した。今はどうやら夕方らしく、空が赤く染まっているのが見えた。周囲は全く見覚えのない風景だ。南方自身は道の脇にある小さな草むらにいた。

（なんだ、オレは夢を見ているのか？ここはどこだ？）

南方は状況をまったく把握できずにいた。とりあえず、目の前の侍に聞いてみた。

「こ、ここは、いったいどこですか？」

「ここか。ここは下谷だ。そこが寛永寺の参道で、ほれ、そこに不忍池が見えるであろう？」

（下谷？不忍池？。。ということは。。）

南方は混乱する中で必死に考えた。

「う、上野、、ですか？」

「うむ。ここは上野だ」

「い、池袋では...」

「なんだおぬし、池袋村の者か」

（池袋、、むら？）

南方はあらためて辺りを見回して観察した。アスファルトではない土でできた道。往来する人はみな着物にぞうり履きで男性も女性も髪を結っていた。

（なんだ、この世界は。一応ここは上野だから、、江戸時代ってことか？）

江戸時代以前の江戸は単なる湿地で、人が住めるような場所ではなかったことを南方は知っていた。このような町の体をなしているということは、ここは江戸時代の世界だと南方は推測した。

観察から対策をひねり出すのは南方の得意なジャンルだ。

（ようし、夢か現実かもよくわからないが、一丁この状況にのってやろうじゃないか！）

南方は腹をくくった。すると、この侍の連れらしき二人の侍がやってきた。そのうちの一人の小男が介抱してくれた侍に声をかけた。

「おい、恭太郎、なんかあったのかい？」

南方を助けた侍は、恭太郎という侍らしかった。

「はい、この者がここで意識を失い倒れておりましたゆえ、助けようと揺り動かしていたのでございます。今、どうやら意識を取り戻した様子で」

「そうかい。そいつはよかった。お前さん、大丈夫かい？」

小男は心配そうに尋ねた。

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

小男はさらに南方の格好をしげしげと眺めて聞いた。

「ところで、お前さんが着てる着物は、そりゃあ西洋人が着てるやつだよな。西洋人には見えねえけど、洋行帰りかい？」

南方は自分の着ている服を改めて見た。公式対局の後、シティホテルに泊まってそのままの格好だ。南方の格好はワイシャツにスラックスだった。雀荘では雀卓の搬入作業中だったので、ネクタイと上着はつけていなかった。

（さすがに、そのままは答えられないな）

「まあ、そんな感じだと思うんですけど、ちょっと記憶がなくて、よく覚えてないんですよ...」

南方は少しはぐらかして答えた。小男は、南方の周りを見回し、再び南方に尋ねた。

「で、そこに転がってる箱みたいなものは、お前さんの荷物かい？」

「え？」

あらためて自分の周りを見渡すと、薄いダンボールの箱が五個転がっていた。

（あ、これは...）

南方は、池袋の雀荘「ジャンスリー」で、麻雀牌を運んでいて階段を転げ落ちたことを思い出した。このダンボールの箱にはアルティマ用の麻雀牌が入っているはずだ。

「そ、そうです」

「なんとも見慣れねえもんだけど、そいつぁ、なんなんだい？」

「これは、麻雀牌です」

「まあじゃんぱい？まあじゃんぱいってのは、いったいなんなんだい？」

（そうか、江戸時代には麻雀はまだないのか。。そういえば、初めて麻雀について言及したのは夏目漱石だったっけか。麻雀が文化人の遊びになったのが確か大正時代なんだよな）

南方は普通に説明できないことを悟り、こう答えた。

「これは、清の国の遊びで、日本で言えば花札のようなものです」

「ほう、花札ねえ。。てことは、お前さん、博徒かい？」

「まあ、そのようなものです」

「ハッハッハッ、こいつはおもしれえや」

小男は笑い出した。

「洋行帰りの博徒だってよ。まあ、洋行しようなんてやつは確かに博打打ちにはちげえねえけどよ。ハッハッハー！」

小男は笑い終わると、あらためて南方に話しかけた。

「お前さん、面白いな。ちょうどいいや。おいら達、実はこれから賭場に行く途中なんだ」

「賭場？」

「おう。浅草寺の先でやってる賭場でな。よかったら一緒にどうだい？もしかすると、お前さんの知ってる人間もいるかもしれねえしよ。本職なんだろう？それに、こんな世の中だ。そんな格好

でうろうろしてたら、斬られたって文句は言えねえぜ」

そう言われて、南方は考えた。

（どのみち、じっとしてたって仕方ないんだ。この世界じゃあ、オレは金を一銭も持ってないラ
ス目なんだ。動かなきゃダメだ！）

そう感じた南方はすぐに決断し、

「はい。一緒に連れて行ってください」

と返事をしていた。小男はうなづき、笑みを浮かべながら南方に話しかけた。

「よし、わかった。で、お前さん名前はなんていうんだい？」

「南方、南方雀です」

「ジャンか。うちのジョン万次郎みたいな、いかにも洋行帰りって名前だな。まあ、あいつは
洋行っていうより漂流だけだな。ハッハッハ！」

（ジョン万次郎だって？あの、難破してアメリカ船に助けられてアメリカまで行った？てことは
この人は...）

驚いている南方に構わず、小男は話を続けた。

「じゃあ、こっちも名乗るか。おいらは、旗本の勝麟太郎ってんだ。お前さんを介抱してたこい
つは、おいらの仕事の手伝いをしてもらってる、旗本の橘恭太郎。こっちのでかいのは、昨日お
いらのところに弟子入りした、土佐の坂本龍馬ってんだ。おい」

勝は脇の二人に名乗るよう目で合図した。

「橘、恭太郎です」

「土佐の坂本です」

恭太郎と龍馬は、名乗ると軽く会釈した。

（勝麟太郎に、坂本龍馬だって？誰でも知ってる幕末の立役者じゃないか！）

あっけにとられた南方は、目を丸くしてこの三人の侍を見ていた。

第七話 勝の企て

「じゃあ、行くか。恭太郎に龍の字、そのまーじゃんぱいとかいう荷物は、持つのが大変そうだな。持って差し上げな。」

勝麟太郎は恭太郎と龍馬に指示を出した。

「はい。では、風呂敷でつつんで背負うことにいたしましょう。」

恭太郎は風呂敷を取り出して麻雀牌の入った薄いダンボールを器用につつみだした。

（そうか、こうやってつつむのか。。なるほど。。）

風呂敷で物をつつんだことなどない南方は、感心して見ていた。

「ほいたら、わしが背負うぜよ。よっと。」

龍馬は風呂敷包みを背負うと、胸の前で風呂敷の両端をしっかりと結んだ。

「では、参りましょう。急がねば、日が暮れてしまいます。」

恭太郎はそう言うと、勝と並んで先に歩き始めた。龍馬と南方は少し離れて後ろに並んで付いていった。

一行は上野から浅草に向けて歩き出した。今で言うと、東上野から下谷神社のあたりを通り、浅草通りを田原町・浅草方面に向かって歩いていくような感じだ。この時代、上野から浅草にかけてはお寺が多い「寺町」だった。南方たちが歩いている通りも、両側には大小さまざまなお寺が並んでいた。

（そうか、この辺りは昔はお寺ばかりが集まっているところだったんだ。。）

南方はそんなことを思いながら、江戸の町をいろいろと観察しながら歩いていた。前の方では、恭太郎と勝が会話をしながら歩いていた。

「勝先生、賭場に行くなどは申しませんが、せめて笠をかぶるなり、変装するなりして身分を隠して行ったほうがよろしいのではありませぬか？」

「ハハハ、おいらはただ、友人に会いに行くだけだよ。友人に会いに行くのに変装するなんておかしいだろう？」

「それはそうでございますが。。万が一うわさになりでもいたしますと。。」

「あそこの賭場は大丈夫さ。親分は素性の知れたヤツしかいれねえし、それに、おいらなんかよりずっと身分の高いお人もお忍びで来なさるってえ話さ。」

「はあ、そのようなところで。。で、このたびはなぜ坂本殿を賭場へ誘われたのでございますか？私は何かお考えがあつてのことだと思っているのでございますが。。」

「ハッハッハ、恭太郎、お前さんもずいぶんと鋭くなってきたじゃねえか。だがよ、もう半分ぐらいは、おいらわかつちまったよ。」

「それはどういうことでございますか？」

「賭場に行く途中で、本職の博打打ちを拾うなんぞ、龍の字は何かを持ってるって証拠さ。」

「それは、南方殿のことでございますか？」

「おうよ。しかもあの博打打ちは、おいらたちにはねえ何かを持ってるような気がするな。」

「確かに、風体も言葉も何もかも私共とは違うような感じではございますが…」

「だからおいらはヤツを拾ったのさ。ヤツは面白そうだ。まあ、行けばそのあたりもわかるだろうよ。」

「とはいえ、素性の知れぬ者ですから、悪いことが起きねばよいのですが。。」

「そうなればなったで、どうにかするだろうさ。あそこは仕切りがしっかりしてる賭場だからよ。たいていのことはうまく片付けるさ。それに、ヤツはそういう手合いじゃねえとおいらは踏んでるんだがな。」

「左様でございますか。。」

恭太郎は納得のいかない様子で少し顔を伏せた。それから二人は無言のうちに歩を進めていたが、勝は思い出したように恭太郎に尋ねた。

「そうだ。恭太郎、お前さん、今日はおあし（お金）は持ってきてるか？」

「私は先生のお供で参っておるのでございます。今日はそのようなつもりでは来てはおりませぬゆえ。。」

「そうかい？今日はお前さんのおあしも用意してきてるんだがな。。ひとつ打ってみちゃどうだい？」

「滅相もない。私は博打のようなものに手を染める気はありませぬゆえ、結構でございます。」

「ハハハ、お前さんはそう言うと思ったよ。だがよ、まあ、そういうところがお前さんのいいところさ。おいらはお前さんのそういうところを買ってるのよ。すまなかったな。」

「いいえ、私こそ、不調法者ゆえ申し訳ございませぬ。」

（全く、困った先生だ。。だが懐が深くて、先生のお考えは全く読めぬ。すごいお人だ。。）
恭太郎はこんなことを思いながら、夕焼けで赤い寺町の通りを歩いていた。

「龍馬さん、すみませんね、重いでしょう。」

「なーに、近頃は道場の稽古もさぼっちゃったき、いい稽古になるぜよ。」

南方と龍馬はどちらともなく話しかけ、いろんな話をしながら歩いていた。乙女ねえやんの話、南方自身の小さい頃の話など、普段なら人にはまず話さないようなことも話していた。

どちらかと言えば、人付き合いが苦手な南方は自分で驚いていた。龍馬は気さくで、子供のようにキラキラとした目を持っていた。この目で見られると、「この男と話したい」そう思わずにはいられない、なんとも不思議な魅力を持っていた。

（これが、坂本龍馬か。。すごい男だな。。）

南方は、坂本龍馬の魅力を身をもって体験していた。

「で、今日はどうして賭場に行くことになったんですか？」

「実はの、昨日、わしは千葉道場の重太郎さんちゅう剣客と、勝先生を斬りにいったがじゃ。」

「勝先生を斬りに、ですか。。」

「ほうじゃ。ほうしたらのう、勝先生は地球儀をわしらに見せて、これからの日の本がどうしたらええかをわしらに話してくれたがぜよ。日の本は世界ではこんな小さな国じゃと。で、世界に冠たる大英帝国もこんな小さい国やけんど、どういて帝国とよばれちよるかも教えてくれたの。」

わしゃあもう、腰をぬかすほど驚いたぜよ。で、その場で勝先生に弟子入りをお願いしたっちゃうわけじゃ。」

「勝先生を斬りに行って、反対に弟子入りのお願いですか？」

「そうぜよ。ほいたら勝先生がの、『坂本君、明日、一緒に博打を打ちにいかんか？』とこう言うわけじゃ。で、今おまんとかういて歩いておる。」

龍馬は少しいたずらっぽい顔で南方を見た。直感的に南方は思った。

（あの勝先生が、何の目的もなくただ博打を打ちに行こうというはずはない。この世界でこんな風体の自分に対して、あの人は偏見ももたずに、真っ直ぐオレという人間を確認しに来た。あの時オレは江戸の人には理解できない意味不明なことも言ったはずだが、それでもオレを博打に誘った。おそらくは、博打を打たせることで何かを量ろうとしている。対象は龍馬さん、そしてたぶんオレもだ。）

南方は少し考えてから、龍馬に問いかけた。

「うーん、それって、勝先生が龍馬さんを試してるってことじゃないのかなあ？そうは思いませんか？」

「試す？」

「ええ。博打ってというのは、その人の本性がでるものなんです。勝先生は博打で龍馬さんの何かを見てみたいんじゃないですかね？」

「そういうもんかの？」

「たぶん、そうだと思いますよ。」

「ま、わしは勝先生についていだけじゃからの。本性でもはらわたでも、なんでも見てもらうだけじゃ。」

（この人は自分を良く見せようとか、勝先生のお眼鏡にかなわなかったらどうしようとか、そんなことは考えないのか。。）

南方はそんなことを思っていた。そしてこの坂本龍馬という男の魅力に引き込まれていた。

勝麟太郎たちの一行は、浅草にさしかかっていた。

「龍の字、ここが浅草寺だよ。中をつきって行くぜ」

先を歩いていた勝麟太郎は、振り向いて後ろの坂本龍馬に言った。

（アサクサデラ？そうか、ここが浅草寺か。東京に住んでてもなかなか行かないけどな）

南方はそう思って一人で含み笑いをしていた。普段は経営する雀荘がある池袋が行動範囲の中心だ。浅草に行く機会はほとんどない。勝たちの一行は、雷門をくぐって、浅草寺の境内に入った。

（すごいな...なんてキレイなんだ...）

境内に入ると、ちょうど秋の夕焼けがすぐ先に見える五重塔や仁王門を真っ赤に染めていた。朱塗りの建物に光が映えてさらに赤くなり、赤い空と同調する様子がとても美しかった。

「ほお～、きれいなもんじゃのう」

南方の横で、龍馬がそうつぶやいた。龍馬も南方と同じように夕焼けの浅草寺の美しさに見惚れていた。勝たちの一行は仁王門をくぐり、本堂の前を通過して二天門から浅草寺の敷地を出た。

（夢とはいえ、ずいぶんときれいだったな）

浅草寺の敷地を出て、南方はそんなことを思っていた。江戸時代にタイムスリップしてきたばかりの南方にはこの美しい情景は夢のように思えた。だがこれは現実のことだった。この後の彼らには夕焼け以上に熱く燃える鉄火場が待っていた。

「ここだよ」

勝麟太郎は指をさした。門には「青龍院」と書かれていた。どうやらここもお寺らしい。

（そうか、この時代は博打はお寺で行われていたんだったっけ。テラ銭というぐらいなものな。）

まさか本当にお寺に来るとは思っていなかった南方は苦笑した。勝麟太郎一行は門をくぐろうとすると、門番に止められた。

「どちらさんで」

門番は勝麟太郎の正面に立つと、そう勝に聞いた。

「軍艦奉行並、勝麟太郎だ。辰五郎親分に会いに来たんだが。」

「それは失礼いたしました。では、そちらさんはどのようなお方で」

門番は南方をじろっとにらんだ。南方はワイシャツにスラックス姿で、とても江戸時代の身なりではなかった。どうやら門番に怪しまれたようだ。

「こいつはおいらの友人で、洋行帰りでな。それでこんななりをしてるんだが、博打が強いってんで今日はおいらの博打のお供に連れてきたんだ。一緒に中に入れちゃくんねえかい？」

「わかりやした。それでは、こちらへどうぞ」

門番は勝麟太郎一行を本堂をから廊下を通り、離れのお堂に案内した。日はもう暮れて、辺りはかなり暗くなっていた。

「こちらです」

と門番が引き戸を開けると、そのすぐそばに白髪交じりの男が座っていた。引き締まった顔つきをしているその男は、鋭い眼光でこちらをにらんだ。

「おお、辰五郎親分！しばらくだったねえ」

勝麟太郎は白髪交じりの男に声をかけた。白髪交じりの男は勝を見ると先ほどまでの鋭いまなざしがやさしい目つきに変わり、

「勝先生、きてくれたかい」

と相好を崩した。

「で、今日は誰が打つんで」

「この二人さ」

勝麟太郎は、龍馬と南方の方を見やった。

「へえー、先生、今日はまた妙な御仁をつれてきやしたね。こちらの方なんざ、あっしにゃあ何をなすってるお方なのか全くわからねえ」

辰五郎親分は、ワイシャツ姿の南方を上から下までなめるように見てそう言った。

「こいつはよ。洋行帰りでな。で、こんななりをしてるんだが、どうやら博徒らしいんだ」

「そうですかい。ここいらの博徒なら、あっしは大体知ってるはずなんですがね。こちらは見覚えがありやせんねえ。。まあ、勝先生のご紹介なら、あっしはかまいやしませんが」

「親分、すまねえな。じゃあ、こいつをコマ（木札）にかえてくんな」

勝麟太郎は、懐から小判の束を取り出して、辰五郎親分に渡した。

「ひい、ふう、みい、、、全部で十両。確かに」

辰五郎親分はそう言って金額を確認すると、帳場のようなところから、木札の束を出してきた。

「この木札、一枚が一朱で、十両分、八十枚の束が二つありやす」

「おっ、すまねえな」

このころの通貨単位は、一両が四分に相当し、一分が四朱に相当するものだった。現在の貨幣価値に置き換えてみると、一両につきだいたい十万円程度で換算しても十両なら百万円以上の値打ちはあるだろう。

勝麟太郎は、木札の束を受け取ると龍馬に木札を手渡し、こう言った。

「龍の字、お前さん、この南方殿と一緒に、このコマ増やしてきな」

「勝先生、こんなにたくさん、困るぜよ。自分の銭で打つきに」

「なあに、遠慮するこたあねえよ。こいつはお前さんの給金だ」

「給金？わしゃあ、先生の私塾に弟子入りした身じゃきに。給金をもらうどころか、月謝を払わんといかんぜよ」

「お前さん、おいらの弟子になると言っただが、おいらの私塾で蘭学を学びたいわけじゃねえんだろ？おいらと、この日本の国を良くするために働きたいんじゃないのかい？お前さんには、これから働いてもらわなきゃあいけねえ。こいつあ、そのための支度金よ。ま、当分はこれ以上払わねえけどよ。」

「ほいたら、これで負けてもうたら、わしゃただ働きちゅうことかえ？」

「おうよ。ここでひとつ、凌いでみな」

「ほいたらひとつ、やったるかえ」

龍馬はハラを決めたようだった。

「で、どこでやっとするがかえ」

「あそこだよ」

勝麟太郎は、お堂の隅の一角を見やった。よく見ると、薄暗い中にろうそくの火が何本か灯り、少し薄明るくなっているところがあった。そこには何人もの人間が座っていた。どうやらこの人たちが博打を打っているらしい。

（何をやっているのかな）

南方はそう思い、薄明るくなっている一角を注視した。注視していると、そこから人の声がいろいろと聞こえてくることに気づいた。あまり大きな声ではないが、確かに聞こえてきた。

「丁！」

「丁！」

「半！」

「半方ないか、半方ないか」

「半！」

「丁半コマそろいました。勝負。五二の半」

「あ〜」

（丁半博打だ！）

南方は気づいた。龍馬も丁半博打の声が聞こえたのか、南方と顔を見合わせた。

丁半博打は賽を二つ使ってやる博打で、出目が偶数が奇数かを当てる博打だ。偶数なら丁、奇数なら半だ。当たると、テラ銭を天引きした金額で配当がもらえる。

（どうせもともと何もないんだ。丁半博打はやったことはないが、ここはやるしかない。）

南方もハラをくくった。いったんハラを決めてしまうと、今度はワクワクしてきた。

「龍馬さん、どうします？」

南方はすこし上気した顔で尋ねた。

「ほうじゃのう...」

龍馬は少し考えてこう言った。

「コマは半分づつにしよう。半分はおまんにやるき、おまんはおまんやれ。わしはわしでやるき。どちらかがダメになっても、どちらかのコマが残っていれば、丁半じゃ。すぐに元に戻す算段はつく」

龍馬は二つある木札の束をひとつ南方に差し出した。

（リスクヘッジか。それもそうだな）

南方もその案を肯定的に考えていた。

「じゃあ、そうしましょう。後のことは様子を見て考えましょう」

「よっしゃ。ほいたら、いくぜよ」

南方は龍馬から木札の束を受け取り、二人はお堂の隅の薄明るい一角へと歩いていった。

「お前さんも行って見てきな。たぶん、勉強になると思うぜ。おいらは辰五郎親分と話があるからよ」

勝麟太郎は、橘恭太郎に二人の博打を見に行くよう勧めた。

（うーん、本当に勉強になるのだろうか）

橘恭太郎はそう思いながらもとりあえず返事をして龍馬たちの後を追っていった。勝麟太郎は意味ありげな笑みをうかべ、橘恭太郎を見送った。辰五郎親分は勝麟太郎と二人になったところで、すこし楽しそうな顔で話しかけた。

「しかし、勝先生も酔狂だねえ。大金持たせて博打を打たせて弟子の器を見るなんざ、とても幕府のお役人のすることとは思えないねえ」

「こいつは幕臣としてのおいらがやってることじゃねえよ。これからのこの国をなんとかするには、ああいうやつらの力が必要だからやってるだけのことさ。ところで、親分にちょっと見てもらいてえもんがあるんだけどよ」

「なんだい？」

「ここじゃなんだからよ。いつもの所にいこうや」

「おっと、そうだったね。いきやしょう。おい、ここ頼むぜ」

辰五郎親分は近くの若い衆に声をかけると、勝麟太郎と連れ立ってお堂を出て行った。

「ちょいと、すまんのう」

坂本龍馬は、盆ゴザの前に座っている人たちをかきわけ、自分たちの座る場所を確保した。南方雀も、龍馬の隣に座った。

盆ゴザというのは畳をタテに並べたものに白布をかぶせ、びょうを打って張ったものだ。コマ（木札）を張るのもサイを入れてツボを振るのもこの上で行われる。

「恭殿は打たんがかえ？」

龍馬は振り向き、あとから追いかけてきた橘恭太郎に声をかけた。

「私は、ここで控えております」

恭太郎はそう言うと、龍馬たちの後ろに座った。

（さて、ここからはちょっと観察タイムだな）

南方はそう思っていた。コマは持っているが、張り方も場の決まりごとも知らない。この辺りは見て覚えるしかない。

周りを見てみると、盆ゴザの向こう側に三人の男が座っていた。いずれもさらし姿で正座していた。肩から胸、腕にかけて見事な刺青が入っている。ツボ振りの正面には、これもさらし姿の男が座っていた。掛け声を聞いていると、この男の声が場をリードしているようだった。

「龍馬さん、あの人は？」

南方はツボ振りの正面にいる男を目で示して聞いてみた。

「あれは中盆じゃ。こちら側に座っちゃあいるが、この博打を仕切ってるヤツでの。配当なんかもアイツがやるんじゃ。まあ、みとき。おまん、中盆もおらんような場で打ってたんかえ？」

龍馬はちょっと不思議そうな顔をしていた。

「さあ、丁半、どっちもどっちも！」

中盆が声を張ると、他の三人の男も声を出し始め、周りのお客たちはコマを張り出した。

「丁」

「半」

と声に出すものもいれば、黙ってコマを置くものもいた。

（そうか、コマを横に置くと丁、縦に置けば半になるのか。なるほど、そう張るのか。。コマを盆に置けば張ったことになるわけだな？）

「丁は手どまり。半方ないか、半方ないか！！」

中盆がの掛け声が変わった。張りを見ると、丁方の方が確かに多い。

（なるほど、丁方が多いからここで丁方の張りはストップということか。こうして調整するわけか。なるほど...）

丁半博打は丁方と半方の張りが均等にならなくてはいけない。どちらかのコマが足らないと主催者が不足分を埋めなくてはいけないので、主催者側はコマをそろえるように掛け声をかける。

「双方手どまり。丁半コマそろいました。勝負ッ！」

中盆が声をかけると、ツボ振りがツボを開いた。

「四二（シニ）の丁ッ！」

目が確定すると、張っていたお客たちからはいろんな声がもれた。

「あ〜」

「クソッ」

「よしよし」

今まで息をのみ、ピンと張りつめていた空気が少し弛緩する瞬間だ。半方に張ったコマは中盆に集められ、中盆はロクに数えもせずに配当を速やかに出していった。

（すごいな、この人。たぶん、張りが確定した時点でもう各自の配当は計算済みだな...場を仕切る力量というの分る気がする...この人はあなどれないぞ。）

南方は中盆の能力に驚いていた。また、場を暗黙のうちに仕切り、コントロールしているのも彼だということも確信していた。

（いずれにせよ、もう少しケン（見）だな）

南方は観察を続けていた。

（このにおい、どこかで嗅いだことがある気がするんだよな）

南方は隣の男に染み付いているにおいが気になっていた。

南方の隣に座っている男は、武士っぽくもなく、かといって町人のようでもなかった。他の周りの客はなんとなく分かるが、この男だけはよくわからなかった。

武士は着流しの浪人風であれ、羽織袴姿であれ、刀を自分の横に置いているのですぐ分かる。商家の旦那さん風もなんとなくわかったが、唯一分からないのがこの男だった。

刀は持っていないし、マゲもお武家さんたちのマゲとも商家の旦那さんのマゲとも違うようだった。この男を観察していると、手の動きがなんとなく、なよなよしていることに気づいた。

（そうか、この男、歌舞伎役者だ。それも女形。このにおいは、おしろいのにおいだ。思い出した。昔、ばあちゃんが使ってたやつだ）

南方はどうしても素性がわからないこの男が気になっていたが、これで丁半博打を打っているメンバーがなんとなくつかめてきた。丁半博打はツボ振りとの勝負であると同時に一緒に打っているメンバーとの勝負でもある。南方はまず打っているメンバーを把握することに注力していた。南方が把握したところでは、こんなメンバーが丁半博打を打っていた。

一番左側には、浪人風の男が座っていた。もう負けが込み、ふところがさびしめなのか、ツキの具合を見ているのかはわからないが、ちびちびと張っていた。

その右隣には「伊吹屋さん」と呼ばれている商家の若旦那風の男がいた。廻銭で打っているらしく、先ほど帳場から木札を持ってきてもらっていた。

さらにその右隣には、平吉・政吉という職人風の男二人が座っていた。話を聞いていると、どうやら給金をもらうとこの博打場で打つ、博打好き人間のようだ。

中盆をはさんで、先ほどの歌舞伎役者がいた。歌舞伎役者は張りは比較的大きいが、タイミングを見計らって張るようにしているようだった。南方は、出目の傾向と自分のカンで打つようなタイプと見ていた。

その横に南方、龍馬と並んですわり、その横にはどうやら地方から来ているらしい、言葉にすこしなまりのある武士が座っていた。江戸勤番となり、江戸で羽をのばしているようだった。一番右側には、頭巾をかぶったお武家さんが座っていた。見るからに身分の高そうな感じだが、頭巾のお武家さんはなかなか張らなかった。張ってもコマを合わせて張るぐらいで、積極的に張っている感じはなかった。

（さて、じゃあ胴元の方を中心にしてみるか）

南方は少しづつ観察する角度と対象を変えていった。

「南方殿、張らんがかえ？」

龍馬は南方に聞いてきた。龍馬は先ほどから様子を見るようにちびちびと張り、取ったり取られたりしていた。始めてからもう十回以上はサイが振られているが、南方はまだ一度も張っていない。

「ええ。まだケン（見）です」

「わしゃあ、この場の雰囲気はなんとなくわかったぜよ」

「へえ、そりゃすごい」

（龍馬さん、あのことに気づいたのかな？）

実は南方は場を観察するうちに、あることに気づいていた。勝ちに結びつけるため、さらに深く観察と推理をしているという状態にいた。

（どれどれ、ちょっと龍馬さんの張りも見てみるか）

南方は龍馬の張りも観察することにした。

半に一分張り→負け

丁に一分張り→勝ち

丁に一両張り→勝ち

丁に二両張り→勝ち

ここ最近の出目は四回連続で丁が出て、うち三回をモノにしていた。

（はは一ん、そういうことか。さすがに分かってるな。ツボ振りが上手なら、それで勝てるかもしれないな。。）

南方は龍馬の張りをそう見ていた。

（じゃあ、オレもそろそろ張るか。オレもだいぶ分かってきたよ。龍馬さんとは少し違うけどね）

「龍馬さん、じゃあオレも張るよ」

「ようやく張る気になったかえ。わしゃあ、もう張らんのかとおもうちょっとぜよ」

南方は、ここへ来てようやく張る気になった。

龍馬と南方が盆ゴザの前に座ってから、一時間半が経過していた。

第十話 ツラ目読み

「入ります。」

ツボ振りは低くも張った声でクールに言うと、右手にツボを持ち、左手の指の間にサイを二つはさんで見せている。すばやくサイをツボに放り込み、盆ゴザに伏せると、ツボを斜めに何度か振って止めた。

「丁半、どっちも、どっちも！」

ツボを止めると同時に、中盆が声を上げた。同時にツボ振りに脇にいる合力も声を上げ、張りをあおり始めた。出目は丁方のツラ目（同じ目が連続して出ること）で、四回連続で丁が続いていた。

「半っ」

「丁っ」

丁のツラ目に張ることで三連勝していた坂本龍馬は、再度丁に張った。変わり目と見ている者も多く、半に張っている者もいた。大きく張っているのは、伊吹屋の若旦那と歌舞伎役者、頭巾のお武家さんで、いずれも変わり目の半に張っていた。

「半方手止まりっ。丁方ないか、丁方ないかっ」

大張りの二人が半に張ったため、半が手止まり（もう賭けられない）となり、丁が少なくなっていた。

「丁方、コマ合わせます」

南方雀は丁方の不足分、手持ちの五両ほぼ全額分の木札を押し出した。

（ほう、こいつわかつちよるのう。それにしても全額つかってコマを合わせるとは、思い切りのええ張りじゃ。）

と龍馬は思った。龍馬もこの張りは自信のある張りだった。

「双方、手止まり。丁半コマそろいました。勝負っ」

中盆が声を張ると、ツボ振りがツボを開けた。

「ゴゾロの丁っ」

「よーし、勝ちぜよ！」

「また丁かよ、くそっ」

場がざわついた後、龍馬と南方の前には配当の木札の山が中盆から押し出されていた。

「おまん、なかなかやるのう」

「龍馬さんこそ」

二人は口元に笑みをたたえ、顔を見合わせていた。

勝負は続いていた。龍馬は勝ったり負けたりを続けていたが、ここ一番の大きな勝負では勝負強さを発揮して、タネ銭の五両は二十両程度に増えていた。

南方もその後張りを続けていた。張っては勝ち、張っては勝ちの連戦連勝になっていて、他の打ち手もマークする存在になっていた。だが南方は決して先には張らず、全て最後にコマを合わせ

る形で張っていた。南方の手元には木札の山ができていた。

橘恭太郎は龍馬たちの後ろで見ている感嘆していた。

（このお二人はすごい。坂本殿はここ一番での勝負は決して負けぬ勝負強さを持っておられる。

南方殿は、張ったところは全部勝っておられる。この方は。。サイの目が見えるのか??）

「さあ、丁半、どっちもどっちもっ」

中盆は声を張って、張りをあおっていた。

（結構抜けたな。。状況的にはこのあたりがクライマックスというところか。）

南方は勝負どこを予感していた。

「半じゃ」

龍馬はこの勝負も率先してコマを張っていた。

（龍馬さん、その手が通用するのもあと少し。あとは引き際だな）

南方は勝負の引き際を考えていた。

「双方手止まりっ。勝負っ。　グニ（五二）の半」

「また半かよ」

「くそっ、やられた」

そんな声がまわりからもれていた。これで半が五回続けて出ていた。龍馬と南方は、このツラ目の波にのり、またコマを増やしていた。

（ハハッ、みんなわかつちやんのう。この分だともう一丁半かのう。）

龍馬はそんなことを思っていた。

まわりの空気が弛緩した勝負後の瞬間、配当を配る中盆の視線が、一瞬だけツボ振りに投げかけられた。次の瞬間、ツボ振りは左の方を向き、咳払いをした。

「ん、ん`ん`ん。失礼」

ツボ振りは正面を向くと、再び姿勢を正して座った。中盆が配当を配り終わると、弛緩していた空気に再び緊張感が戻り出していた。

「入ります。」

ツボ振りはツボをサイを取り、ツボとサイをわれわれに見せるいつものポーズをとった。ツボ振りはサイをツボに入れ盆ゴザに伏せた。

「さあ、丁半、どっちもどっちもっ」

ツボを伏せると、中盆は張りをあおりだした。

（こりゃあ、やられたぞ。ツボ振りめ、勝負後の空気が揺るんだ一瞬の隙について何かやりやがった）

南方は、咳払いからツボを伏せるまでの一連の動作に違和感を感じていた。

（でも、ここへ来て何をやるんだ？丁半の目ならこのツボ振りは自力で出せるはずなんだが？）

違和感は感じたものの、何が起こるのか南方には想像がつかなかった。

「丁っ。」

「半っ。」

場の張りは変わり目の丁、ツラ目の半とも五分五分といったところだった。

「半じゃ。」

龍馬はここが勝負どころとみて、再度ツラ目の半にコマのほとんどを張った。

「龍馬さん、ダメだ。コマを下げて。」

南方は龍馬にそう言った。

「何を言うがじゃ。ここが最後の勝負どころじゃき。それに、ここはツラ目の半に決まっちゃるぜよ。」

「確かにそうなんですが、ここは勝負しちゃダメです。」

「ほいたら、丁に張ればええかえ。」

「丁もダメです。ここはケン（見）です。」

「ようわからんけど、全部当てとるおまんが言うなら、間違いなかるう。おい、すまんが、ワシはコマを下げるぜよ。」

龍馬は中盆にそう告げ、コマを下げた。

「へい」

中盆はいつもの張りのある声ではなく、少し気落ちした声で返事をした。

（うん。やはりなにかあるな）

中盆の様子を見て、南方はそう確信していた。南方のとなりに座っていた歌舞伎役者は、南方と龍馬の一連のやりとりを見て、ケンにまわっていた。

「ええい、もうこれで最後じゃ。丁っ」

伊吹屋の若旦那はそういうと、変わり目の丁に残り少なくなったコマを全部張った。

「丁は手止まり。半方ないか、半方ないか」

その張りを受けて、丁方は手止まりとなり、中盆の声が変わった。

「よし、半方、コマ合わせよう」

頭巾のお武家さんが木札を押し出し、半方のコマを合わせた。

「双方手止まりっ。丁半コマそろいました。勝負っ」

中盆の声がかかり、ツボ振りは伏せられたツボに右手をかけた。

「おお、龍の字の野郎、なかなかいい張りしてやがるな。結構勝ってやがる」

新門辰五郎と勝麟太郎は、この賭場の屋根裏にある隠し部屋に来ていた。隠し部屋は光が漏れないよう、ろうそくを多く立てた賭場よりもかなり薄暗くしてあった。六畳ほどの畳が敷かれた部分と、床板がむき出しの部分が半々になった細長い部屋だった。

勝麟太郎は床板をすこしはずした隙間からこの勝負を見ていた。

この隠し部屋は、賭場をすこし違った角度から見て、客を監視するためにあった。勝は弟子たちを賭場につれてくるときには、いつもこの部屋で弟子達を観察していた。

「それにしても勝先生、先生が連れてきたあの博徒はすごいねえ。うちのツボ振りが出す目をきっちり読んで張ってますぜ。うちの若いツボ振りじゃあ、相手にならないねえ」

辰五郎は参ったなあというような表情をし、頭をかいていた。

「そーいやあ、今日のツボ振りは、いつもの仙吉さんじゃないねえ」

「仙吉も最近は毎日振ってるわけじゃあなくてね。若いやつも場数を踏ませなきゃいけねえってんで、最近は若いのが時々振ってるんでさ。仙吉相手だとうちはいかねえと思うんですがねえ」（今日は運も味方してたってことか。あいつら、ツキも持ってやがる）

勝麟太郎はそう思うと、自然に口元が緩み、笑みが浮かんでいた。

「で、勝先生、見せてえものってのは、それですかい？」

辰五郎は勝が持って来た段ボールを目で示した。

「おう、こいつなんだがよ。あの南方雀ってえ博徒が持ってたんだが。辰五郎親分、一緒にみちゃあくんねえかい？清国の花札みてえなもんだっていうんだがよ」

「ほう。そいつは面白いねえ」

勝と辰五郎は賭場のぞきをやめ、段ボールの近くに座った。

「あっしにゃあ、読めねえ文字が書いてあるねえ？。。アル。。ティマ？」

「こいつかい。こいつは、西洋の言葉だねえ。AMOS、アモス、アルティマ。意味はおいらもわからねえ。とりあえず、中をあらためるとするか。」

勝は蘭学を学んでいたのでアルファベットは読めるようだ。勝は段ボール箱を開け内容物を取り出し、畳の上にあけた。

「ほう、こいつは...」

二人は、麻雀牌を見て驚いた。

「確かに花札みたいで綺麗なもんだねえ。絵というよりは紋様だが、綺麗な細工ものだねえ」

辰五郎はフィルムに包まれた麻雀牌の筒子のブロックを手に取り、しげしげと眺めながらそう言って感心していた。

「こっちは漢字だ。確かに清国のものには間違いなさそうだな。こっちは一から九まで書いてある。どうやら花札と同じで、こいつは数字を使った遊びみてえだな」

二人はしばらく無言のうちに麻雀牌に見惚れていた。

「辰五郎親分、こういうもんなんだが、何かうわさにでも聞いたことはねえかい？」

「こんなものは、見たことも聞いたこともないね」

「やっぱりそうかい。じゃあ、こいつは本人に聞くしかなさそうだな」

勝は辰五郎にも分からないと言われ、ちょっとがっかりした様子だった。

「それにしても勝先生、こいつはどうやら博打の道具には違いねえようだが、数も種類も多いねえ」

「どういうことだい？」

勝は辰五郎に聞き返した。

「花札ってえのは、松から桐まで、十二種類の札がそれぞれ四枚で四十八枚で遊ぶもんだ。それがこいつは一から九までのものが三種類あって、それぞれ四枚ずつある。さらには文字が書いてある札もあって、あわせると百枚以上の札があるわけだ。それだけの札を使って遊ぶってこたあ、かなり難しい遊びじゃないですかねえ」

そう言うと、辰五郎は麻雀牌から勝の顔へと目をやった。

「確かに。将棋の駒は八種類で四十枚しかねえ。囲碁は升目は三百六十一あるが、石は白と黒だけだ。そういうことから考えても難しそうな博打ではありそうだな。少なくともこれだけの札を使って遊ぶものはこの日本にはないかもしれねえ」

勝はそう言うと腕組みをして考え始めた。

（どうしてあの南方という男は、こんなものを持っているんだ？西洋人のような身なりをしていたが、なぜ清国の遊び道具を持っているんだ？？わからねえ）

そんなことを考えていたが、結論など出るはずもなかった。一方で辰五郎は、この博打道具に大いに興味を持った様子で、目を輝かせながら勝に話しかけてきた。

「勝先生、こいつはかなり難しい博打の道具には違いねえ。もしそうなら、勝先生やうちの先生にぴったりの博打じゃないですかねえ。いやね、うちの先生も頭がよくて博打好きなんで、ちょうどいいかと思いやして」

そう聞いて勝もこの遊びに興味がわいてきた。

「そいつぁいいや。では、あの南方雀とかいう博徒に教えてくれるよう頼んでみるとするか。おいらも一緒に聞いてみよう」

「そいつはありがてえ」

「博打が終わったら、ここへ呼んでちょっと話を聞いてみるとするか」

「わかりやした。おい。」

辰五郎は近くにいた賭場の若い衆を呼び寄せた。

「あのお二人が洗いなさったら（博打を終えたら）、こちらにお通ししろ」

「へい。わかりやした」

若い衆は返事をするのと階段を下へ降りていった。

「おっと、あっちの方もそろそろ山場だとおもいやすぜ」

辰五郎はいたずらっぽく笑いを浮かべながら言った。

「そうだな。今夜はいろいろと面白い夜だねえ」

勝はそう言うと、畳の間から床板のところへそろそろと歩いていった。静かに座り、床板をそっ

と外すと、また賭場ののぞき見をはじめた。辰五郎も勝の横に座り、一緒に見始めた。

（さて、やつらはどうなったかね）

勝は彼らの博打の勝敗にも、この後説明してもらう予定の「清国の花札」にも心を躍らせていた

。

第十二話 弟子入り

「丁半コマそろいました。勝負っ」

中盆が声をかけると、ツボ振りがツボを開いた。

「二六の丁っ」

中盆は半方に張られたコマを回収しはじめた。

「まったく、こんな目でしか勝てねえのか。。今日は運がねえな」

伊吹屋の若旦那は、勝ったにもかかわらず渋い表情をしていた。中盆が配当の木札を伊吹屋の若旦那に押し出した。

「あれっ、配当が少ないな」

南方雀は、伊吹屋の若旦那へ渡った木札を見て思わずそうつぶやいた。どうみても配当が二～三割少ない気がした。

「お兄さん、二六の丁はブタ目と言ってねえ。この賭場ではブタ目が出たときには、テラ銭の歩が上がるんだよ。」

南方の左どなりに座っていた歌舞伎役者が、南方にそう教えてくれた。

「ああ、そうなんですか。ありがとうございます。」

「わたしもお兄さんに教えられたからねえ。おかげでこの勝負、ケン（見）できたよ。あんがとよ。」

南方と歌舞伎役者は互いに頭を下げて礼を述べていた。

（そうか、あの動作はそういうことだったんだ。やはりこのツボ振り、自在に目が出せるってわけじゃないんだ。思ったとおりだな。でもまあ、これでこの博打の山場は終わりだな。あとは付け足しみたいなもんだ）

南方はそんなことを考えていた。南方は右どなりの坂本龍馬に話しかけた。

「龍馬さん、そろそろ頃合でしょう。洗いましょう（終わりましょう）」

「おお、おう、そうじゃの。ほいたら、これで洗わせてもらうき。失礼」

龍馬は中盆に向かってそう言うと、木札を持って立ち上がった。南方も席を立った。

「では、こちらへ。おい」

「へい」

中盆は、若い衆に目で指示を出し、帳場へ案内させた。

帳場で両替してもらうと、龍馬は二十両、南方は五十両ほどの現金になった。

「じゃあ龍馬さん、勝ち金を分配しましょうか」

南方は言った。元はといえば龍馬の給金をタネ銭としてはじめて博打で、危険回避のためにふところをわけたに過ぎない。公平に分配するのが筋だと考えたからだ。

「おまんは博打は強いが、人がええのう。今日のところは、わしら二人とも自分の才覚で増やしたんじゃ。今日の勝ちは、これはこれでええじゃろ。そん金は持つとき」

「でも...タネ銭は龍馬さんの給金だし...」

南方は困ってしまった。すると龍馬は少し考えてこう切り出した。

「ほいたら、金はええき。わしを弟子にしてくれるかえ？」

「え??な、何の？」

「博打に決まっちゃるぜよ。この二十両も本当は最後で取られちゃったぜよ。おまんが止めてくれたから今手元にのこっちゃる。それに、おまんの今日の張りはほとんど外してなかりょう。どうやったら、あんな神がかった張りが出来るんぜよ？」

「まあ、それは、それなりに理屈があるんです。」

「それぜよ。どういてそういうことがわかるんぜよ。。それをおしえとおせ。弟子にしとおせ！」

龍馬は土下座して必死に頼んでいた。

「龍馬さん、わかりましたよ。弟子にしますから。弟子にしますから手を上げてください。私は龍馬さんにそんなにされる人間じゃないですから」

南方はすっかり恐縮し、龍馬の弟子入りを受けてしまった。

「本当かえ先生。ほいたら今から、わしは南方先生の弟子ぜよ」

「もう、参ったな...」

南方は頭をかいて呆れ気味に笑っていた。龍馬もいたずらがバレた子供のように照れ笑いをしていた。いきなりの申し出に驚いた南方だったが、一段落すると勝麟太郎の姿が見えないことに気づいた。

「そういえば、勝先生が見当たりませんね。どちらへ行かれたんでしょう？」

「ほうじゃ。おい、勝先生はどこへいったがじゃ」

龍馬は、橘恭太郎と帳場にいる若い衆に聞いた。

「勝先生は、辰五郎親分とどちらかへいかれてしまいましたが」

恭太郎はそう答えて、帳場の若い衆に目をやった。

「へい。お二人が洗いなすったら案内するよう言われておりやす。こちらへどうぞ」

帳場の若い衆は、恭太郎の視線を受けてそう答えた。南方、龍馬、恭太郎の三人は賭場の若い衆の先導で博打場のあるお堂の裏手に案内され、勝たちがいる隠し部屋への階段を上っていった。

「よう、ご両人。勝ってきやがったな。」

勝麟太郎は薄暗い隠し部屋で龍馬たちを待ち受けていた。龍馬はすこし驚いて、

「勝先生、どういて勝ったとわかるがじゃ。」

「ここから、な」

勝は床板を一枚すこしずらして見せた。龍馬は隙間を覗き込んだ。

「こんなところから見ちゃったがかえ。勝先生も人が悪いのう。」

「ハッハッハ、ここだと全体がよく見えるし、親分の解説もついてるしな。」

勝と龍馬は顔を見合わせて笑っていた。ひとしきり笑うと、勝は南方の方へ向き直って話しかけた。

「そっちの南方君はすごかったな。さすがは本職の博徒だけのことはあらあな。親分の解説じゃ

あ出目がわかってるってことだったが、やっぱりそうなのかい？」

「そうですね。全部ではないですが、勝負どころは」

「そいつはすげえな」

さすがの勝もそこから先は言葉がでてこなかった。

「まあ、わしの博打の先生じゃき。こんくらいはやってもらわんと、話にならんき。ねや先生」

龍馬はそういうと南方に視線を送った。南方は龍馬の誇らしげな顔を見て照れ笑いしていた。

「なんだ、龍の字、お前さんこちらにも弟子入りしたのかい。昨日おいらに弟子入りして、今日はこちらさんかい。忙しいやつだねえ。南方殿、この龍馬ってやつはねえ、なにかに秀でた御仁を見つけると、すぐ弟子入りするやつでねえ。江戸に来る途中で瀬戸内の船頭にも弟子入りしちまうようなやつなんだよ」

勝は南方にそう説明した。事実、坂本龍馬は江戸に来る途中で船頭に弟子入りし、船の操作方法をマスターしていた。

（だがまあ、この兄さんは本物だな。龍の字が弟子入りするのもあたりめえかもしれねえな）

勝がそんなことを思っていると、龍馬が真剣な顔になって勝に問いかけた。

「で、勝先生。わしはこれで先生の本当の弟子にしてもらえるがかえ？」

（そうだ、勝先生はこの博打で坂本殿の何かを試そうとしておられたのだ。坂本殿は博打には勝ったが、勝先生のご判断はどうなるのだろう）

恭太郎は青龍院に来る途中での勝との会話を思い出していた。

第十三話 麻雀の先生

「そうだな…」

勝麟太郎は坂本龍馬と視線を合わせた。龍馬の顔は真剣だった。

「おいらは今まで、自分の私塾の塾生を何人もこの賭場に連れてきたんだ。龍の字、どうしてかわかるかい？」

「わからんぜよ」

龍馬がそう答えると、勝は視線を外し、腕組みをしてゆっくり歩きながら話し始めた。

「徳川の世は、天下泰平の世の中が二百五十年も続いちゃった。まあ、世の中だから島原で一揆が起こったり、飢饉が起こったり、上方では大塩平八郎が挙兵したりいろいろあったが、それも幕府が収められる程度のものさ。だが今度ばかりは幕府の力だけではどうにもならねえ。なにせこの日本より国力が上の西洋の国に囲まれちゃってんだからな。しかもヤツらは賢いときてる。その辺は昨日教えたよな、龍の字」

勝は龍馬に再び向き直って言った。

「おお、おう、そうぜよ」

龍馬はすこしうろたえたが、しっかりそう答えた。

「これからのこの国は、攘夷派、開国派、幕府、外国、いろいろ入り乱れて動乱の世の中になっていく。そんなときに今時の徳川の禄を食んでるヤツらじゃあ、ちと弱えんだよ。動乱の世の中で切った張ったしながら動乱をくぐりぬけて、自分も生きていけるようなヤツが…おいら欲しいんだよ」

そう言うと、勝は咳払いを一つして立ち止まり、再び話し始めた。

「この博打場ってのはよ、おいら、これから来る動乱の時代そのものだと思うんだよ。胴元は自分で混乱を作っておいて儲けようとする西洋諸国さ。張り子はなんだかんだいっても、胴元よりも立場が弱いおいらたち日本だ。この中で自分の持てるものや知恵を使ってどう生き抜くか。おいらはそいつが見たかったのさ」

「ほいたら、、わしは…」

龍馬は自分を指差しながらおそろおそろ聞いた。

「ああ。上出来だ。塾生じゃなくて、おいらの弟子として認めるよ。いい張りしてたし、ツキも持ってたな」

「ツキ？」

龍馬は不思議そうな顔をして勝に聞き返した。

「南方殿だよ。最後の張りは勝っても負けてもいい張りなんだが、張ってたらスッテンテンだっただろ。そうならなかったのは、お前さんの持ってるツキだよ」

「おお、そうじゃった。南方先生、恩に着るぜよ」

龍馬は南方の両手を取って言った。その様子を見て、勝は笑いながら言った。

「ハハハ、最後の張りは勝っても負けても弟子入りは認めるつもりだったよ。ここからお前さんたちの張りを見るのは、なかなか面白かったよ。今まで連れてきたヤツらの中では一番面白か

った。以前に連れてきた蘭学塾の塾生たちは、どうしても頭でっかちでね。ああいう生きるか死ぬかの大きな張りをするヤツはいなかったよ。じゃあ、その大きい頭でこの賭場のからくりを見抜けたかといえ、そんなヤツもいなかったしよ」

「賭場のからくりって...なぜよ？」

龍馬は勝に聞き返した。

「まあ、そのあたりは道々話すさ。ところで南方殿。あいつのことなんだがな...

勝は畳の間に出してあるアルティマの麻雀牌に視線をやった。

「悪いんだが、中をあらためさせてもらったよ。あいつあ、清の国の花札ってことだが、いったいどういうものなんだい？いやなに、おいらもこちらの辰五郎親分も興味津々でねえ。ちょっと教えてもらえるとうれしいんだが...

「いいですよ。それでは、下の盆ゴザと同じものをここに作ってもらえますか？大きさは一畳ではなくて、半畳をお願いします。あと、床に直接置くのではなくて、少し高くしてください。高さは...そうですね、このぐらいで」

南方は両手で五十センチくらいの幅を示して見せた。辰五郎がこの申し出に反応した。

「わかりやした。作りやしょう。おい、今言われたとおりに準備しな」

「へい」

辰五郎は南方たちを案内してきた若い衆に指示した。

（何か、変なことになってきたな...勝麟太郎と新門辰五郎に麻雀を教えるだって？でも、麻雀を広めるのはオレの仕事のひとつでもあるしな...まあやってみるか）

南方はそんなことを考えていた。

「それでは、まずさわりだけ説明させてもらいます。この遊びは、『麻雀』といいます。そこに散らばっているのは、『麻雀牌』、略して『パイ』とも言います。お察しのとおり、麻雀はこの麻雀牌を主に使って遊びます」

（ほう、まーじゃんぱい、ねえ...）

辰五郎は南方の説明に聞き入っていた。勝や龍馬、橘恭太郎も真剣に聞いていた。

「この遊びは四人で行います。もちろんルールを変えれば三人でも二人でも遊べますが、基本は四人で遊ぶものです」

「ル、、ルール？」

龍馬がきょとんとして聞き返した。他の三人も意味がわからなかったらしく、顔を見合わせていた。

「ああ、すみません。規則です。遊ぶための方法のことです」

南方があわてて説明すると、四人の間にも「ああ、なるほど」という空気が流れた。

（外国語は使わないように気をつけて話してるつもりなんだけどな...なかなか難しいな）

南方は苦笑しながら説明を続けた。

「四角の卓を四人で囲んで遊びます。まず最初に座る場所を決めます。決め方もいろいろあるのですが、一番よくある席決めは『つかみ取り』という方法です。やり方は、『東』『南』『西』『北』の四枚を伏せておいて、東を引いた人が最初に座る場所を決めます。その人から左回り

に南、西、北という席順になります」

ここまで説明したところで、先ほどの若い衆がやってきて南方に声をかけた。

「客人、こんな感じでござんすかね」

畳の間を見ると、お膳が四隅に置かれ、その上に鉢をうった半畳分の盆ゴザがのっていた。

（そうか、この時代にはテーブルとかそういうものはないのか...）

そんなことを思いながらも、

「はい。ありがとうございます。では、後はあちらで説明しましょうか」

と礼を述べ、畳の間へ説明の場を移した。ここからは実技を交えての説明となる。

「では、ゲームの方法、いや、遊びの方を説明します。この麻雀をする台のことを麻雀卓といいます。この麻雀卓に四人が囲んで座ります。それから、まず麻雀牌を裏返してこのように混ぜます。これを洗牌といいます。しばらく混ぜたら、各自が麻雀牌の山を積みます。これを城壁牌といいます。普通は簡単に牌山といいます。牌山は十七幢積みます」

そう説明すると、南方は牌山を作り始めた。十七幢つつ四山を手早く積んだ。

「まず、最初に親を決めます。これも決め方はいろいろあるのですが、東を引いた人がサイコロを二つ振り、出目によって決めます。出目の割り当ては振った人から右回りに、二、三、四、五、というようになります。今回は、仮に私が親になったとして話を進めます。サイコロを振って七が出たとしましょう。先ほどの出目の割り当てで対面のこの山から取り出します。七なので、この山の八幢目から取り出します。四枚つつ親から順番に取っていきます」

南方は配牌を四人分順に取り出した。自分の配牌を理牌すると、手牌を倒して説明を続けた。

「あとは、このように一枚つつ牌を取ってきて、一枚切り出す。これを順番に繰り返して手を作っていきます。手は同じ牌二枚がが一组と、このような三枚の並びか、同じ牌三枚の組が四組できたら和了りとなります。この和了った形によって点数が異なります。花札には、青短、赤短、三光、四光といった役がありますが、似たような役が麻雀にもあります。こういった役がたくさんあればあるほど点数が高くなります。とりあえず、流れはそんな感じです。とりあえず、今説明できるのはそのくらいですね...」

四人は南方の説明を聞いてルールをそれなりに理解していた。だが、四人が見事だと思ったのは、南方の牌さばきの美しさだった。サイコロや花札を使った博打でも綺麗な手つきというのはもちろんあるが、この変わった形の麻雀牌を自在に操る美しさというものは江戸時代にはなかった。

「ホウ、南方先生はええ手つきをしとるのう。わしゃますます気に入ったぜよ」

龍馬が沈黙を破って話しかけた。辰五郎がそれに続いて質問した。

「南方先生、まだ麻雀の決め事というのは、いろいろあるんですかねえ」

「そうですねえ、たくさんあります。良ければ、また後日お教えできればと思うのですが」

「わかりやした。南方先生、ではまた後日いらしてください。こいつは、なかなか面白そうな博打になりそう。ねえ、勝先生」

辰五郎は、勝の顔を見てそう言った。

「おうよ。おいらもまた寄せてもらうよ」

勝もあたらしい博打にわくわくした様子でそう答えた。

「では、説明のためのテキスト、、いや書物を用意しますので、出来ましたらご連絡します」
南方も麻雀を教えることにすっかり乗り気になっていた。とんとん拍子に話がすすみ、龍馬はあわてた様子で南方に訴えた。

「わしが南方先生の一番弟子ぜよ。先生、わしにも教えてくれんと...」

「もちろんですよ。龍馬さんにもちゃんと教えます」

麻雀と南方に魅せられた彼らは、麻雀というゲームへの期待から子供のようなキラキラした目をしていて。だが、そんな中で橘恭太郎は一人浮かない顔をしていた。

第十四話 恭太郎の決意

勝麟太郎たち一行は青龍院から帰路についていた。坂本龍馬は提灯をもち、先頭を歩いていた。周りはもうすっかり夜も更け、夜四つになっていた。月が出ていて光は少しあったが、現代の街の明かりと比べたら格段の暗さだった。一行は龍馬を先頭に一団になって歩いていた。

丁半博打に勝った龍馬たちは顔に笑みをたたえていたが、橘恭太郎は一人浮かない顔をしていた。

（私は...このような鉄火場で博打一つ打つことができない、つまらない人間だ。これからくる動乱の世に私は必要な人間なのだろうか...）

勝の言葉と龍馬たちの丁半賭博での大勝を目の当たりにし、恭太郎はひとり沈んだ気持ちでいた。浅草寺の境内にさしかかると、龍馬は振り返って南方雀に尋ねた。

「南方先生は、家はどちらかのう？」

「実は、自分の家はよくわからないんです...」

南方はそう答えるしかなかった。すると、勝がすぐに口をはさんだ。

「ま、そうだろうな。恭太郎、お前さん面倒みてやんな」

「わ、わたくしがでございますか...」

急な話に橘恭太郎はうろたえた。

「おうよ。南方殿はこれからおいらたちに麻雀を教えなきゃならねえ。書き物の準備なんかもしなきゃならねえだろうから、お前さん手伝ってやんな」

「勝先生がそうおっしゃるなら...わかりました」

恭太郎は了承した。

「すみません恭太郎さん。あの、宿賃というか、このお金を使ってください」

南方は、博打の勝ち金ほぼ全額の五十両を恭太郎に手渡した。

「いえ、こんな大金は...受け取れませぬ」

「恭太郎さん、この金は私がここで生きていくための大事な金なんです。どうか、恭太郎さんが持っていてください。お世話にもならなければいけませんし、恭太郎さんのような実直な方にお任せするのがよいと、私がそう思ったのです」

恭太郎は、しばらく考えていたが、

「わかりました。それでは、これはお預かりいたします」

と返事をし五十両を懐にしまった。南方が恭太郎に言ったこの言葉には嘘はなかった。この場で博打も打たず、じっと控えている恭太郎の実直さを南方は見抜いていた。

（ここでは、当分この人の世話にならなくてはならない。この人は実直なお人柄だ。お金を預けても、欲に目がくらむようなことはないだろう。それに、この人には助けてもらった恩もある。お金を全部使われたとしても、それはそれで元っこだ）

南方はそんなことを考え、五十両を恭太郎に張った。

一行は暗い寺町の夜道を上野方面に向けて歩いていた。提灯を持っている龍馬は、並んで歩いて

いる南方に思い出したように話しかけた。

「ほうじゃ、南方先生。南方先生は、出目がわかったと言っちゃったのう。そのからくりをひとつ、わしに教えてくれんかのう」

「言ってみればなんてことはない話なんですよ。たぶん、龍馬さんの張りとも関係があります」「わしの張り？」

「ええ。龍馬さん、最初はツキを計るというか、目の流れを見ているというか、そんな感じで小さく張ってましたよね。それが途中から大きい張りもするようになってきたでしょう？あの辺は、龍馬さん何か気づいたんじゃないんですか？」

南方は質問してきた龍馬に逆に聞き返した。

「おお、あそこかえ。あそこはのう、あのツボ振りの気配が、みんなを見とるようで実は一方にしか気配がこっちらんことに気がついたんぜよ」

龍馬はアゴをなでながら続けた。

「あのツボ振りの気配は、ほとんどあの伊吹屋の若旦那にしかいっちょらんかった。他のやつらの張りには、まったく反応がないんぜよ。あの場ではツボ振りは伊吹屋の若旦那とだけ勝負をしちよるような感じじゃった。だからわしゃあ、伊吹屋の若旦那じゃのうてツボ振りに乗ることにしたぜよ」

「だから、伊吹屋の若旦那の逆張りをするようにしたんですよ。金額の大小もまねて」

南方はいたずらっぽい笑いを浮かべながら、龍馬に言った。

「なんじゃ、わかっちゃったかえ。南方先生。人が悪いのう。そのことは先生の張りとも関係があるかえ？」

「おおありですよ。龍馬さんの読みはおそらく正しいです。大きく張っている人は他にもいたのに、ツボ振りが気にしているのは伊吹屋の若旦那だけだった。おそらく、あの場の胴元の目的は伊吹屋の若旦那から金を吐き出させることだったんだと思います。だからあのツボ振りは伊吹屋の若旦那だけに注意を集中していました。たぶん、勝先生の言う『賭場のからくり』とも関係あることじゃないですかね」

南方はそう言うと、勝の方へ顔を向け、視線を送った。

「南方先生、その通りだよ。あの場は伊吹屋から金を引き出すために開いた場なんだよ。あの伊吹屋ってのは高利貸しでね。それも烏金を貸す日銭貸しのさ」

「烏金というのは？」

南方は勝の言う「烏金」の意味がわからなかったので聞いてみた。

「明けガラスがカァと鳴いてから、夕方カラスがカァと鳴く間に返す日銭貸しのことさ。やつぁアコギでね。日に五分も利息をとりやがるのさ。それで助かってる人間もいるが、高利で泣いてる人間もたくさんいらあな」

（なるほど、違法な闇金みたいなものか...）

南方はそう理解した。

「なるほど。そういうものなんですね。で、あのツボ振りは伊吹屋の若旦那の張り方のクセを把握していて、それを出す目の根拠にしました」

「クセって、どんなクセぞよ」

龍馬は興味津々で尋ねた。

「そんなに難しいことではないです。伊吹屋の若旦那は、目を追わないんです。特に負けたときは。ずっと同じ目に張って、ツボ振り和我慢比べをするんです。まあ、お金を持ってるからできる戦法でもありますね。何度か丁のツラ目、半のツラ目が続いたところがあったでしょう。あそこがそういうところだったんですよ」

「けれど、伊吹屋の若旦那もずっと同じ目ばかりに張ってるわけではなかったぜよ？」

「そうですね。アレは熱くなったときにそういう張り方をするみたいです。だからツボ振りは伊吹屋の若旦那をずっと観察し続けてたんです。それ以外の時は、ツボ振りも適当に目を出して遊ばせてみたいでしたよ」

「適当に目を出すって、、ほいたらあのツボ振りは自在に目を出せるがかえ？」

龍馬は少し驚いていた。丁半博打の出目は運否天賦のものだと思っていたようだ。

「私が見た感じだと、どうも自在というわけではなさそうでしたね。勝負目を出すときはゴゾロを中心に組み立てていたみたいです。ゴゾロの丁や五二の半といった目が多かったですし、それに…」

「それに？」

南方の話に龍馬はますます興奮し、目を大きく開いて聞いていた。

「サイに仕掛けがあるかどうかはわかりませんでした、ツボ籠の方には細工がありましたね。遊び目を出すときと勝負目を出すときでは、ツボの持ち方が違うんです」

「ツボの持ち方が違う？」

「ええ。サイをいれてツボを振るとき、ツボを伏せてからツボのふちのところで目を整えてました。ツボのふちにある小さなでっぱりでサイを返してみたいです。『入ります』っていうときに、ツボを見せるでしょ？あのときによく見てればわかりますよ。勝負目を出す時はサイを返すでっぱりを必ず左下に置いてました。サイの返し方も出したい目によってツボの操作に微妙に違いが出ます。最後の動作で返すみたいですが、手前に引いたり、奥に少し押したり、ちょっと強く押したりで目を操作してました。ゴゾロが基準の目になっているので、そんな時サイのうちひとつは五が必ず出ていましたよ」

勝たち一行はもはや言葉もでなかった。

（あのとき、南方殿はあの賭場でこんなことを見て観察していたのか。なんという観察力と推理力だ。どうしてあんなに当てられるのかわからなかったが…この方は本当にすごい）

恭太郎はあらためて南方の能力に感心していた。

（先ほどまで私は、鉄火場で博打も打てぬ自分に腹を立てていた。だが今は…このすばらしいお方のお世話をきちんとやらなくては。きっとそれがこの世のためになるはずだ）

このとき恭太郎はそう決意していた。

しばらく皆声が出なかったが、龍馬はしばらく考えて口を開いた。

「ほいたら、最後のブタ目はあれはなんぜよ。先生は張るなっちゅうたき、結局張らんかったけど、二六の丁やったぜよ。あれはどないなっちゅうがぜよ？」

龍馬の質問を受けて、南方は少し苦笑して答え始めた。

第十五話 一夜明けて

「最後の二六の丁のブタ目ですか。あれはですね...」

南方雀はすこし苦笑しながら答えた。

「あの時、配当を配りながら中盆からツボ振りに合図が出ていました。おそらくは伊吹屋さんの木札がだいたい出切ったから、ここでテラ銭を稼げ、というようなものだったんだと思います」

「ほう、なるほどのう」

坂本龍馬はアゴをなでながら感心していた。南方はさらに話を続けた。

「ツボ振りは合図を受けて、空咳をするフリをしてサイを取り替えました。あのツボ振りはゴゾ口を起点とした目しか出せないの、二六の丁のブタ目は出せないんだと思います」

「ほいたら、グラ賽っちゅうことかえ？」

「あの時はおそらくそうだと思います。あきらかに動きが怪しかったですし、あの時は私も何が起るかわからなかったの、ケン（見）するように言いました」

「なるほどのう。さすが南方先生ぜよ。わしの給金もおじゃんにならずにすんだき。おかげで助かったぜよ」

龍馬は南方の手を取って礼をのべていた。勝麟太郎はその様子を見て笑い出した。

「ハッハッハ、まったくそのとおりだ。給金なしにならなくてよかったなあ、龍の字よ」

「なにを言うがかえ。元はといえば、勝先生がよからぬことを企むからぜよ」

勝一行は笑いながら夜の寺町を歩いていた。

「ここが私の家でございます」

橘恭太郎は南方を自分の家に案内していた。勝は赤坂の自宅に、龍馬は京橋の桶町千葉道場へと帰っていった。恭太郎の家は、湯島樹木谷の旗本屋敷が立ち並ぶ一角にあった。

「では、中へ」

南方は恭太郎に言われるまま家の中に入っていた。恭太郎の家では恭太郎の母・栄と、妹・咲が出迎えてくれた。夕飯をご馳走になり、部屋に布団も敷いてもらえた。

（それにしても、なんてヘビーな一日だ。雀荘で牌を運んでいたはずが、いつのまにか江戸の町で倒れていて...勝麟太郎と坂本龍馬に拾われて丁半博打でしのぎを削って...で湯島と浅草を歩いて往復か。この時代の人にはよく歩くよなあ。本当に疲れた...）

南方は敷いてもらった布団にもぐりこむと、あっという間に眠りに落ちていた。

そのころ別室では、恭太郎が母の栄から質疑を受けていた。妹の咲もそばで給仕をしながら聞いていた。

「あの方は、どのような方なのでございますか？」

「南方雀殿という方で、勝先生の客人でございます」

「なにやら妙な着物を着ておいででしたが、西洋人でございますか？」

「いえ、西洋人ではございませぬ。洋行帰りのようでございます」

栄はまだいぶかしげに思っているようだった。

「さようで...で、今日はどちらへいらっしゃったのでございますか？」

「今日は勝先生のお供で...その、浅草の賭場に」

「と、賭場に？」

栄は驚いて腰をぬかし、咲も目を丸くして驚いていた。栄は腰を抜かしながらもなんとか言葉を口に出した。

「そ、そのようないかがわしい所に、け、汚らわしい！」

「ですが、母上。私はそこで博打をしたわけではありませぬ。私はただ...」

「あ、当たり前です！では、も、もしや、あの南方というお方は...」

「そうです。南方殿は博徒でございます」

恭太郎がそう言うと、栄はますます逆上してしまった。

「ばば、博徒！か、勝などという西洋かぶれの者と付き合うからこのようなことになるのです！」

栄はそういうとそのまま卒倒してしまった。咲は給仕の手をとめ、栄をかかえあげると栄の体をゆさぶった。

「母上、母上！しっかりなさいまし！母上！」

咲は何度も体を揺さぶると、栄はなんとか意識を取り戻した。咲はほっとした様子で言った。

「よかった...兄上、もう少し言い方というものがあるでございましょう。いきなりそんなことを言われては、卒倒するのも無理はありませぬ」

「咲、すまぬ」

（これが私の悪いところだ。坂本殿のようにうまく立ち回る術を私は知らぬ。また知ろうとも思わぬ...）

恭太郎は自分の不器用さをあらためて認識していた。

「咲、すまぬが南方殿に私の着物を出しておいてくれぬか。このご時世にあの身なりでは、外に出たところで斬られても文句は言えぬ」

「はい。兄上。では母上も、もうお休みくださいませ」

咲はそう言うと栄を抱きかかえて寝所に連れて行った。

咲は栄を寝かせると、箆笥から恭太郎の着物と帯を出し、南方の寝ている部屋へ行った。

「失礼いたします」

咲はそう言ってふすまを開けた。中を見ると行灯はついてしたが、南方はすでに布団に入っていた。

（もうお休みになられたのでございますね）

咲は静かに部屋に入ると南方の枕元に正座し、用意した着物を置いた。咲は何の気なしに南方の

寝顔をのぞき見た。

（なんとも整ったお顔立ち。このようなお顔立ちは江戸ではなかなか見かけませぬ...）

咲は南方の寝顔を見てそんなことを思っていた。南方は現代でも俳優で通用するような、大沢たかお似の容貌の持ち主だった。咲は思わず南方の寝顔にしばらく見惚れていた。

（わ、私としたことが。思わず見惚れてしまいした...）

咲は一人で顔を赤らめると、行灯の明かりを消し急いで南方の部屋を出て行った。咲は十九歳で江戸時代の当時としては結婚適齢期だった。縁談もないではなかったが、どうにも咲が気乗りがせずまだ結婚しないでいた。

他の時代からきた南方は咲の目にはとても新鮮に写ったようだった。

南方は夢を見ていた。

「社長、社長...」

場所は雀荘ジャンスリー。麻雀牌を持って階段を転げ落ちた南方は、友永未来に声をかけられて目を覚ました。

「ん、ここは...」

「もう、あなたの店よ。社長ってば何やってるのよ、もう」

「オ、オレの店？」

「そう、池袋ジャンスリーよ」

「う、上野じゃないのか？」

「もう、何言ってんのよ。いけぶくろ。ジャンスリー」

「そ、そうか」

「あなたにお客さんが来てるわよ。どういうお友達かしらないけど」

「わかったよ。今行く」

南方が店に出てみると、自動卓に龍馬、勝、新門辰五郎が座っていた。

「おー、南方先生。麻雀を教わりにきたぜよ」

龍馬が手を上げて南方を呼んだ。

「おいらもきたぜ。おいらにも教えてくれよ」

「オレもきたぜ、先生」

勝と辰五郎も南方に話しかけた。

（えっ、えっ、なんだこれは？）

南方は混乱していた。江戸の世界と現代の世界が入り混じり、よくわからない世界になっていた。

「ちょっとジャン、あの人たちはいったい何？ どういう知り合い？」

未来はふくれっつらで南方に尋問した。

「い、いや、なんというか、浅草の丁半博打で...」

と思わず南方は口に出してしまった。

「浅草の丁半博打ですって？ ジャンってば、そんなところに出入りしてるの？ もう、知らない！

」

未来はふくれつつらで出て行ってしまった。

「あ〜ちがうって、未来〜」

南方は手を伸ばしたが、体が動かなかった。

「なんだ、夢か...」

南方は汗びっしょりで目が覚めた。あらためて南方は周りを観察した。

外では雀が鳴いている。どうやら朝のようだ。障子越しに朝の光が部屋に入ってきている。部屋の中は暗い。行灯があり、電気もない。よく見ると自分が寝ていた枕もやたらと高い枕だ。

（くそう、なんだよ。夢じゃなくて、こっちの方が現実なのかよ）

そんなことを思いながら南方は障子を開けて外へ出た。庭があり、屋敷は白塀で周りを囲まれていた。門から外へ出ると、周りも同じような武家屋敷で白塀が続いていた。道はアスファルトではなく、土の道だった。

（やっぱりオレは江戸時代にきちゃったのか...昨日の丁半博打も全部現実か...）

そんなことを考えていると、後ろから声をかけられた。

「おはようございます。ゆうべはよく眠れましたか？」

声をかけたのは咲だった。

「ああ、咲さん、おはようございます。おかげでよく眠れました」

「それはよかったです。では、あさげの支度をいたしますので、どうぞお召しかえください。枕元にご用意してございますので。そのような格好で外へ出られると、あぶのうございます」

咲にそういわれて、南方は自分の格好を見た。スラックスにワイシャツ姿のままだった。

（そうか、昨日も言われたが幕末は西洋人を問答無用で斬ったりすることがあるんだったな）
南方は昨日勝に言われたことを思い出していた。

「はい。ありがとうございます。そうします。では後ほど」

南方は気恥ずかしくなって部屋に駆け戻った。

（しかし、かわいいお嬢さんだよな。清楚で愛想が良くて）

南方はそんなことを思っていた。咲はそれだけ清楚な美しさをもった武家のお嬢さんだった。南方は部屋に戻ると、用意されていた着物に着替えた。

（あれ、オレってここでいったい何をすればいいんだっけ？）

南方は改めてそんなことを考えていた。

「南方先生、筆と紙をお持ちいたしました」

橘恭太郎が書道用具を一式持ってきてくれた。

（そうだ、オレ麻雀教えるのにテキストを作らなきゃいけなかったんだっけ）

南方は橘家で先ほど朝食をごちそうになり、くつろいでいたところだった。南方はここで何をするのか、何をすべきなのか全くわからずにいた。だが、恭太郎にそう言われて新門辰五郎とそう約束していたことを思い出した。

（さてと、じゃあ書いてみるか。どう書くかな）

なんてことを考えながら、南方は部屋にある文机に座った。

（あれ？）

実際に座ってから、南方は自分で墨などすったことがないことに気がついた。書道用具一式があるだけでは、南方は手も足も出なかった。南方は恭太郎の部屋へ助けを求めに行った。

「恭太郎さん、すみません、墨汁なんかはありますか？」

南方は恭太郎に聞いてみた。

「『ぼくじゅう』でございますか？それはどのようなものでございますか？」

（そうか、オレたちが学校で使っていた墨汁なんてものはこの時代にはなかったのか）

南方は墨汁が近代に発明された便利なものであるということにようやく気づき、言い直した。

「あーいえ、なんでもないです。あの、実は私は筆で字を書くのは実はあまり得意ではないので、申し訳ないのですが指導していただけると助かります」

「わかりました。では、私から咲に指導を頼んでみましょう。咲は小さいころ手習いの先生によく字がきれいだとほめられておりました。私よりもいい書を書きますゆえ。南方先生はお部屋へお戻りになってお待ちください」

「すみません、よろしくお願いします」

南方は恭太郎にそう頼むと、部屋に戻った。

「失礼いたします」

部屋で待っていると、咲がやってきた。咲は部屋に入ると、文机に座る南方の横に座った。

「兄から聞きました。先生が文字を書くのにお困りだとのことで、お手伝いさせていただきます」

「申し訳ありません。まず、墨をすりたいのですが…」

「わかりました。では、これからお教えしますので、そのようにやってみてください。まずは、水をこのすずりの平らなところに少し落とします。それから…」

南方は咲に教えられるまま、初めて自分で墨をすった。すった墨をすずりの海に落とし終わると、その様子をじっと見ていた咲が口を開いた。

「では、実際に書いてみましょうか。何か書きたい文字はございますか？」

「はい。実は麻雀の教科書を作りたいので、まずは麻雀牌の種類について書こうかと」

「なにやらよくはわかりませんが、では、書いてみてください」

「はい」

南方は筆を取ると、すずりにすった墨をつけ書き始めた。南方は毛筆に墨で文字を書くのは小学校の書道の時間以来だ。

一．麻雀牌の種類

とまずお題目を書いてみたが、どうもしっくりこない。南方が小首をかしげていると、咲が助言した。

「南方先生、筆のもう少し上の方をお持ちくださいまし。それから持ち方でございますが…」

咲は実際に南方の手を取ると、指の位置を矯正した。

「これで、書いてみてくださいまし」

そう言うと、咲は南方に笑顔に向けた。

咲の笑顔に南方は不覚にもドキドキしてしまった。けがれのない咲の笑顔は現代の若い女の子にはない清楚な美しさがあった。現代の恋人である未来もそうだが、南方はこういった清楚な美しさの女性が好みだった。

「あ、ありがとうございます」

南方は少しドギマギしながら礼をのべると、続きを書き始めた。

（いやあ、参ったなあ…こういう女の子はどうも…）

三十代後半の南方は十九歳の咲を意識し始めていた。

「恭太郎、あの南方というお方は、何をしておいでなのですか？」

恭太郎の母・橘栄は恭太郎に南方のことを聞いていた。栄は南方をいぶかしく思っていた。

「南方殿は、麻雀なる清国の遊戯を教えるべく、教本を作っておいでです」

「まあじゃん？でございますか？」

「はい。なかなか頭を使う複雑な遊戯のようで、すぐに覚えられるような簡単なものではないようです。南方殿はその遊戯を得意にしているようでございます」

「江戸の町で皆がやっている将棋や囲碁などくらべてはどうなのでございますか？」

「私もよくはわかりませんが、百三十個以上の麻雀牌なるものを使って四人で行うようでございます。将棋は二人で四十枚の駒を行って行うわけですから、それだけのことを考えましても、なかなか複雑な遊戯なのは間違いないようでございます」

「左様でございますか」

栄は努めて冷静に答えた。

（あの南方という人は博徒といいつつも乱暴者でもないようだし、あながちボンクラというわけでもなさそうですね…）

栄は南方を見てそのように感じていた。恭太郎はさらに栄に話しかけた。

「私は勝先生から南方殿が麻雀の教本を作るために面倒を見るよう申し付けられております。それに…」

「それに...何でございますか？」

栄は恭太郎に聞き返した。

「南方殿よりお世話をするのにこの金を使ってくれと、五十両お預かりしております」

「ご、五十両もでございますか？そのような大金、ど、どのように？」

栄は目を丸くして驚いていた。五十両は当時大金で、現在の価値に直すと二百五十万～三百五十万ぐらいの価値はあるだろう。

「タベ、浅草の寺で開かれていた博打で勝ったのでございます。しかも、南方殿は運否天賦で賭けをしていたわけではございませぬ。胴元や場の状況を見抜いて勝つべくして勝った金でございます。南方殿は、そのような眼力をお持ちの方でございます。この五十両は、南方殿のために大切に使うつもりでございます」

「さ、左様でございますか...すごいお方でございますね...」

栄は今日もまた半分腰を抜かして答えていた。

「そうでございます。すごいお方なのでございますよ...」

半分腰を抜かしながら驚いている栄を、恭太郎は温かい笑顔で見つめていた。

南方が橘家で麻雀の教本を書き始めて三日が経った。

橘家の当主でもある恭太郎の尽力もあり、南方は橘家の客人として麻雀の教本を書いて暮らしていた。栄や咲ともすこしづつ馴染みはじめ、南方が橘家にいることに違和感がなくなっていった。

また、南方は江戸の町ともすこしづつ馴染みはじめていた。もともと髪は長いほうだったので、後ろで結わえるタイプのマゲも結うようになっていた。また、江戸の町の質素な食生活にも慣れ始めていた。

「これが、平和という役です。全部順子で待ちがこのように二面待ちになります。頭は翻牌になる牌で作ってはいけません。麻雀では狙うことが多い手役です」

「これが、ピンふ、でございますか...刻子がなく、全て順子で手牌を作るのでございますね」

南方は麻雀牌を実際に手元に置き、実際に牌をさわりながら教本を書いていた。また、同時にその教本と牌を使って咲に説明することも行っていた。レクチャーを実際に行い、わかりにくいところを教本にフィードバックするという方法をとっていた。

「咲さん、ありがとうございます。おかげで教本作りもはかどりますし、なによりすごく楽しいです」

南方は咲に頭を下げ、礼をのべた。

「とんでもない、南方先生、私の方こそ、南方先生に麻雀を教えていただいて、毎日本当に楽しいゅうございます」

咲も実際にこのマンツーマンの麻雀講習をととても楽しんでいた。

「そろそろ、一度新門の親分のところで講習をしようと思っているのですが、どうですか？」

「よろしいかと思います。それでは、辰五郎親分のところに文を書きましょう」

「よろしくお願いします」

（麻雀を教えるってすごく面倒なことだと思っていたけれど、やってみると楽しいものだな）
南方はそんなことを思い始めていた。

第十七話 麻雀教室

南方雀は新門辰五郎の賭場で麻雀を教える日々を過ごしていた。

二日～三日かけて橘家の咲や恭太郎相手に麻雀をレクチャーしながら麻雀の教本を練り上げ、一日は浅草の青龍院に出かけてその教本を基に麻雀を教えるというサイクルになっていた。

南方の麻雀教室には、新門辰五郎をはじめツボ振りの仙吉、南方が賭場に行ったときにツボを振っていた秀や中盆の政、合力の与惣次郎など辰五郎配下の名だたる侠客が参加していた。

侠客たちはさすがに覚えるのが速く、一ヵ月も経つと自分たちで麻雀を打てるようになっていた。ただ打てるようになるだけではなく、彼らはこのゲームが運が大きく作用するゲームであることもしっかり認識していた。またそんな中で技術や勝負度胸が大事だということにも気づきはじめていた。

ツイていてもミスをしたり弱気になったりすれば、相手に和了りをさらわれる。わかっていてもプレッシャーから変な打牌をすることもある。侠客たちは南方からのレクチャーというよりも実践でそういうことを学んでいた。

そんなある日、南方はいつもどおり青龍院にやってきていた。賭場が開帳される前の昼八ツから夕七つまでの二時間程度が麻雀教室の時間にあてられていた。

（おや？）

南方がいつものお堂に入ると、いつもと様子が違っていた。

「これ、この座卓すごいじゃないですか！」

南方はおもわず叫んでいた。今までは半畳の畳を盆ゴザに仕上げたものを使っていたが、今日は木枠もしっかりはまった本格的な座卓が鎮座していた。

「南方先生がいろいろ言われてたのを聞いて作ったんです。まあ、見てみておくんなさい」

新門辰五郎はそういうと南方を呼び寄せた。

「これって、もしかしてラシャ張りですか？あ、すこし柔らかめになってますね！これはいい...」

南方は卓の表面をなでながらうれしそうに言った。

「大変だったんですよ、南方先生。このラシャはもとはといえぼうちの火消しの半纏なんです。枠も職人に作ってもらって、この表面もすこし柔らかめがいいってんで、厚手の布を敷いたりして研究したんです」

辰五郎は少し自慢げにそう言った。出来のいい麻雀卓にすっかり気をとられていた南方だったが、麻雀教室に見覚えのない人がいることに気づいた。

「辰五郎親分、あの方は？」

「南方先生、見覚えありやせんかい？」

辰五郎は少し笑いながらそう答えた。

「ん？？もしかして...」

南方は記憶をたどって思い出した。丁半賭博で頭巾をかぶったお武家さんがいた。今日は頭巾をかぶっていないが、全体に漂うクールな雰囲気と鼻筋の通った端正な顔立ちが南方の記憶にひっ

かかった。

「初めてここで丁半博打をしたときに打っていた、お武家さんですか？」

「覚えていなすったかい。この方は一橋慶喜様といって、今の將軍様の後見職をやってなさる方でさあ」

（一橋慶喜って、あの徳川幕府最後の將軍になる、あの慶喜公か？この方が？）

南方はあっけにとられて声も出せずにいると、辰五郎が続けて口を開いた。

「慶喜様はオレみたいなはぐれもんとも付き合ってください、歴代の徳川様の中でもちょっと器の違うお方でな。実はこの卓の木杵も慶喜様が削ってくれたんでさあ」

「え！本当ですか！」

南方が驚いていると、慶喜が口を開いた。

「ハハハ、私は自分の屋敷の修繕も自分でやるのですよ。大工仕事はお手の物です」

（慶喜公というのは多才な方だと聞いたことはあるが...將軍になるような方が大工仕事までやるとは...）

將軍になろうかという人間が麻雀卓の杵を削ってくれるなど、封建社会に生きていない南方でも「こんなことはありえない」と感心せざるを得なかった。慶喜は引き続き言葉を続けた。

「実は私は近々京に上らねばならぬ。その前に南方殿に一度習っておきたいと思い、本日参上した次第。ここまで親父殿に教えられたことは南方殿の指南書を読むなどして理解しているつもりだ。本日は南方殿直々にお教え願いたく」

そう言うと慶喜は南方に頭を下げた。

「そ、そんな、私は慶喜様に頭を下げられるような人間ではありません。どうか頭をお上げください」

南方は慶喜に恐縮すると同時に、自分の身分の高さにもかかわらず技芸に対する尊敬の念を持っているこの一橋慶喜という男の器量に感服していた。

（そういえば、そんな人が他にもいたなあ...あ、龍馬さんか。でも龍馬さんのような陽気な中に策を秘めている方とは違う、クールな理性の中に熱い情熱を秘めたような方だなあ）

南方はそんなことを思っていた。また同時に一つわからないことがあった。

「あの...慶喜様の親父殿というのはどういうことなんですか？」

南方は辰五郎に尋ねた。

「実はオレの娘のお芳をよ。こんどの慶喜様の上洛にご一緒させることになっていてな。まあ妾なんだが、慶喜様は最近オレをそう呼んでくださってるのよ」

「なるほど、そうなんですか...」

南方はこの奇妙な縁に運命を感じずにはいられなかった。

南方の麻雀教室はルールを覚える初級編は終了していて、実践を中心とした中級編になっていた。この日も生徒四人が打ち、南方は後ろで見ていてアドバイスをするというスタイルをとっていた。

打っているのは、辰五郎、慶喜、ツボ振りの仙吉、中盆の政の四人。南方はもうすぐ上洛する慶

喜にアドバイスをしようと慶喜の後ろで見ている。

「リーチ」

「リーチ」

対面の辰五郎と上家の親の仙吉から立て続けにリーチが入った。慶喜は牌をツモると南方にアドバイスを求めた。

「南方殿なら、この場面はどうされますかな？」

「慶喜様はどのようにお考えですか？」

南方は逆に慶喜に質問した。南方は麻雀の実践ではその人の人柄が出る打牌をするのがよいことだと考えていた。それがその人の雀風を形成する元になると考えていたからだ。それで結果がでなければ、さらにその雀風を基に改善していくという方法をとっていた。

「対面の親父殿のリーチはかなり自信のある好形のリーチと見ている。二巡前にツモったところでおもわずほくそ笑んでいたゆえ。親の仙吉はおそらく二巡前に聴牌して他家をひきつけてのリーチだ。私の手も広い一向聴で良い手ではあるが、この二軒リーチにはおそらく勝てまい。ここは引くのが常道かと思うがどうだろうか」

「よく観察していらっしゃるんですね。慶喜様らしい冷静な分析だと思います。私もそのようにするのがよいと思います」

「やはりそうか。私は負ける戦はやらぬ主義でな」

慶喜は面子を中抜きしてオリていった。

（これが昨日今日麻雀を覚えたばかりの人間の打ち筋か？なんて冷静で理にかなった打ち筋をするんだろう。これが徳川始まって以来の俊英といわれる所以なのだろうか）

南方は慶喜の麻雀を見てそう感じていた。現代のプロリーグにそのまま突っ込んでもいい勝負をするんじゃないかとさえ思えた。

「南方殿、上で賭場を眺めながら一杯やりましょう」

麻雀教室を終えた後、慶喜は南方を賭場の屋根裏部屋に誘った。

「い、いや、私は、酒のほうは、その、」

南方は下戸だった。ビール一杯ぐらいが南方の限度だ。

「なに、かまわぬ。私も酒はさほど強くないのだ。無理には勧めぬ。それにここにはこの後開く賭場の準備に差し支えよう。とりあえずわれわれは上へ行くでしょう」

慶喜は屋根裏部屋へ南方を引き連れて行った。

（いや、参ったなあ。オレ本当に酒飲めないんだけど。それもたぶん日本酒が出てくるんだよなあ）

南方がそんなことを考えていると、あっという間に屋根裏部屋に酒と肴が準備された。南方は慶喜と差し向かいで飲めない酒を飲むハメになった。

「どれ、私がつごうではないか」

一橋慶喜は堤子（ひさげ）を持つと南方雀のそばにすりよってきた。

「も、申し訳ございません。どうも私は不調法なもので...」

南方は恐縮していた。

「なに、よいのだ。人間にはそれぞれ得手不得手というものがある。全てに整った人間などはおらぬのだ。この賭場にいるものなど、世間から見れば皆不調法者かもしれぬが、私はここにいる者たちが好きだ。変に飾らず素のままに生きている者が多いゆえ...な。それに私はここでは南方殿の麻雀の弟子である。私がつぐのが筋というものであろう」

慶喜はそう言うと、南方の猪口に酒をついだ。

「ありがとうございます。では私も」

南方は堤子を持つと、慶喜に酒をついだ。

（乾杯とかはさすがにないんだよな...）

南方は慶喜の様子をうかがっていた。慶喜は特に何をするでもなくちびちびと飲み始めた。南方も少し口をつけてみた。

（う、うまい。酒は苦手だが、こんなフルーティなみずみずしい酒は現代にもなかなかないぞ？）

南方はそんなことを思い、すこし驚いていた。

「どうなされた、南方殿」

慶喜は口元に笑みを浮かべて聞いた。

「いや、あまりにみずみずしく、さわやかなお酒なので驚きました。私が飲んでうまいと思うような酒はなかなかないのですが」

「それは越前の松平春獄殿が私のために送ってくる酒で、越前の石田屋という造り酒屋が作っている酒でな。皆は下り物の辛い酒を好むのだが、私はこのようなさわやかな風味の酒でなくては飲めぬのだ」

「私も下戸なのですが、この酒なら飲めそうです」

「ハハハ、南方殿とは、好みが合いそうだ。土州の山内容堂などは『このような頼りない酒では物足りぬ』などと言って見向きもしなかったが」

慶喜と南方は二人とも酒が強いほうではないが、酒を飲み笑い合っていた。

屋根裏部屋での酒宴はすすみ、南方はいつもより酒が進んでいた。だが、不思議と気持ち悪くはならず心地よい酔いを感じていた。慶喜と南方はいろんな会話を楽しんでいた。

「南方殿。しかし麻雀とは、本当に面白い遊戯であるなあ」

「はい。私も本当にそう思います」

南方はそう答えた。すると慶喜は少し間を置き、猪口を口に運びながら言った。

「私は麻雀を江戸の民や旗本たちに広めようと思うのだが、南方殿はどう思うか」

慶喜のいきなりの提案に南方は心臓が激しく打ちだすのを感じた。

「慶喜様はなぜ麻雀を広めようとお思いになったのでしょうか？」

南方は激しい鼓動を抑え、声を出すのも精いっぱい状態でなんとか声を出した。

「理由はいろいろある。江戸の町に新しい娯楽ができれば江戸はより明るい町になるだろう。囲碁や将棋は江戸の町でも打つものが多く私もたしなむが、麻雀にはあれらにはないよい要素がある」

「よい要素とは、何でございますか？」

「それは、『運』だ。今の幕府は欧米列強から開国を迫られ、右往左往しておる。私の考えでは、このままではおそらくはもう徳川の世はそう長くはないと思っている。此度私が京に上るのも朝廷との関係を密にし、この国の政治をなんとか収めるのが目的だ。うまく運べばよいが、おそらくはこれからの世の中は混迷の世となるだろう。そんな時に大事なものは、時勢に乗ることだと私は思っている。時勢に乗り、自分の運を使って勝負する。これからはそのようなことができる能力が必要になる。長く徳川の祿を食んできた御家人や旗本たちにそういうことをわからせるには、二人で行う戦の技量頼みの囲碁や将棋ではなく、四人で場を作り運を使って勝負する麻雀がよいと思うのだ」

南方は昨日今日麻雀を覚えたばかりの人間が、これだけ麻雀のことを理解していることに感動を覚えた。また、江戸の世に麻雀を広めることに努めようと強く思った。

「慶喜様、深い洞察本当にすばらしいと思います。私に出来ることであれば、なんなりと申し付けてください」

南方は思わず、手をついて頭をさげていた。

「南方殿、それではいくつかやってほしいことがあるのだが、頼まれてくれるか」

「はい。喜んで」

「では、今まで作成してきた麻雀の指南書をまとめよ。幕府御用達の書店より出版し、遊戯を広く普及させる。それから、麻雀を教える塾を開くこと。場所は今の居場所に近い空いている御家人屋敷をこちらで準備する。御家人旗本にも下知を下す。老中の板倉勝静と小笠原長行に申し伝えておくゆえ、沙汰を待つように」

「慶喜様、わかりました。ありがとうございます」

南方はそう言って深々と頭を下げた。南方は感動していた。慶喜から麻雀を広めるよう頼まれたことにも、自分がここで生きていくための道をつけてくれたことにも。

だが、この日の南方の記憶はここで途切れてしまった。飲めない酒だがあまりの口当たりのよさに飲みすぎた上に慶喜から思いも寄らない頼みごとをされ、興奮しすぎて倒れてしまったためだった。

慶喜は自ら辰五郎を呼びに行くと、南方を介抱するよう指示し、今度はひとり静かに酒を飲み始めた。

（私の配下にも、南方殿のような器量を持った部下がほしい。麻雀を学ぶことで平和ボケした御家人や旗本たちの中にも、南方殿のように時勢に乗って自分の運と器量とで未来を切り開いていく人物が出てきてくれればよいのだが...今の幕府の人間には幕府の仕事よりも博打を打ったり麻

雀を打ったりすることの方が大事に思えてならぬ...)

慶喜はひとり酒を飲みながらそんなことを考えていた。

「あ...いててて...」

南方雀は二日酔いの頭痛で目が覚めた。障子からは朝の光がやさしく降り注ぎ、外では雀の鳴き声がしていた。

（そうか、昨日は慶喜様に酒をすすめられて...うますぎて飲みすぎるなんて、なんてことだ）
そんなことを思い体を起こすと、周囲の様子がおかしいことに気づいた。南方の記憶は浅草青龍院の隠し部屋で途切れていたが、ここは湯島樹木谷の橘家のいつもの寝所だ。

（おかしいな、オレいったいどうやって帰ってきたんだろう？）

南方はそんなことを思いながら、とりあえず水を飲みに部屋を出て厨（くりや）に向かった。二日酔いでどがカラカラの南方は夢中で厨に行くと、水瓶からひしゃくで水をすくってむさぼり飲んだ。

「あゝー...はあ、はあ」

夢中で水分補給した南方は生き返った心地がするのと同時に息が少し荒くなっていた。

「ふふっ、南方先生、おはようございます」

水瓶の前に立って一息ついていた南方は、急に背後から挨拶をされ驚いて振り返った。橘咲だった。咲はちょうど米を炊いているところで、かまどの前で火を見ていた。南方が厨に来たときすでに咲はすぐそこで米を炊いていたのだが、南方は水を飲むのに夢中で咲に全く気づかなかった。

「あ、咲さん、おはようございます」

南方は昨晚記憶を失ったことに加えて、咲が今そこにいることに気づかず夢中で水を飲んで息があがっている状態であることも手伝って、ちょっと恥ずかしげに挨拶を返した。

「もう、昨晚は大変でございましたよ。先生」

「えっ、そうなんですか？昨日は私どうやって帰ってきたんですか？」

「辰五郎親分のところの方と駕籠で帰ってきたのでございますが、先生は全く動かず...ついてきて下さった皆様に寝所に運んでいただきました」

「そうだったんですか...ご迷惑おかけしてすみませんでした...」

南方はバツが悪そうに頭を下げた。

「いえ、よいのでございます。私は先生のお世話をするのが務めでございますゆえ...」

そう言うと、咲は明るい笑顔を南方に投げかけた。

「それはそうと、本日は麻雀の講義の練習はどうされますか？教本を書かれますか？」

咲は南方の今日の予定を聞いた。

「ええ、今日は教本を書こうと思います。一橋慶喜様にも教本を完成させるように言われましたし」

「ひ、一橋慶喜公でございますか？」

咲は驚いて持っていた竹筒を落としてしまった。橘家は旗本とはいえ、徳川家の将軍と会える立場にある旗本ではなかった。それが幕臣でも公家でも武士でもない人間が将軍の後見人である一

橋慶喜と会って話をするというのはとても信じられるものではなかった。

「そ、それは大変なお役目でございますね。咲も及ばずながらお力になればと...あっ、今あさげの支度をいたしますゆえ、どうぞお部屋でお待ちになっていてくださいませ」

「咲さん、いつもありがとうございます。では」

南方はそう言うと、部屋に戻っていった。

（昨日、南方先生にいったい何が起こったのでございましょうか...）

咲はまだ目を丸くしたままだった。釜では橘家のその日の米がぐつぐつと炊けはじめていた。

「ちょいとごめんよ」

その日の夕方、橘家に来客があった。

「勝先生...」

橘恭太郎が玄関に出ると、そこには勝麟太郎の姿があった。

「お呼びくださればこちらから参りますのに...」

恭太郎は自分の師とも仰ぐ勝麟太郎の来客に恐縮していた。

「いやいや、恭太郎。今日は違うんだよ。南方先生に用があつてな」

「南方先生に？」

「実はおいらもよくわからねえんだけどよ。今日は若年寄の小笠原長行様の使いみたいなものだ」

「小笠原様の？」

「おうよ。そういうわけだからちょいと上げてくんねえかな」

「どうぞ。おあがりください」

恭太郎は勝を座敷に案内すると、自室で麻雀の教本を書いている南方を呼んできた。

「勝先生、お久しぶりです」

南方は勝が控えている座敷にあがると、座って挨拶をした。

「おう、先生。先生も元気そうでなにより。で、先生よ、ちょっと聞きてえことがあるんだけどな...」

「なんでしょうか？」

「おめえさん、慶喜さんと会ったのかい？」

「はい。実は...」

南方は勝たちと行った丁半博打の賭場に一橋慶喜がお忍びで来ていたこと、一橋慶喜公が麻雀を気に入り、指南書を書き上げるよう言われたことなどを話した。話を聞き終わると、勝は納得したように話し出した。

「そういうことか。いや、今日若年寄の小笠原長行さんに呼ばれてお城にいったんだがよ。小笠原さんが言うにはよ、慶喜さんからの命で麻雀を旗本御家人に広めろと言われたと。で、湯島の旗本屋敷の橘のところにいる南方雀というのがいるから、そやつに麻雀の道場のようなものを作らせると。で、おいらにそのお世話をしてくれと。まあそういうことなんだがな...」

（慶喜様、もう動き出したのか。さすがに徳川始まって以来の俊英と呼ばれるだけのことはあ

って、やることは早いな)

南方は勝の話にうなづきながら、そんなことを思っていた。勝はさらに話しを続けた。

「麻雀の道場はこの近くの空いている御家人屋敷をもう割り当ててあるそうさ。人員については、新門の親分のところに若い衆を出してもらおうように話はつけてある。麻雀卓や牌についても今声をかけて調達してるってえことだ。他にも必要なものがあればおいらに言ってくれ。お上も手を貸してくれるそうだからよ」

「ありがとうございます。本当に何から何までやっていただいて...」

(もうそんなことまで手を回してるのか。慶喜様という人はできるビジネスマンみたいな人だな)

南方はそんなことを思いながらも礼をのべた。

「いいんだよ、先生。慶喜さんて人はそういう人だからよ。それはそうと、先生は麻雀の教本を書いてるそうじゃねえか。だいぶ出来てんのかい？」

「はい。ほとんど出来ています。今日も書いていたのですが、明日ぐらいには出揃うかと思います」

「そうかい。慶喜さんのはからいで、幕府公認の日本橋宋文堂っていう書店でそいつを本にして出版することになったらしい。木版を作らなきゃいけねえから、出来てるところまででいいからもらってきてくれってたのまれてんだけどな」

「わかりました。では、出来ている分は本日お持ちください」

「おう。頼むよ」

勝はそう言うと、出されたお茶をずずっとすすむように飲んだ。

その後三人は丁半博打の話や、昨日の酒宴の話などをして談笑していた。すると勝がふと気づいたように話を切り出した。

「そういえば南方先生。今度の麻雀道場の名前はどんなのにするつもりで？」

「名前、ですか...」

そういうと南方は腕を組んで考え始めた。すると恭太郎がこう言った。

「剣術ですと、『玄武館』とか『士学館』とかそのようなお名前になるかと。麻雀でもそのようなお名前ではいいのではないのでしょうか」

しばらく間をおいて、南方が腕組みを解くところ切り出した。

「『雀友堂』ではどうでしょうか。もちろん、麻雀道場として強くなるために稽古したり指導したりという剣術道場のようなこともやるつもりなのですが、麻雀は娯楽としての一面もすごく大事です。世の中のいろんな人にも麻雀を楽しんで打ってもらいたいですから、すこし柔らかい名前にしたいのですが、どうでしょうか」

「『雀友堂』か。いいんじゃないか？」

と勝が言うと、

「はい。よろしいかと思います」

恭太郎もそう答えた。

「よし。じゃあ、『雀友堂』になる御家人屋敷、皆で見に行くとするか」

勝はそういうと、脇においてあった刀を取り立ち上がった。

「はい」

南方も笑顔で答え立ち上がった。

（これができれば、おそらく日本初の雀荘だな。オレが作るなんて、何かウソみたいだな）
南方はそんなことを考えながらも、胸が激しく躍るのを感じていた。

第二十話 告白

日本初の麻雀道場「雀友堂」は幕府の力添えもあり、賑わいを見せていた。

雀友堂は湯島樹木谷・橘家そばの御家人屋敷に開かれた。運営メンバーは、南方雀・橘恭太郎・橘咲を軸に、新門辰五郎の賭場からツボ振りの仙吉と秀、中盆の政や与惣次郎が交代で来てくれていた。

カリキュラムも整ってきた。一通り打てるようになるまでの初級編は咲が中心になって指導し、ある程度打てるようになったところで恭太郎や南方が指導するというスタイルが定着した。咲の指導は女性らしいソフトな指導だが、恭太郎の指導は「道場」らしい割と厳しい指導だった。

（もともとは「道場を作れ」ということだったし、競技麻雀の勉強会みたいな雰囲気でも悪くはないな）

と南方は感じていた。恭太郎たちが指導する中級以上の指導は厳しかったが、咲がその厳しい中に花を添えていた。咲は入門者からも人気があり、そのおかげで厳しい指導を受けても脱落するものは意外に少なかった。

雀友堂に麻雀を習いに来るのは、主に旗本・御家人、そして江戸勤番の武士達だった。

彼らも初めは幕府からの御布令でなんとなく来るものが多かったが、大半は麻雀のルールを覚えて打てるぐらいにまでは上達していった。初級編を咲が担当しソフトに指導したことも大きかったが、南方が青龍院で麻雀を指導する際に書きためていったものを書籍化した日本初の麻雀の教本「麻雀指南」が出版されたことも大きく影響した。

麻雀の教本「麻雀指南」は日本橋宋文堂から出版され、雀友堂の道場生はこれを読んで麻雀のイロハを学んだ。咲の初級編はこの「麻雀指南」の内容を中心に組み立てられていた。

雀友堂はこうして麻雀を覚える「麻雀教室」、麻雀の腕を上げ精進する「麻雀道場」としての立ち位置を江戸の町で確立していった。

「先生、今日も終わりましたね」

橘咲は道場生が帰った後、雀友堂の後片付けをしながら南方雀に話しかけた。ちょうど午後の道場での実習を終え、夕七つ（だいたい午後四時ぐらい）になっていた。

「そうですね...」

南方は縁側に座ったまま少し浮かない様子で返事をした。咲はその様子を感じ取ったのか、片付けの手を止めて南方と一緒に縁側に座った。

「どうかしたのでございますか？」

咲が南方に問いかけると、南方はぽつぽつと話はじめた。

「江戸の町に麻雀が広がるのはよいことだと思うんですけど、私がここで本当にやりたいことってこういうことなのかなとちょっと考えてしまって...」

「今雀友堂でやっていることは、先生の本意ではないのでございますか？」

咲は少し驚いて聞き返した。

「いや、咲さんがやってる初級編は麻雀の入門としてすごくいいと思うし、恭太郎さんと厳しく

やる麻雀道場も昔やってた競技麻雀の勉強会みたいで、あれはあれでいいと思うんです。でも、みんながみんな麻雀を道としてとらえて精進するためにビシビシやるというのは少し違うと思うんですよ...」

南方は自分の胸に支えていることを咲に話した。

（こういうことを話せるのは、咲さんだけだな...）

南方は話し終わると、そんなことが心に浮かんた。

「『きょうぎ麻雀』とは、いったいどのようなものでございますか？『昔やっていた』というのは、それはどちらでおやりになっていたのでございますか？」

咲は南方の言っていることがよくわからず、南方に聞き返した。

（あっと、いけない、咲さん相手に話しやすいのをいいことに変なことを口走ってしまった...）
思わず南方は「しまった」という顔になっていた。

（咲さんには、私が未来から来たということを話してしまおう。みんなにずっとこのことを隠しておくのは難しいし、おそらく私自身にとっても良くないことだ）

そう感じた南方は腹をくくると咲に向かって話し出した。

「私は、実は遠い未来から来た人間なんです。私がいた未来では『競技麻雀』という麻雀があって、それは麻雀を道として極めようとする人間が打つ麻雀なんです。『競技麻雀』を打つ人はみんな今の道場生みたいに麻雀を日々研究し自分のものにするために実践を重ねているんです。実は...私も未来ではそういうことをやっていた人間なんです」

咲はしばらく黙っていたが、南方をじっとみつめて真顔で言った。

「先生、それは冗談ではなくて本当のことでございますか？」

「はい。本当です」

南方も咲をみつめて真剣にそう答えた。すると咲は目に涙を浮かべ、崩れるように南方に体を預けると肩を震わせて泣きはじめた。

「何から何まで違うお方だと思ってはおりましたが...先生は...そんなご苦労をなされて...さぞおさびしゅうございましたでしょうに...」

南方は咲の肩をそっと抱いて言った。

「もちろん、未来には私の友人も親兄弟もいますから。ですが、私は寂しくはありませんよ。咲さんや恭太郎さん、勝先生も辰五郎親分も私に本当によくしてくれます。私は全然寂しくなどはありませんよ、咲さん」

咲はしばらくそのまま泣いていたが、気丈にも顔を上げ南方の隣に座りなおした。涙のあとは残っていたが、肩の震えは自力でおさめていた。

「それでは、先生は雀友堂をどのようになさりたいのですか？」

咲は話を元に戻して聞いた。

「麻雀を極める『道』としての麻雀は今のまま続ければよいと思っているのですが、同時に楽しんで打つ娯楽としての麻雀を広めたいのです。それもお武家さんだけではなくて、江戸の普通の人たちや子供たちにも麻雀を楽しんでもらえればと思っています」

「確かに、今の雀友堂はほとんどが武家の方でございますし、麻雀道場としての色が濃うござい

ます。ですが、これから麻雀が先生の『麻雀指南』を通して広まっていけば、先生のおっしゃるような広まり方をするのではないのでしょうか。私も雀友堂の一員として、今日おっしゃった先生のお考えを心にとめておきます」

「咲さん...ありがとうございます」

南方は咲の方に向き直ると、そう言って頭を下げた。

「私の方こそ。先生...咲は先生が未来から来たということを打ち明けていただいてうれしゅうございます。このことは咲の心の中にしまっておきますゆえ、お困りの際はなんなりとご相談くださいませ」

咲はそういうと、立ち上がって雀友堂の片付けの続きを始めた。

（咲さん、本当にありがとう。打ち明けた相手が咲さんで本当によかった）

南方は片付けをする咲に思わず頭を下げていた。

第二十一話 麻雀の広まり

その日も南方は雀友堂で麻雀の指導をしていた。

「うーん、その手はそれ切りもありますが、こちらを切る手のほうが少し広いですかね。ほら、ここの受けが残りますし、こちらよりもこの受けの方が山にいそうでしょう」

「なるほど、そうですね」

雀友堂では机上の何切るではなく、実践の中で出てきた牌姿に対して指導するようにしていた。南方はこの方がより頭に入り、生徒も納得がいくだろうと考えていた。

「誰かおらんがかえ」

突然玄関先で呼びかける声がした。南方雀はその土佐弁と声色で坂本龍馬だとすぐにわかった。

「ちょっとすみません、仙吉さん、この卓お願いします」

南方は仙吉に指導を任せると、玄関に飛んでいった。そこには浅黒い肌に天然パーマの髪をざっくりと結った頭、そしてひとなつっこい笑顔の以前と変わらぬ龍馬の姿があった。

「南方先生、元気にしよかったかえ」

「龍馬さん、私の弟子なんですから勝手に入ってきちゃっていいんですよ」

南方はおどけてそう言った。

「おう、そうじゃったの。今日は先生にちょっと話しがあって来たぜよ」

「では、とりあえずあがってください」

そう言うと南方は龍馬を奥の座敷に案内した。龍馬は座敷にでんとあぐらをかくと、さっそく話を始めた。

「南方先生、見て欲しいもんがあるぜよ」

龍馬はそう言うと、背負っていた風呂敷包みを広げた。

「こ、これは…」

南方は風呂敷包みの中身を見ると、絶句した。

「ハッハッハ、驚いたかえ」

龍馬は高笑いをする、南方に視線を向けた。

「麻雀牌じゃないですか！」

驚きで絶句していた南方はようやく声を出すことができた。龍馬の持ってきた風呂敷包みの中身は麻雀牌であふれていた。一揃いというわけではなかった。木製の牌、骨牌、象牙の牌、牌の左肩にアラビア数字が彫られているものなど、本当に多種多彩の牌がいろいろと取り揃えられていた。南方は一つ一つ手に取って観察しながら龍馬に話しかけた。

「龍馬さん、すごいですね。これ、いったいどうしたんですか？」

「実は、わしゃあ長崎に『亀山社中』っちゅうカンパニーをつくったんぜよ。で、南方先生が言っておった麻雀のことを思い出しての。麻雀の道具をいろいろと清国からインポートしてみたぜよ。でのう…」

南方は龍馬の声をさえぎるように声を出した。

「龍馬さん、もしかして…営業ですか？」

「『営業』ち、なんぜよ？」

（そうか、江戸時代には営業という言葉もないのか...）

南方は少し考えてこう言った。

「龍馬さん、セールスですよ」

「おう、そのとおり、セールスぜよ。察しが早いのお先生は。雀友堂には麻雀を勉強しちよる人間が集まる、江戸の麻雀の中心みたいな場所ぜよ。銭金は後払いでもかまわんき、麻雀牌やら麻雀卓やらを取り扱ってみんかえ？わしゃあいつも江戸におるわけでもないき、江戸での麻雀用具の販売をここで取り扱ってくれるとありがたいんぜよ」

「それって、亀山社中の代理店をやらないかってことですか？」

「代理店？」

（代理店という言葉もあるわけないか...しかし言葉もないような定義をどんどん生み出す龍馬さんってすごいな...）

南方はそんなことを思うと言い換えた。

「エージェンシーですよ、龍馬さん」

「おお、そうじゃの。要はエージェンシーじゃ。それを、やってみんかえ？」

龍馬はひざを乗り出して話をしていた。そんな龍馬に南方は質問を投げかけた。

「龍馬さん、ひとつ聞きたいんですけど」

「なんぜよ？」

「龍馬さんだったら、この麻雀用具をどこに売りに行きますか？何か考えがあって麻雀用具をインポートしてるんですよね？」

「まあ、考えはないこともないぜよ。例えば、湯屋や宿場、茶屋や吉原なんかの人が集まってくるぐ場所、子供に教えるなら、寺子屋という手もあるき。麻雀が流行れば的屋みたいな感じで麻雀屋もおそらくできるち思うちよるき、そういうところにも売れるじゃろ。あとは...」

「あとは？」

「幕府かのう」

「幕府ですか？」

「この雀友堂も幕府の力を借りて作ったと聞いちよるぜよ。それも將軍様の後見人の慶喜様が麻雀の普及に熱心じゃとも聞いちよる。麻雀普及の話を一緒に持っていけば、おそらく売れるぜよ」

話終わると、龍馬は南方の顔を真剣なまなざしで見つめていた。

「龍馬さん、そんな大事な考えを私に話しちゃっていいんですか？」

「ええぜよ。博打と麻雀の師匠じゃきねや」

南方も龍馬の顔を真剣なまなざしで見つめ返すと、こう言った。

「龍馬さん、わかりました。麻雀用具のエージェンシーの件はお受けしましょう」

「本当かえ」

「はい。あと、龍馬さんの案はそっくりそのままいただくことにします」

「そっくりそのまま...かえ」

「はい。今龍馬さんが言われたこと、江戸の町で雀友堂が全部やることにします。人が集まるところに麻雀卓を置き、江戸の町で麻雀屋を開く人を募り、雀友堂でも子供たちに麻雀を教え、教育上有効であることを証明して寺子屋にも麻雀卓を置いてもらうことにしましょう」

（きっとこれがオレがこの江戸の町でなすべきことだ。麻雀を普及するということは、こういうことだ。雀友堂での道としての麻雀とは別に、こういう娯楽としての麻雀を江戸の町に広めるのがオレの役目だ）

南方はそう強く感じていた。

「龍馬さん、そのかわりこのエージェンシーの活動にはいろいろ協力してもらいますよ」

「もちろんぜよ、先生。いやいや、楽しいことになってきたぜよ」

南方と龍馬はどちらからともなく、両手で固い握手を交わしていた。

それから雀友堂と龍馬の「亀山社中」のコラボレーション事業が始まった。湯屋の二階には麻雀卓を置いてもらい、湯あがりの客が一息ついてたむろしている場所で麻雀を打てるようにした。吉原にも辰五郎や龍馬のツテをたどって麻雀卓を置いてもらうよう交渉していった。吉原の花魁たちには著書の「麻雀指南」を配り、デモンストレーションを行ったりもした。

雀友堂では今までの武士中心の「麻雀道」を極めるスタイルの麻雀とは別に、普通の町人が気楽に打てるような卓を設置し、娯楽としての麻雀の普及につとめた。また同時に子供たちに麻雀を教える「雀友堂少年部」も組織した。少年部では所作やマナー、正々堂々とした勝負を根底に置き、四人で気持ちよく打つことを大事にするスタンスを取った。麻雀の牌理も教えるとともに、実践での打ち方も同時に教えていった。

少年部を組織するにあたっては、やはり咲の存在が大きかった。女性らしいやさしさと武家の娘らしい厳しさももつ咲は少年部の指導にはうってつけだった。咲は南方の麻雀に対する考え方を踏襲し、子供たちを相手にしっかりと教えていた。

雀友堂は江戸の町での麻雀普及の中心となり、このような活動を続けた。一年も経つと、雀友堂の活動は確実に実を結び始めていた。

町には的屋と同じように麻雀屋が出来始めた。吉原ではお客と花魁が麻雀を打って遊び、湯屋の二階では湯上りに麻雀を打つ人が多く現れた。南方自身もよく湯屋に通い、風呂につかった後二階で町の人たちと一緒に麻雀を打って遊ぶことも多くなった。

麻雀は江戸の人々に確実に認知されていた。同時に雀友堂も「麻雀といえば、雀友堂」というように認識され、江戸の麻雀の聖地のようにになっていた。入門者も身分・年齢を問わず増え、従来の御家人屋敷では手狭となり、裏手の空き屋敷も雀友堂が使うようになっていた。

そんなある日、吉原のお茶屋に様子を見に行っていた龍馬が、浮かない顔で雀友堂に帰ってきた。

「南方先生、困ったことが起きたぜよ」

開口一番、龍馬は南方にそう告げた。

第二十二話 代打ち勝負

「南方先生、困ったことが起きたぜよ」

吉原から帰ってきた坂本龍馬は、開口一番南方雀にそう告げた。

「何が起こったんですか？龍馬さん。いままでも問題はありましたが、今回は深刻そうですね...」

南方雀は龍馬の顔色を見てかなりまずい事態であることを察知した。

「ちょっと面倒なことが起こったぜよ。どうも最近吉原を荒しちゅう博徒がおるらしいぜよ」「博徒？」

「そうぜよ。どうやら下谷、上野界隈の寺博打に出入りしとるヤツらしいんじゃけんど、そいつは麻雀がそりやもう強いらくての。そいつは、吉原でさんざん遊んだ挙句に遊女と麻雀で勝負するらしいんだが、バカ勝ちして花代を踏み倒して帰るっちゅうことぜよ。いろんな遊女がこの手に引っかかってるらしゅうてのう。『麻雀禁止令』を出そうかちゅう置屋もあるらしいぜよ」

（そんなヤツが出てきたか。まずい事態には違いないが、一回勝負してみたい気もするな。一応オレだって現代では雀竜位二連覇してるんだし、どんなに強くても、今の江戸の麻雀レベルならまず負けないと思うんだけどなあ）

南方はそんな風に思っていた。

「で、南方先生、実は明日そいつとの麻雀勝負があるんぜよ。で、花魁がだれか代わりに打ってくれんかち言うとるんじゃけんど...先生、代わりに打ってくれんかのう」

「いいですよ。打ちましょう」

実際に打ってみたいと思っていた南方はあっさり承知した。

「おお、受けてくれるかえ先生。先生が受けてくれるなら安心じゃ」

「じゃあ、依頼主と相手のことについて、知ってることを話してください」

南方はそう言うと改めて龍馬の方に向き直った。

「わかったぜよ。まず依頼主じゃけんど、吉原鈴屋という置屋の夕霧ちゅう花魁での。「呼び出し」ちゅうて最上級の花魁ぜよ。今回はかなり派手に遊んじゅうらしく、負けたらちょっとシャレにならんぐらいの金額がかかちゅうぜよ」

「わかりました。で、時間と場所は？」

「吉原鈴屋で明日夕七つ（午後四時頃）ぜよ」

「はい。で、相手の情報は？」

「すまん。相手の情報は実はほとんどないんぜよ。いろいろな置屋でいろんな名前を使って遊んでるき、素性も名前もよくわからんぜよ。ただ、麻雀はかなり派手らしいぜよ」

「派手？」

「最初はどうもうまく遊ばせているというかそんな感じらしくて、大きい手にも結構振り込んだりするらしいけんど、結局は大きい手を連発してあがって大勝するというのが筋書きみたいになっちゃうらしい」

（なるほど、雀力にかなり差がある時にはそんなことも出来るが...こいつはかなり強いな。こういう相手はもう少し情報があるといいんだが...）

龍馬の話聞いて、南方はそう感じていた。考え込む南方を見て龍馬もそのことを察知し、一緒に考え込んでいた。

「そうぜよ。辰五郎親分に聞いてみれば、なにかわかるかもしれん」

ひらめいた龍馬は南方にそう伝えた。

「そうですね。まだ時間もありますし、辰五郎親分のところに言って直に聞いてみましょう。今日は青龍院で賭場が立つはずですから、行けば会えるでしょう」

南方もそう言って賛同した。

「ほいたら、急ぐぜよ」

二人は浅草の青龍院に新門辰五郎に会いに行くことになった。

辰五郎は青龍院で今日の賭場の準備をしているところだった。いつものお堂に通されると、辰五郎は勘定場で木札の整理をしているところだった。

南方は辰五郎に事の次第を話すと、心当たりがあるらしくすぐに返事が返ってきた。

「吉原のうわさはオレも聞いてるぜ。そいつはおそらく健だな。みんなはドサ健とか、ノガミの健て呼んでるみたいだが。上野界限の寺博打を荒らしてる博徒で、確かに博打は強えな。ウチにも打ちに来たことはあるが、丁半でも麻雀でも負けて帰ったのは見たことがねえや」

（ドサ健、ノガミの健だって？そんな麻雀放浪記みたいなのがこの江戸にいるのか？）

南方は嫌な予感がした。情報を集めなくてはという本能的なものが働いたのか、南方は辰五郎に続けて質問した。

「辰五郎親分、で、麻雀はどんな感じが聞いてませんか？」

「ウチでも打ったことはあるから、オレもヤツの麻雀は見たことはあるよ。まあ打ち方は荒いところはあるが、ここ一番の勝負強さは半端じゃねえな。後ろで見てるとすごいヒキをしてる時があるぜ。ウチの仙吉もやられちまったぐらいだからな」

（え、あの仙吉さんが？）

仙吉は辰五郎の賭場でツボ振りをつとめる博徒で、雀友堂も手伝ってもらっている打ち手だ。今雀友堂に来ている打ち手の中では、一番センスがあるのは仙吉だと南方は見ていた。

（あの仙吉さんを負かす打ち手がこの江戸にいるなんて信じられない。仙吉さんはオレが広めた麻雀を江戸で一番最初から勉強している打ち手であれだけのセンスを持っているのに...そんなバカな...）

そんなはずはない、南方はそう思うと辰五郎に思わず反論していた。

「親分、でも仙吉さん私にはそんなこと一言も言ったことはありませんよ？」

「仙吉は筋金入りの博徒だからな。面子ってもんがあらあな。博打でいいようにやられましたなんて言うわけがないだろう。どうしたい。先生でもヤツに勝つのは難しいと思ってるのかい？始まる前からそんなんじゃあ、誰とやったって勝てねえぜ？博打ってのはそういうもんだ。そうだろ、先生」

南方は辰五郎に活を入れられたたような気分だった。

（そうだ。その通りだ。やる前から飲まれていては勝てるわけがない）

南方は少し思い直した。

「わかりました。ありがとうございます」

南方は辰五郎に礼を述べると、龍馬と共に青龍院を後にした。南方は辰五郎のおかげで思い直したものの、一抹の不安を抱きながら勝負することになってしまった。

（ここが吉原か...）

南方雀と坂本龍馬は吉原の大門前にきていた。まだ夕方というには早い時間で、客もまばらで賑わってはいなかった。南方と龍馬は大門をくぐり、通りをそのまままっすぐ歩き始めた。南方は周りを見渡すと龍馬に話しかけた。

「龍馬さん、吉原ってこんなに閑散としてるものなんですか？」

「ん？ほうじゃのう、天下の吉原も、昼間はこんなもんぜよ」

「そうなんですか」

「さすがに夜見世のかき入れ時に麻雀勝負をやるわけにもいかんき。この時間になったぜよ」

「夜見世って？」

「吉原は昼と夜の二回店を開けるんぜよ。昼間に開けるのが昼見世、夜開けるのが夜見世ぜよ。今は昼見世と夜見世のちょうど間の時間じゃき。この時間の勝負になったぜよ。おう、ここぜよ」

龍馬は立ち止まり一見の置屋を目で示した。勝負場所の「鈴屋」は周りの置屋と比べても大店で立派な店だった。

「入るぜよ」

そう言うと龍馬は先に鈴屋に入っていった。南方も後からついていった。

「坂本様、お待ちしております。」

中に入ると、店の主彦三郎が出迎えてくれた。龍馬は彦三郎を見ると相好を崩して彦三郎の手を握ると、南方を紹介しはじめた。

「おお、彦三郎殿。こちらが、今日打ってくださる南方雀先生じゃき。江戸に麻雀を広めたお人でもあるき、今日は大船に乗ったつもりでいけばええがじゃ」

「おお、これは心強い。南方先生、本日はよろしくお願いいたします」

彦三郎はそう言うと南方に頭を下げた。

（いやいや、龍馬さんにも参ったな...まあ負けるはずも負けるつもりもないのは確かだけど...）

南方はそんなことを思いながらも、

「いえ、こちらこそ、よろしくお願いします」

南方も頭を下げて挨拶をした。

「ではこちらへ。先方はもういらしております」

（えっ、もう来てるのか...こちらは結構早めに着いたはずなのに）

南方は少しそんなことを考えた。だが深く考えるまもなく南方と龍馬は彦三郎に案内されて奥へと進んでいった。

「どうぞこちらへ」

彦三郎はある部屋のふすまを開けた。

「おお～」

龍馬は感嘆の声を上げた。案内された座敷には艶やかな花魁が二人座っていた。彦三郎は花魁たちの紹介を始めた。

「ご紹介いたします。こちらが夕霧。今日はこの夕霧が自ら先生のお相手をつとめさせていただきます。そして、こちらが野風。夕霧の姉貴分にあたる花魁で、今日は立会人をつとめさせていただきます。」

「お、おう、そうかえ。わかったぜよ。では、今日の勝負の打ち合わせをするぜよ。」

龍馬はどっかりと座敷にあぐらをかいて座った。だが、南方は呆然とたちつくしていた。

（未...来...）

紹介された花魁の野風は現代に残してきた恋人・友永未来にうり二つだった。南方は野風を見て現代の未来を思い出し、時を超えて思いもよらず未来の分身に会えたことで頭の中が真っ白になり何も考えられずにいた。

「先生、どうしたじゃ。」

龍馬は南方の異変に気づき、南方の着物のすそをひっぱって声をかけた。だが南方はまだ野風を見つめて呆けたままだった。

「先生！」

龍馬はそう叫ぶと立ち上がり、南方の頬を二発張った。頭の中が真っ白になり呆けていた南方もようやく我に返った。

「先生、これから大事な勝負なんぜよ。しっかりせんといかんぜよ」

「ああ、龍馬さん。すみません」

龍馬と南方はあらためて座敷に座った。

（それにしても野風さんは未来に似すぎている。未来のご先祖なんだろうか？）

南方は我に返ったものの、そんなことを考えずにはいられなかった。視線もまだ野風をちらちらと見やっていた。

「先生、打ち合わせするんじゃないがかえ？」

「あ、ああ、そうでした」

「もう、しっかりしてくれんと困るぜよ」

龍馬は少し呆れた様子だったが、南方の背中をたたき活を入れた。

「では、勝負の前に少し打ち合わせをします。今日は私と夕霧さんが打つということでいいんですよね？」

南方は夕霧に確認した。

「へえ。あちきが打ちんす。あちきがまいた種でもありんすゆえ...」

夕霧はゆったりとそう答えた。花魁・夕霧は自身がかもしだす、そのはんなりとした雰囲気が入気の花魁だった。南方は話を続けた。

「今日の勝負の決めは、半荘一回、双方から打ち手を二人ずつだして一着を取った人の陣営が勝ちです。ですから、私か夕霧さんが一着をとれば勝ちということになります。今日は私が一着を取りに勝負に行きます。夕霧さんは私のことは無視して打ってかまわないので、相手に振り込まないこと・鳴かせないことを優先して打ってください。あと、ハコで勝負終了なのでそこは注意

です。相手が聴牌したなというような危険なときは私が右手を卓上で強く握りますから、それだけ注意しておいて下さい。」

「わかりんした。今日は先生におまかせしんす」

夕霧は手をつきゆっくりと頭をさげた。

「夕霧さん、ありがとうございます。今日はがんばりましょう。」

南方がそう言うと、野風が口を開いた。

「それで...そのぐらいの作戦で本当に勝てるのでありんすか。相手はあちきが見る限り、狡猾な男。勝つためにはどんなことでもやるような人間でありんすよ」

南方は少しドキとしたが冷静に答えた。

「夕霧さんの雀力もわかりませんし、こういう場合はあまり複雑な作戦にしないほうがいいと思います。簡潔な作戦で十分勝てると思いますよ」

「左様で...ですが夕霧の売り掛け八十両という金子がかかっていることをお忘れなく」

野風は少し冷たく言い放った。

「南方先生、申し訳ございません。野風が失礼なことを...」

彦三郎は場を収めようと南方に頭を下げていた。

「いえ、いいんですよ。では行きましょうか。彦三郎さん、お願いします」

「では、こちらへ」

鈴屋側の一同は彦三郎の案内で勝負の場へ移動を始めた。

（参ったな、強気で現実的なところまで未来とそっくりなのか...）

南方は鈴屋の廊下を歩きながらそんなことを考えていた。

「こちらでございます」

座敷は打ち合わせを行った座敷から少し奥のほうにいったところにあった。彦三郎はふすまを開けた。

（この男が、ノガミの健...）

ふすまを開けた瞬間、南方は座敷中央の麻雀卓に座った男と目があった。男は着流しにざんばらの髪型ともいえないような髪型の男だった。その垂れた前髪の向こうからするどい視線を南方に送っていた。卓にはもう一人男が座っていた。この男はいかにも江戸の遊び人風で、着流しを着て月代を剃りマゲを結っていた。

ノガミの健らしき男は視線を自分の前に落とすと、目の前の牌列をコロコロしはじめた。南方にはこれからの勝負のウォーミングアップをしているように見えた。

「あんたが南方雀かい」

ざんばら髪の男は手で牌をコロコロをしながら南方を見上げてそう聞いた。

「そうだ」

「さっさと座んな。オレはこんな勝負さっさと終わらせて帰りてえんだ」

健に促されて南方と夕霧はそれぞれ卓についた。龍馬と彦三郎、野風は夕霧の後ろに少し離れて座った。

「あなたがノガミの健さんですか？」

座ると、南方はざんばら髪の男にそう尋ねた。

「ああそうだ。こっちがオレの相棒で梅吉だ。」

梅吉はノガミの健の下家に座っていた。紹介された梅吉は特になにをするでなく、ちらっと南方を見た。

「じゃあ、はじめるか。勝負の決めはもう聞ってるな。トビありの半荘一回。一着取り勝負だ」
健はそういうと卓に裏返しに整頓しておかれた牌に手をかけた。

「ちょっと待ってください。場決めをしましょう」

南方は健を制して言った。

「ハン、何いってやがるんだ。周りにいるのは立会人といいながら、そちら側の人間ばかりじゃねえか。手を通されちゃかなわねえ。オレたちの席はあいつらからオレたちの手が見えねえここしかねえんだよ。」

（まあ、しかたないか...）

健に言われて南方はそう思い、このまま勝負を始めることに同意することにした。

「わかりました。ではこのまま始めましょう」

南方が同意したことで、卓の座り順が確定した。座り順は、奥から健、梅吉、南方、夕霧の順。
立会人は夕霧の後ろに座っていた。

「じゃあ、はじめるぜ」

健は裏返しに整頓された牌に手をかけ、卓の中央に押し出した。

（さて、戦闘開始だ。どんな勝負になるやら）

裏返しの牌を丁寧に洗牌しながら南方はそんなことを考えていた。

第二十四話 思惑

四人が山を積み終わると、ノガミの健が口を開いた。

「親決めだ。振りな」

健は卓の隅にそろえてあった賽を投げた。

「あなたが振っていいですよ。ここはこちら側の場所ですから。」

南方雀はそう答えた。

「へっ、余裕だな」

そう言い捨てると、健は賽を取り卓の中央で振った。二と三の五の目だった。健は起家札を卓の端にカチンと鳴らして置いた。

「オレの出親だ。」

健はそう言う二度振りで五の目と二の目を出し、自山から配牌を取り出した。四人が配牌を取り終わると、健が理牌をしながら口を開いた。

「ハッハッハ、こいつぁおかしいや。笑いがとまらねえ」

健は手牌を開いた。



「一万六千通しだ。いやあ、笑っちまうぜ」

健はまだ演技の笑いを続けていた。

（親も決まっていない東一局から一人天和だって！）

南方は驚きからか起こった事実を飲み込めないでいた。「そんなバカな」という思いだけが頭の中をまわっていた。周囲もただ呆然と見ているだけだった。

（積み込みも抜きも全然わからなかった。なんてやつだ）

南方は知らず知らずのうちに健の顔をにらんでいた。

「そんなににらむなよ。さ、次いくぜ。まだ勝負は決まっちゃいねえんだ」

健は点棒をしまうと牌山をくずし洗牌を始めた。

（そうだ、まだ勝負は決まっちゃいない。まだあきらめないぞ）

南方は気を取り直して再び勝負に集中した。

東一局一本場、健は再び五の目と二の目を出し、健の山からの取り出しとなった。

（今度は一人天和などやらせないぞ。ちょんちょんを自山から抜くタイミングで押さえられればオレの勝ちだ）

南方はそう考え、健の配牌を取るタイミングにあわせて身構えていた。

（自山から取れるのは二ブロックまで。次の三ブロック目は山から抜くはずだ）

南方は健の配牌三ブロック目をタイミングを合わせて注視していた。健は三ブロック目を上家の山から取ったが、配牌を取った右手をそのまま手元に持ってきていた。左手の動きもない。

（三ブロック目は抜かなかった。さすがに今度は天和じゃないのか？）

南方はそんなことを考えながら、配牌を見た。ドラは東だ。



南方はそう思っていた。

八巡目、南方の手牌は順調に伸びてこんな聴牌になった。



「リーチ」

南方は最初の方針どおり、ツモって親っかぶりさせるつもりでリーチを打った。

「カン」

「ツモ」

健は嶺上牌をツモりあがった。



健と梅吉以外は呆気にとられてその様子を見ていた。だが健と梅吉はかまわず立ち上がった。

「これで、八十両の支払いはなしってことでいいな。じゃあ」

そう言い捨てると健と梅吉は座敷を出て行った。

南方は座ってうつむいたまま、今の勝負をプレイバックしていた。

（ドラ爆の東と北もそうだが、健の嶺上ツモの四萬は前局の天和の牌姿にあった四萬だ。いつでもあがれるように嶺上牌に置いて保険をかけてたんだ。何か起こればすぐにツモ牌を嶺上の四萬とすりかえてツモあがる。今のように東を切って勝負してくればカンして嶺上でツモあがれる。

うまく考えられてる...最初の天和もそうだ。盲点について親も決まっていなかった東一局から仕掛けてきた。それもわれわれよりも早く現場に来て牌を確認し、最初に並べた牌を押し出すときに握りこむ牌をあらかじめ目星をつけておいたんだ。親決めの賽もわざとオレに投げて結局自分にくるように仕組んでいた...たとえオレが振ったとしても七が出る確率が高いことまで考えていたはずだ...)

南方は健のきめ細かく考えられた戦略に、自分があまりに何の策も持たずに来たことを恥じていた。麻雀黎明期のこの江戸で、まさかこんな強敵に会うとは思ってもいなかった。南方はうつむいたまま黙り込んでいた。

その様子を横で見ていた野風は立ち上がるとこう言った。

「だから言ったのでありんすよ。あの健という男は狡猾な男であると。あちきには今の勝負、完全に作戦負けに見えんしたけんどなあ。夕霧、あんたも欲に目がくらんでこんな勝負を受けてはだめでありんす。」

野風の厳しい口調に夕霧は言い返すことも返事をすることも出来なかった。この言葉は南方にもこたえた。自分の力量のなさや勝負に対する甘さを、まるで現代に残してきた恋人・未来に責められているように思われた。

野風はそういい残すと、さっさと座敷を出て行ってしまった。

健と梅吉は勝負の帰り道、吉原の大通りを並んで歩いていた。

「東一局で勝負を決めちまうたあ、さすが兄貴だ。いやあ、今日はすごかったっすねえ」

梅吉は健にそう話しかけた。

「お前、本当にそう思ってるのか？」

「え？どうしたんすか兄貴。あんなに圧勝だったのに。」

「ハン。お前にゃわかんねえか。」

健はすこぶる不機嫌だった。

(くそう、今日はやりすぎた...勝ちはずいぶんしたが、あんなに手の内を見せて派手なことをやる必要なんか何もなかったんだ。あの南方ってやつ、裏技に関しちゃあ素人みたいなもんじゃねえか。特に一本場のドラの東切りリーチはどう考えてもありえねえ。こっちが東を握りこんでるのは明らかなんだから、裏技を使うやつなら東は握りこむか味方の手に紛れ込ませるのが普通だ。あれは裏技を知らねえヤツの打ち筋だ。)

健は帰り道で今日の勝負をこう振り返っていた。

実は健はこの勝負に南方が代打ちをすると聞いて、どう勝つかを慎重に考えた。その結果、東一局の一人天和で機先を制する作戦に行き着いていた。健がそう考えるのには理由があった。

実は、健も未来からきた人間だった。健は戦後の昭和二十年代からタイムスリップしてきていた。

健は麻雀がこの江戸時代に広まっていることに驚いていた。健自身が昭和初期に麻雀が日本の庶民に普及するところを見てきた人間だからだ。そして、麻雀が江戸で広まっている原因が南方雀にあることを知った。彼が教えているルールは健よりも後の時代のルールであることは明らかだ。

った。健は南方が「自分よりも後の時代の人間」であることをわかっていて勝負に臨んでいた。
「先の時代の人間には、自分の裏技は見破られる可能性が高い」と健は考えていた。麻雀の技は時代とともに進化していくものであることを健は身をもって知っていたからだ。

つまり、健は南方の裏技に対する対応を過大評価していたのだった。

（あの程度なら、素人用の軽くあしらう程度の裏技で十分だった。派手にやれば警戒もされるし学習もされる。今日は手の内を見せすぎた...もっと序盤は探りながら入ればよかったか）

健はくちびるを噛んだ。

「兄貴、あそこにすし屋の屋台がでてますぜ。すしでもつまんで帰りましょうや」

梅吉は明るく健に話しかけた。

「そうだな。そうするか」

健はもやもやした感情をむりやり自分の中に押し込め、すし屋ののれんをくぐった。

第二十五話　引きこもり

「だれか、おらんかえ」

雀友堂の玄関先で声が聞こえた。ちょうど橘咲が少年部の指導を終えて後片付けをしているところだった。

（坂本様？）

独特の土佐弁から坂本龍馬が来たとわかり、咲は玄関先に龍馬を迎えに出た。そこにはいつものヨレヨレの袴をはいた龍馬が立っていた。

「坂本様、おひさしぶりでございます。ちょうど今少年部の指導を終えたところでございます。どうぞ、お入りになってくださいませ」

「ほうかえ。ほいたら、邪魔するぜよ。」

咲は後片付け中の教室に龍馬を通した。

「今片付けておりますので、しばしそちらでお待ちくださいませ」

「おう。忙しいところすまんのう」

龍馬は座卓に座り、整えられた牌をもてあそび始めた。

「ところで、南方先生はどうないしちゅうかのう？元気にしちゅうかえ？」

龍馬は牌をもてあそびながら咲に話しかけた。咲は片付けの手を止め、すこしうつむき加減になった。

「それが…」

「元気じゃないがかえ？」

「はい…」

咲は最近の南方の様子を話し始めた。

ノガミの健との吉原での代打ち勝負に負けて以来、南方は雀友堂の一室に閉じこもりがちになっていた。裏技に敗れたこともそうだが、花魁の野風に言われたことがかなりショックが大きかったようだった。食事もろくに取らず、心配した咲が時々握り飯を差し入れていた。雀友堂の運営も恭太郎や仙吉、咲に任せきりになり、時折仙吉が南方に報告に行っていた。仙吉の報告以外は南方の部屋に入る者は誰もいなかった。

こんな状態の南方をとて心配していた咲は、このことを龍馬に相談するように口ごもりながらとつとつと話した。

「そんな状態になっとったがかえ…」

龍馬はそう言うと考え込んだ。

（これじゃあこの話は無理かもしれんのう…まあ、でも確認してみるか。）

龍馬は何事も自分の目で確認しなくては済まない性分だった。

「咲殿、南方先生はどちらに？」

「雀友堂の奥の間におりますが…仙吉さん以外は入れるなと言われておりますゆえ…」

「大丈夫じゃ。いくぜよ。」

龍馬はそう言って立ち上がり、奥の間へスタスタと歩いていった。

「さ、坂本様、お待ちください！」

咲は龍馬のいきなりの行動に驚き、あわてて後を追っていった。

「先生、おるかえ？」

龍馬は奥の間につくと、いきなりそう言ってふすまを開けた。そこには麻雀の座卓を囲む南方と仙吉がいた。南方は顔を上げ龍馬の姿を確認すると笑顔を浮かべた。

「龍馬さん！」

南方は龍馬に駆け寄ると手を取って喜んだ。

（なんだ、以外と元気やないかえ。でも...）

龍馬は南方をあらためて観察した。ノガミの健との勝負の時よりもかなりやせている。というかやつれている。無精ひげを生やし、顔色も悪い。髪もべたついた感じだ。

（しばらくこもってたってのはどうやら本当らしいな...）

龍馬はそう感じた。すると、南方から意外な一言が出てきた。

「ちょうどよかった。龍馬さん、咲さん、ちょっと一、二局付き合ってもらえませんか？」

「一、二局って...麻雀のことかえ？」

「そうです。まあ座ってくださいよ」

南方は二人を座らせた。親決めをし、東家から龍馬、南方、咲、仙吉の並び順で麻雀が始まった。

東一局、親は龍馬。ドラは八索。

南方の配牌はこうなっていた。



この配牌が二巡後、こうなっていた。



南方は二巡目の上家のツモの際にツバメ返しで配牌を総取替えしていた。その後の北ツモでは和了らずにここで二萬を切り出した。

「ツモ。七百、四百」

六巡目、仙吉が平和のみをツモ和了りして東一局が終了した。

東二局、親は南方。ドラは東。

南方の配牌はこうなっていた。



三巡目、南方の手牌はこんな聴牌になった。



南方はドラ爆と自山のすり替えを使って聴牌を入れていた。同巡、咲が一萬を切ったが南方は見逃した。

「ツモ。ゴットー。」

その後龍馬がタンヤオをツモ和了りして東二局が終了した。

親が流れたところで、南方が口を開いた。

「仙吉さん、こんな感じでどうですか？」

「へえ、まあまあだと思ひやす」

龍馬と咲は意味がわからずポカンとしたままだった。

「ど、どういうことぜよ？」

龍馬が尋ねると、南方は龍馬と咲に質問を返した。

「あ、咲さんと龍馬さんにもお聞きしたいんですけど、今の二局何かわかったことや感じたこと、変だなと思ったことはなかったですか？」

「特に、何もなかったぜよ。平和ツモとタンヤオツモがあっただけぜよ。」

「私も、特に何もなかったように思ひますけれど…」

龍馬と咲はそろって何もなかったと答えた。

ここで仙吉が口を開いた。

「実は、今の二局は『ノガミの健』対策の実践局だったんでさ。南方先生はノガミの健に対抗するために、裏技の仕込みと返し技をいろいろとやってたんでさあね。まあ、これで実戦で手は動かせるってところまではきやしたね。ねえ先生。」

「本当、仙吉さんに見てもらったおかげだよ。仙吉さんは普段鉄火場で裏技を見る目が鍛えられてるから、ちょっとでも変な動きをすると違和感だけで見破られちゃうから、結構大変だったよ。それに、ノガミの健の情報もいろいろ持ってきてくれたから、本当に助かりましたよ。本当、ありがとうございました。」

南方は苦笑いをしながら仙吉に礼を述べた。龍馬はそれを聞いて目を輝かせて言った。

「ちゅうことは、あれかえ。ノガミの健相手にも勝てるメドがついたच्चゅうことかえ？」

「うーん、返し技はとっさの判断で手を動かさなければいけませんし、相手の仕込みを見破る目も持たないと難しいので、実際にうまくいくかどうかはやってみなければわからないというのが本音ですかね。私たちが入手している情報と違う技を出されるとそれを返すのはなかなか難しいでしょうし…」

「勝負事は先手必勝という言葉もあるぜよ。返し技ではのうて、自分から仕掛けてはどうかえ。そのほうが有利じゃし、簡単ぜよ」

南方は龍馬にそういわれると、きっぱり言った。

「私は裏技で仕掛ける麻雀を打つ気はありません。私が広めたい麻雀はそういう麻雀ではないです。あくまで相手に仕掛けられたときに返すために練習しているだけです」

「そ、そうかえ」

龍馬は南方の意思の固さから出る迫力にたじたじとなっていた。

「けんど、ノガミの健に意趣返しをする気はあるき、練習しちよるんじゃないがかえ？」

「もちろんです。ああいう麻雀を野放しにする気はありませんよ。」

南方はきっぱりと答えた。すると龍馬はいたずらっぽく笑いながら言った。

「実は、今日は先生にそういう話をもってきたぜよ」

（え？）

それを聞いた南方の表情には緊張が走っていた。

「今日は先生に、そういう話をもってきたぜよ」

坂本龍馬はそう言うと言を切り出した。

「この前の『鈴屋』の少し奥にある『玉屋』という置屋の初音っちゅう女郎がノガミの健の手口にひっかかったらしゅうてのう。明日の昼見せの後、勝負をするらしいがじゃ。勝負を受けたはいいが、野風花魁から『ノガミの健』はとても女郎の手に負える打ち手ではないと聞かされて、びびっちょるぜよ。」

「野風さんはこの勝負に関係してるんですか？」

南方雀は野風花魁と聞いて反応し、龍馬に尋ねた。咲はこの言動におもわず眉間にしわをよせていた。南方が野風にひとかたならぬ興味をもっていることを感づいてしまったようだ。

「野風は吉原一の店の鈴屋で一番の『呼び出し』と呼ばれる花魁じゃき。しかも周りの女郎の面倒見もよくて、他店の女郎にも野風花魁を慕っているものが多いらしいぜよ。野風はあのあたりの女郎の間では姉貴分のような存在じゃきねや」

「そうなんですか...」

（面倒見がよくて店の姉貴分だなんて、そんなところまで未来にそっくりなんだな...）

南方はそんなことを思うと苦笑していた。

「南方先生、で、この代打ち話はどうするぜよ。受けるんなら、今から吉原まで走るが...」

「もちろん、受けますよ」

南方は迷わず言った。

「ノガミの健対策はまだ完全ではありませんが、機会がここで来たんです。ここは話を受けて勝負するしかないでしょう」

「大丈夫かえ？」

「確かにまだ十分ではないです。でも、ここはいくしかないでしょう」

ここで仙吉が口をはさんだ。

「ああいう裏技を実際の博打場で使うには、くそ度胸というかそういうものが必要だとおもいます。あっしがみる限り、南方先生の手つきは問題ありやせんが、あとは仕掛ける時期と度胸、相手の仕掛けを見破る観察眼なんかが必要でやす。そういうものは実戦で養うものなので...その、まだ実戦経験が足らないとあっしは思うんでやすが...」

「確かにそうだが、これ以上待つわけにはいかないでしょう。ここで機会がきた以上、これで勝負します。龍馬さん、手配をお願いします」

「よっしゃ。ほいたらいつてくるぜよ。先生、明日ここに迎えにくるき。」

龍馬はそういい残すと、あわただしく部屋を出て行った。

咲は相変わらず眉間にしわをよせたままだった。咲は野風への嫉妬だけではなく、今回の勝負に不安を感じていた。咲はおもわず南方に自分の考えを話し始めた。

「先生、本当によろしいのでございましょうか。前回ドサ健なるものに敗れた折には、去ってしまった門弟も少なからずおりました。もし今回も敗れますと、雀友堂と先生の名声も地に落ち

てしまいます。雀友堂の運営にも支障が出るやもしれませぬ。もう少し、機会をお待ちになっては…」

南方は少し笑みを浮かべると、咲に向き直って言った。

「咲さん、心配してくれてありがとうございます。確かにそうかもしれませんが、ノガミの健はこれからも麻雀をあいうことに使っていくでしょう。麻雀を人をだます道具として使うのを私は放っておくわけにはいきません。それに裏技を使った麻雀も放っておけばどんどんと広まっていってしまうでしょう。私は公平で楽しい麻雀を広めるためにこの江戸にいるんです。この機会を逃すわけにはいきません」

「先生、わかりました。咲はもう何も申しませぬ。ご武運をお祈りしております」

咲は南方の信念を聞き、今回の勝負に賛同することにした。

「咲さん、じゃあ残り時間は少ないですが、返し技の練習手伝ってくれますか？」

「はい、喜んで。」

「じゃあ、仙吉さん、咲さん。練習を続けましょう。」

練習は技を磨くためだけではなく、南方や咲、仙吉の不安を少しでも軽くするための行為でもあった。

三人での仕込み・返し技の練習は深夜まで続けられた。

第二十七話 開き直り

雀友堂奥の間の障子から朝の光が差し込み、雀の鳴き声が聞こえていた。

南方雀は昨日から夜通し返し技の練習を続け、いつの間にか卓に突っ伏して寝入っていた。咲と仙吉がそれぞれの用事で帰った後も練習は続けられていた。

「ん...んん...、もう朝か...」

南方は障子から差し込む光で目を覚ました。

（今日、もうノガミの健と打つのか。なんか冗談みたいだな...）

南方はそんな風に感じていた。南方は返し技の練習をやるにつれ、裏技というのは本当に練習がモノを言うものだの実感していた。裏技をあれだけのレベルで使いこなすノガミの健は、毎日練習を怠らないんだろうということが練習すればするほど身にしみてきた。またノガミの健の技術はよく考えられ、よく鍛錬されたものだということもわかってきた。彼の技術はもはや「技芸」の域にあるとさえ思えた。

（この程度の練習と技術で本当にノガミの健に勝てるのだろうか...）

南方は相手の手口や技術を知るほど不安が増していった。

しばらくすると、橘の家から橘咲がやってきた。咲は雀友堂の奥の間のふすまを開け、南方が座っているのを確認して話しかけた。

「先生、やはりこちらでしたか。あさげの支度が出来ております。橘の家へお越しくださいませ」

「咲さん...わかりました。今いきます」

「一緒に参りましょう。さあ」

咲は南方に近寄り南方の手を取った。咲は南方の腕が震えていることに気づいた。

（先生...今日の勝負の相手を恐れているのでございましょうか...）

南方の腕をとった瞬間咲はそう感じた。

「先生...勝負が恐いのでございますか？」

「ええ。恐いです。あんなすごい技を持った相手と勝負するかと思うと...震えてしまいます」

南方は咲を見て無理に笑顔を作って言った。

「先生、大丈夫でございます。先生の麻雀はあのようなイカサマ麻雀に負けるものではございません。きっと天が味方してくださいます。たとえ負けたとしても、雀友堂の人間は先生を見限ったりはいたしません。雀友堂がある限り、きっとまた機会は参りましょう。花魁の方は大金を失うのかもしれないが...博打でございますから、それはそれで仕様のないことでございます」

咲はそう言うのと南方をみつめ、微笑みを浮かべた。

「咲さんは、肝がすわってますね」

南方はうつむいてつぶやくように言った。

「ええ。咲は武家の娘ではございますが、江戸の娘でもございますから。博打などたしなみの範疇でございますよ。南方先生にのって大きな勝負をして大金を失うのも、その人の選択でござい

ますから。南方先生はただ勝負するだけのことでございますよ」

「そうですね...咲さん、ありがとうございます」

「では、一緒に参りましょうか」

「はい」

南方は咲の言葉ですこし開き直っていた。

（そうだ、失うものなんて、なにもなかったんだ。雀友堂と仲間さえいれば、きっと何が起きてもなんてことはない）

「さあ、先生」

南方は咲に腕を取られて立ち上がると、橘の家へと歩き始めた。

「うーん、いい朝だなあ」

南方は両手を上げて伸びをした。凜とした朝の空気の中を歩くと、心が洗われるような気持ちになった。

昼八つ、南方と龍馬はすでに勝負場所の玉屋に入っていた。前回のノガミの健との勝負では、健に先に入られて牌を押さえられ、東一局に仕掛けられて負けた反省からだった。

「先生、いくらなんでも早すぎやせんかえ。まだ昼見世をやっちゃるぜよ」

「ふふふ、龍馬さん、昼見世が気になりますか？」

南方はいたずらっぽく笑った。

「いやいや、そんなことはないき。もう、からかうのは無しぜよ」

龍馬も笑いながら返した。

（なんじゃ、ずいぶんと落ちついとるのう。昨日の様子じゃともっと神経質になっちょるかとも思ったが）

龍馬は南方の様子を見てそう感じていた。

「さて、じゃあ牌の確認をしてしましましょう。今回は私が先に牌を押さえないと」

南方はそういうと卓に伏せて整列した牌を順に裏返しはじめた。

「ちゅうことは、前回ノガミの健は勝負に入る前にそうやって牌のありかを確認しとったちゅうことかえ？」

「おそらくそうです。でないと、あれだけあざやかに仕込めませんから」

「かぁ～そうじゃったがか。なるほどのう。鮮やかな手妻（手品）もまず仕掛けがあるちゅうことかえ」

龍馬はいまさらながら、敵の用意周到な作戦に気づいたようだった。南方は牌の表裏の確認を続けていた。

「いいでしょう。ガン牌もなさそうですし、牌も散らしました。あとは...龍馬さんはここにすわっててください」

「なんじゃ、座る場所まで気まっちょるがかえ」

「ええ。今回はそれでしてやられましたから。健と健のオヒキにはこことここに座っていただきましょう。龍馬さんは今日勝負する初音さんが座るところにいてください」

「お、おお。ええけんど、そこまでせんといかんがかえ？」

「そこまでしないとダメです。前はこれをしなかったからやられたんですよ。健はおそらく前回同じことをしていたはずです」

そういうと南方は奥の席から手前の席に移動し、牌も自分の席の右側に並べなおしはじめた。

（なるほど。何が何でもいきなり牌を固めさせるのを阻止するっっちゃうことかえ...今日の南方先生は一味ちがうのお...）

龍馬はそんなことを思いながら南方の作業を見ていた。

「これでよし...と。」

南方は牌の移し替え作業を終えた。

「じゃあ、龍馬さん。私は一眠りしますから、健でも誰でも入ってきたら起こしてください」

南方はそう言うと、そのまま後ろに倒れて横になりうたた寝を始めた。龍馬は呆気にとられてその様子をながめるしかなかった。

（南方先生、ちょっと落ち着きすぎとりゃせんか？勝負の準備が終わったのは分かるけんど...青龍寺での丁半博打の時も、ノガミの健との勝負の時も、こんな落ち着いた感じではなかったぜよ...いったいどうしたことじゃこれは...）

龍馬は南方が手枕でうたた寝しているのを、ただながめていた。

第二十八話 仕込み

「よう、今日は早いじゃねえか」

ノガミの健が梅吉を連れて勝負の場にやってきた。相変わらず着流しにざんばら頭で余裕の表情をうかべていた。すでに勝負の場には南方雀をはじめ、全員用意が整っていた。立会人の野風と龍馬も座って待機していて、今日の依頼主の初音もすでに卓についていた。

もちろん南方も昼寝から目を覚まして待機していた。

「前はそれでやられましたのでね。席はそちらがいいのでしたよね。空けてありますのでそちらへ」

南方はノガミの健を一べつすると席を手で示して座るよう促した。

「はん。結局同じことだと思うがな。どんな対策してきたか知らないが、あんたにゃ無理だよ」
ノガミの健はそう言っておとなしく空けてある席についた。

「では、始めましょうか。」

南方はそういうと自分の右手にある牌を卓に押し出した。

（やつの手つきをよく観察するんだ。変な動きがあったら、こちらもあわせて動くんだ）

南方は健の手つきを注視していた。

（特に妙な手つきはないな...さすがに準備が功を奏したか）

南方のこの考えは半分だけ当たっていた。確かに積み込みはしていなかったが、健の技術をもってすれば積み込めないわけでもなかった。ただ、今回は前回のような対応で勝つことは健のプライドが許さなかった。

（前は東一局の天和なんて大技をやりすぎた。この程度の相手にそんな技は使わねえよ）
健は今回は大技は封印し、なるべく普通に麻雀を打って勝つつもりで来ていた。山を積み終わると南方は左端においていたサイコロを取った。

「こっちで振っていいんですよね？」

「ふん。好きにしな」

健が南方の問いにぶっきらぼうに答えると、南方は親決めの賽を振った。出目は六。初音の出親に決まった。南家が健、西家に梅吉、北家に南方という並びとなった。

東一局、初音は九と二の目を出し、自山から配牌を取り出した。ドラは八筒。

南方は配牌を取って苦笑していた。

（別に仕込んだわけじゃないんだけどな）

南方にはこんな手が入っていた。



手牌は十三牌のうち十牌が南方の山からの取り出しだったが、これだけの材料がそろったのは偶然だった。現に緑発三枚のうち二枚は上家の梅吉の山から取ってきたものだった。

（いきなり勝負手か...）

南方は五筒を引いて一索から切り出していった。南方はこの後南、西あたりも早めに切り出し、混一をカムフラージュする手筋を選ぶつもりでいた。
この打ち筋が功を奏し、八巡目にはこんな聴牌になっていた。



すると同巡に梅吉が九筒をツモ切り、南方は倒牌した。
「ロン」



メンホン、小三元、ドラで一万六千点の和了りだ。
「えっ」

振り込んだ梅吉は小さく声を上げた。健はチラッと南方の顔を見ると、改めて和了り手と河を凝視した。

（三元牌が高いのは意識していたが...こいつが固めていたのか。まさか配牌で？いや、そんなことはない。積み方はそんな手つきではなかったはずだ。だが...南と西が早すぎる。偶然なら一色手狙いで二萬、八萬あたりが先に出てもよさそうなものだ。前はオレが東一局に天和積みを仕掛けた。そして今回は逆にこいつが先に来て、牌を押さえられるような状況を作っていた。ということは...）

健は南方の積み込みを疑っていた。出来すぎの東一局の手。前回の天和積みと逆のことを南方にやられていること。カムフラージュの捨牌。これらを総合的に見ると健が疑惑を持つのも無理はなかった。

健は改めて南方の顔を見た。

「どうしたんですか、ノガミの健さん。東一局に天和が出来ることだってあるんです。このぐらい、どうということはないでしょう」

南方はわざとすまして言った。偶然の産物ではあるが健の精神面に揺さぶりをかけた。

麻雀は極論すると打ち手の精神面がそのまま出るゲームだ。ひよれば弱い打牌が目立ち、熱くなれば暴牌が目立ち、冷静ならクールな打牌になる。少なくとも積み込みアリの麻雀では技術は健の方が間違いなく上だ。できれば精神面から崩れてくれるのが望ましい。

健は梅吉にサインを送った。

（次局、アレを仕込む。河から必要牌を押さえる）

健はまだ心の中でこの小三混一は偶然じゃないかという気持ちももっていた。

親決めの賽を振ったのは南方だが、取り出しを決める賽を振ったのは初音だ。初音の賽の振り方は出目を意識的に出すような振り方ではなかった。そんな理由もあって、全てが仕組まれたものだったかどうかというところには疑問を持っていた。だが、南方は抜きやすい自山の両端を配牌で取っていたことで南方の仕込みが配牌に入っていたのではないかと考えていた。

だが、南方の揺さぶりでそんな考えはもうどうでもよくなっていた。

東一局の和了りと言動で南方が喧嘩を売ってきてることは明らかだった。

（この野郎、やってやろうじゃねえか。オレが本物の技術というものを見せてやる）

健は南方に火をつけられ、燃え上がって親番を迎えた。

和了り手牌が崩されて洗牌が始まった。洗牌の直前、梅吉は自分の河の牌を確保する動きに出た。

（来たな）

南方はとっさに右手で初音の河を押さえ手元に寄せた。

南方はいくつかの仕込みパターンを予想し、自山を仕込みにかかった。健は梅吉から牌の融通をしてもらっていた。南方は健の手元を見ながらの作業になった。南方は健の仕込みを見てあることに気づいた。

（仕込み牌の間が五間だ。普通の六間積みの爆弾じゃない。ということは...アレか。じゃあこっちはこうだな）

それぞれの思惑を乗せた仕込みが行われ、山が積まれた。

（さて、うまくいったらおなぐさみってどこか。）

南方は返し技の仕掛けに緊張していた。積み込む側はなるべく不自然な手つきをしなくてよいように山を積むが、返し技はそうはいかない。様々な手練手管を駆使して相手の技を返す必要がある。今回の返し技もそのようなものになると想定していた。

（心臓の音が大きく聞こえる...役満張ってもこんなことにはならないんだけどな...）

南方は目を閉じて一回腹式呼吸をした。腹式呼吸には緊張をほぐしリラックスする効果があることを南方は知っていた。

（大丈夫、うまくいく、大丈夫、うまくいく...）

南方は自分自身に言い聞かせ、これからなすべきことに集中していた。

第二十九話 決着

初音の親は流れ、親はノガミの健に移った。健は大きいモーションで賽を振った。

「十だ」

続いて健の下家の梅吉が賽を振り、七の目を出した。

（七を出したということは、ターゲットは初音ってことか...）

南方雀は今回の健の仕込みはそういうものだと読んでいた。

健は自山の端から配牌を取り始めた。健、梅吉、南方、初音の順で配牌を取り出していく。取り出しが三周り目に入ったとき、健は異変に気づいた。

（ん？山が二幢ずれている...）

本来なら健の配牌取り出しの三周目は、自山から一幢、上家の初音の山から一幢取り出すようになるはずだ。だが、健が三周り目の配牌は二幢とも自山からになり、しかも健の山はさらに一幢余っていた。

（はは一ん、オレが自山に爆弾系の積み込みをしたと見て、山をずらしやがったな）

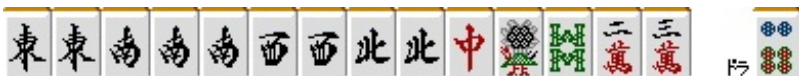
健は対面の南方をチラッと見た。

実は南方は健の山から配牌を取るときに二幢ではなく一幢しか取ってきていなかった。不足した二牌は手元に持ってくるときに自山と上家の梅吉の山から補充していた。

健も南方の山と梅吉の山が一幢短いことに気づいた。

（フフフ、ずぶの素人だった前回とは一味違うじゃねえかよ。だがなあ、この積み込みはそんなことでやぶれるほど簡単な爆弾積みじゃねえんだぜ）

健はチョンチョンを取りながらそう心の中でつぶやいていた。事実健の配牌には風牌がごっそり入っていた。



健は配牌を確認すると、梅吉を見た。梅吉は少し驚いた様子を見せ、健に「指示をくれ」のサインを送ってきた。

（健の兄貴、十七の目を出したのに、風牌の浮き牌が初音花魁じゃなくておいらにはいってやすぜ。どうしやすか？）

梅吉は異変に気づき、指示を仰いだ。

（決行だ。風牌を切り出せ。お前は飛ぶが、一着取りの勝負はオレの勝ちだ）

健は「そのまま決行」のサインを梅吉に送った。

（南方は山はずらしたが、おそらくこの大四喜十枚爆弾の本当の仕掛けまでは届いちゃいねえ。知っていればこの技はあんな単純なずらし方では回避できねえことは分かるはずだ。）

健はそう考えていた。そして実際その通りでもあった。

ここで健の積み込みを解説しておく。健の積み込みは「大四喜十枚爆弾」という技だ。

この技は爆弾技ではあるが、とても柔軟に出来ている。

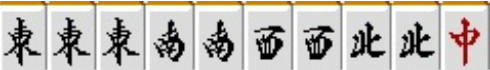
親は十の目を出さなくてはならないが、下家は六の目でも七の目でもうまくいくように山が積まれている。六を出すと南家に字牌の浮き牌が入り、七の目を出すと上家の北家に字牌の浮き牌が入る。

また、通常の六間積みとは違って芯が三幢ある五間積みなので、今回南方がやったような山ずらしにも対応できるようになっていた。

今回下家の梅吉は七の目を出したので、浮き牌は北家の初音に入るはずだった。山と配牌の取り出しは、本来このようになるはずだった。



この取り出しでは、健には



と入り、初音には字牌の浮き牌が



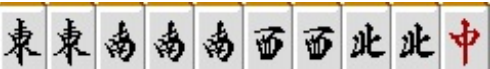
と入ることになる。初音が中を最後に打ち出せば、大四喜字一色の振込みとなる。

だが、南方が配牌を一幢しかとらず自山から補充したことにより、山と配牌の取り出しはこうな

った。



この取り出しだと、健には



と入り、初音ではなく南家の梅吉に字牌の浮き牌が



つまり、南方は配牌の一幢取りでターゲットを初音から梅吉に変えることには成功した。しかし、この状況で梅吉が健に役満を打ち込むと、梅吉は飛ぶが勝負はトップ取りで健の勝ちとなる。南方はすでに東一局で一万六千点を梅吉から取っており、健はこの親でなんとかしないと敗色が濃くなっていくことが予想された。なんとかこの仕込みで一発決めたい、そういう状況にあった。

健はクールに発声すると手を倒した。



（何、オレの十枚爆弾を国士で頭ハネだと？）

健は十枚爆弾を返されて自分の目の前の風景が揺れるのを感じた。

（そんなバカな...いや待て、冷静になるんだ、冷静に...）

健は今のこの精神状態をなんとか脱しようと必死で深い呼吸をしようと試みていた。

「ハーッハッハ！いやーやったぜよ先生！」

龍馬は立ち上がると手を上げて喜んでいて。野風も静かな微笑みを浮かべていた。

「ちょっと待った。喜ぶのはまだ早いぜ」

健が大声で叫ぶと、周りは静かになった。

「南方さんよ。あんたのその伏せている両の手、卓の上で空けて上を見せてくれねえかな」

健はそう言うと南方に鋭いまなざしを浴びせた。

（十枚爆弾を頭ハネするには、仕込んだと分かっていたとしても単騎が何か分かってなきゃ無理だ。この国士は多牌打ちにはもってこいだ。きっとどちらかの小指に中を釣ってるに違いねえ）

健は南方の国士無双をそう読んだ。多牌打ちは手牌が一牌多いため、不要な一枚を左右どちらかの手に握りこんでから倒牌する。その握りこんだ不要牌を指摘すれば、この土壇場で逆転できる。

「仕方ないな。じゃあ、開けますよ」

南方はそういうと両の手のひらを上にむけ静かに手を開いた。手のひらには何もなかった。

「そ、そんなバカな...じゃあ、なぜ中単騎だと...」

健は目の前がぐらぐら揺れ、動揺しながら言葉を発した。

「健さん、前局の和了りを忘れたんですか。白と緑発は私が押さえているからありえないんですよ。字牌待ちにしようと思えば、中単騎しかなかったんです。その中はわざと私が梅吉さんに拾わせたんです。ダブル役満はないんですから、字牌以外の単騎にしていれば私の負けでした」
南方はそういうと自山の上山を開けた。そこには白と緑発が二枚ずつ眠っていた。

（負けた...完敗だ。たった一人でこの十枚爆弾を返したやつは初めてだ）

そう思うと健は思わずくちびるを噛んだ。

「梅。こちらさんに約束の五十両、払って差し上げな」

「へ、へい」

健にそう言われると梅吉はふところからひしもち（小判を束ねた包み）を出し、初音の方に押し出した。

「じゃ、どちらさんもこれでよござんすね。梅、帰るぞ」

「へい」

健はくやしきもあつたのだろう。負けを認めてからは終始沈んだ声で話し、うつむき加減に部屋を出て行った。

「さすが先生じゃ。やったぜよ～」

南方雀の勝利を確認すると、坂本龍馬は南方に抱きついた。

「ちょ、ちょっと龍馬さん、大げさですよ」

南方は照れながらもうれしそうだった。そんな二人を微笑みながら見ていた野風は、卓に近づき初音のそばに座った。

「初音...今回は勝ったからよかったけど、こんな勝負はもうしてはいけなでありんすよ。こういう勝負がどういうものか、これでよくわかったでござんしょう。あちきらがやっている麻雀とは別モノになるのでありんすよ」

「はい...姉さん」

初音は自分たちとの麻雀とは違う、異質な勝負に恐怖を覚えていた。野風の一言が心に染み安心したのか、初音はうつむいてすすり泣きはじめた。野風は南方に向き直ると三つ指をついた。

「先生...このたびはありがとうございます...初音に代わって御礼申し上げるでありんす」

「そんな、それほどのことじゃ...」

南方はまたも照れて頭をかいていた。

「先生...あちきも先生に麻雀を習いとうありんす。たまには廓の方にも顔をお見せくださんし」
野風は顔を上げると妖艶な笑みを見せ、南方を見つめていた。

（廓にいるからだろうか...野風さんは未来にそっくりではあるが、未来にはない妖艶さが...）
南方はそんなことを考えて野風に見入っていた。野風の妖艶さに吸い込まれるような感じになり、傍から見ると魂が抜けたようになっていた。

「ちゃ、ちゃ、ちゃ、もう先生は...咲殿に怒られるぜよ。さ、戻るぜよ」

「あ、は、はい。それでは、これで失礼します」

南方は短く礼を述べると龍馬に引きずられるように退出していった。

「ふふふ、面白い方たちでありんすなあ」

そうつぶやくと野風は口を押さえてくすくすと笑った。涙を流していた初音も、それにつられて笑顔に変わっていた。

「ちょっと待ちな」

南方と龍馬が玉屋を出ると、入り口で待っていた男に声をかけられた。着流しにざんばら髪。健だった。オヒキの梅吉はいなかった。先に帰ったのだろうか。

「おぬし、何をする気ぜよ」

龍馬は健が報復のために待っていたと思い、刀に手をかけて鯉口を切った。

「まあ、待ちなよ。オレは何も持ちゃいねえ。こちらさんと二人で少し話がしたいだけだ。いいだろ？」

「しかし...」

龍馬は渋った。たった今まで真剣勝負をしていた相手に、相手は賭場を荒らしている「ならず者

」だ。南方の護衛も兼ねている身としてはとても承諾できることではなかった。

「いいですよ龍馬さん。私も少し話したいと思っていたところです。大丈夫、まだ日も高いですし人通りもあります。めったなことはありませんよ。それに...」

「それに？」

龍馬は聞き返した。

「私は麻雀と同じで逃げ足が速いんです。いざとなったら逃げてきますから、龍馬さんは大門のところで待っていてください」

「わかったぜよ。ほいたら、大門でまっちょるき。何かあったら逃げてくるんぜよ」

「はい。じゃあ、少し歩きますか」

南方と健は大門とは反対の方に歩いていった。

（大丈夫かのう...）

龍馬はそう思いながらしばらくの間二人を見送っていた。

二人は吉原の一番奥、水道尻の秋葉常灯明のあるところに来ていた。二人は灯明の土台のところに腰掛けた。すぐそこにはおはぐろどぶが流れていた。

「ふうっ」

健は一息つくと紙巻タバコをくわえ、マッチでバシュッと火をつけ煙を吐き出した。

（紙巻タバコにマッチ...この時代にはないものだ）

南方はこの時代にはないものを見せられたが意外に冷静だった。「健はこの時代の人間ではない」とうすうす感づいていた。

「これでわかっただろ。オレはこの時代の人間じゃねえ。あんたもそうだろ」

健はくわえ煙草で南方に話しはじめた。

「ええ。申し訳ないんですが、私にも一本もらえませんか？」

「貴重な一本だぜ」

健はそういうとシンセイを一本差し出した。南方は健のタバコの火種を使って火をつけた。南方が煙を吐き出すと、健は待ちかねたように南方に話しかけた。

「あんたはどの時代から来たんだ？オレは昭和二十八年だが」

「私は昭和の後の平成二十一年からです」

「へーえ。やっぱりオレよりも後の時代なんだな。で、昭和の時代は何年までだったんだ？」

「昭和六十四年までですね」

「じゃああんたはオレよりも五十年以上後の時代から来たってことか」

「そうなりますね」

「じゃあ、オレはあんたのじいさんぐらいか」

「そうですね。そのぐらいです」

「じゃあ、オレの方が年上だ。お前のことは呼び捨ての『ジャン』で十分だな」

そう言うと二人は顔を見合わせて笑っていた。

その後も二人はいろんな話をした。上野の賭場の話、吉原の話、坂本龍馬の話...どれも同じ境遇

にある現代人の二人にとっては江戸での新鮮な出来事であり、話が合った。

「ジャン、五十年後の麻雀てどんなんだ。あんたは普段は積み込みはやらないようだが…」
健は南方に聞いた。遠い未来の麻雀がどう発展しているかが気になるようだ。

「私の時代には自動卓というものがあって、人間でなくて機械が山を積むのが主流なんです。ですから積み込みというのは私の時代の雀荘にはないんです。」

「なるほどな。だから裏技にはうとかったのか…だがあの十枚爆弾はどうしてわかった。あの技は江戸ではそんなには使っていないはずだぜ」

「いや、私のところにはポン、ポン、ポンで大四喜字一色を和了ったという情報が来てましたよ。それであの仕込みのやぶりかたを研究したんです。あの積み方は柔軟に出来ているんで、単純な技ではやぶれない。配牌の山ずらしと抜き技を複合しないと無理なんで、結構大変でした」

「それにしても積み込みは素人のはずなのに、よくあの積み方がわかったな」

健はその点はすごく不思議に思っていた。最初戦ったときには積み込みについては素人同然だった南方が、その次の時には五間積みで十四枚を仕込む難しい仕組みを完全に解明していた。『ポン、ポン、ポンで大四喜字一色を和了った』という情報だけではそこまでたどり着くのはほぼありえないはずだ。

「麻雀放浪記を読んできましたからね。十枚爆弾だとピンとききましたよ」

「麻雀放浪記？なんだそりゃ」

健は首をかしげていた。

（そうか、麻雀放浪記に出てる当人だもんな。知ってるわけがないか）

南方は苦笑した。健はその様子を不思議そうに見ていた。

「まあいいや。で、あんたの時代には裏技はどんなのがあるんだい？」

健は南方に改めて聞いた。

「私の時代には裏技はもうほとんどありません。牌を積むのも自動卓で機械が積むわけですから、やりようがないでしょう」

そういうと健は笑い出した。

「ハハハ、そんなわけねえだろ。牌を機械が積むぐらいで全部の裏技ができなくなるわけじゃねえぜ。自動積みで抜きはできなくてもすり替えや拾い、握りこみや通しには関係ないぜ。あんたの時代はずいぶんと甘く出来てんだな」

（全くその通りだ）

南方は自分でも甘さに気づいた。だが、それも自分で裏技の練習をしてきたからこそわかったことだった。

「健さん、いずれにせよ私は勝負では自分から裏技を使うようなことはやりませんよ。それは私のやり方じゃない」

「そうだろうな。だがオレはこの江戸時代を自分の腕で生きなきゃならねえんだ。オレはオレのやり方でしか生きられねえ」

そう言うとき健は立ち上がってタバコをおはぐろどぶに投げ捨てた。

「今度会うときはそう簡単にはやられねえよ。オレはオレのやり方でやる。そのときは、あんた

もあんたのやり方でしのいでみな。じゃ、またな」

健はそう言うと南方に背を向けて大門の方に歩き去っていった。

（そうか、オレがこの江戸時代でやるべきことは、きっとこれだ）

南方は健の話から自分がなすべきことのヒントをつかんでいた。思わずこぶしを握りしめると、心の底からワクワクした気持ちがわきあがってきていた。

気がつくと、龍馬の待つ大門へ走り出していた。

ノガミの健との再戦以来、南方雀はまた雀友堂の奥の間にこもり文机に向かっていた。雀友堂の運営は橘恭太郎や橘咲、仙吉たちに任せられていた。

（雀友堂はもはや私の麻雀教室というよりは、恭太郎さんの教室といった感じだな）

南方はそんな風に思っていた。だが決して嫌な気持ちではなく、むしろそのことを嬉しく思っていた。そして恭太郎は実際に力をつけていて、雀友堂内でも信頼される存在になっていた。

（私みたいないついなくなるかわからない人間が運営していくよりは、江戸の人がやったほうがいい。オレの役割は雀友堂を立ち上げることだった。そして今は...これだ）

南方は再び文机に向かい作業に集中していた。

「先生、入ります」

ふすまの向こうから咲の声がした。咲はふすまを開けて部屋に入ると、南方の文机の近くに座った。

「お茶をお持ちしました。先生、根をつめるのもほどほどにしてくださいませ」

咲はそういって文机にお茶を置いた。咲はノガミの健との再戦後も部屋にこもりきりになっている南方を心配していた。ノガミの健との再戦が終わり、また雀友堂で南方と一緒に活動できると思っていた咲だったが、そうならないことにも少しいらだっていた。

「ああ、咲さんありがとうございます」

南方はそう言ってお茶をすこしすすると、また文机に向かって書き物を始めた。

「先生は...何をお書きになっているのでございますか？」

咲は書き物を少し遠慮がちに覗き込んだ。

「これですか？これは雀友堂でも使っている麻雀の教科書『麻雀指南』の続編というか、別冊というか。そういうものです」

「左様で...で、先生、どのような内容で...」

「裏技についてです」

「う、裏技でございますか？先生が先ごろ返し技を練習されていた...」

咲は驚いた。まさか『麻雀指南』に裏技編を作るとは思ってもみなかった。

「先生は、雀友堂で裏技を教え広めるつもりなのでございますか？」

「ハハハ、まさか。これは相手に裏技を使われたときに対処したり、使われないようにあらかじめ防いだりするためのものですよ。相手の手口がわかれば案外簡単に防げたりするものです」

咲はこの説明に納得がいかなかった。雀友堂でも江戸でもそのような裏技を使う人間の話など聞いたことがない。ノガミの健は江戸に登場した初めての裏技の使い手で、他には見たことも聞いたこともなかった。

「ですが先生、世の中にはそのような裏技を使うものは健の他にはおりませぬ。先生がこれを『麻雀指南』に書けば、これを悪用するものが出てくるやもしれませぬ。それでもよいのでございますか？」

「確かに、それが原因となってそういう者が出てくるかもしれません。ですが、麻雀がこれだけ

江戸の町に広まってしまうと、裏技を使う人間が出てくるのはもう時間の問題だと思います。私は、そういう人間がはびこる前に対策しておくのがよいと思っています。それに...表も裏も知らなくては麻雀打ちとは言えないでしょう。私は麻雀プロのたしなみとして、雀友堂でも裏技についても教えようと思っているんですよ」

咲は、急に裏技について言い出した南方に違和感を覚えていた。今まで雀友堂でやってきたことが南方の麻雀なのに、ノガミの健の一件があったとはいえ、なぜ急に裏技についてここまでやろうとするのかがわからなかった。

「先生...未来では、裏技はどのようなものでございますか？」

咲は南方の真意を知るためにこのような尋ね方をした。南方の真意はそこにあるような気がしたからだ。

「未来では自動卓というものが普及していて、麻雀牌は人が積むものではなくて機械が積むものになっています。ですから、積み込みの裏技というのはほとんどないんです。なので、裏技というものに関する意識自体がすごく低いんですよ。そんなものは人が手で積むから行われるものだと思われるし、私もそう思っていました。でも、それはどうやら違うと分かったんです」

「ノガミの健との勝負で、何かあったのでございますか？」

「実は勝負のあとノガミの健と少し話をしたんですけど...私よりも前の時代でしたが、彼も未来から来た人間でした」

「本当でございますか？先生のように、未来から...」

咲は目を丸くして驚いていた。南方はさらに話を続けた。

「そこで彼に言われたんです。牌を機械が積むからといって裏技が全てできなくなるわけではないと。お前の時代はそんなに甘い時代なのかと言われました。言われてみればその通りで、私の時代では裏技については麻雀打ちであっても何も知らない人間も多いですし、健のような人間なら自動卓であっても誰にも気づかれないようにうまく裏技を使うだろうとも思いました。私はこの時代に裏技について記すことで、未来の世にそういう警告を出せればと思っています。それに、この時代から裏技対策を麻雀打ちのたしなみとして慣習を引き継いでいけば、未来でもそうなるんじゃないかなあと。そう思ってるんですよ」

そう言うと南方は筆を置き、咲に微笑んだ。

（先生は、未来の麻雀についても考えておられるのですね...）

咲は南方の考えの深さに感動し、思わず手伝いを申し出た。

「先生。咲も出来ることがあれば、先生のお手伝いがしとうございます。なにかお手伝いできることはございませぬか？」

「そうですね。実は裏技対策としてもう一つやりたいと思っていることがあるんです。できればそれについていろいろ教えていただけるとありがたいのですが...」

「咲に分かることでございましたら、なんなりと。」

咲は南方の役に立てる喜びと、未知の仕事をするワクワク感であふれていた。

「では...」

南方は咲を見つめ、笑みを浮かべながら自分の考えを伝え始めた。

「実は、自動卓を作りたいんですよ」

南方雀は少し真剣な顔になって、橘咲にそう伝えた。

「自動卓というのは...先ほど言われた未来の世界にある麻雀牌を積むからくり？のついた麻雀卓のことでございますか？」

咲は目を丸くしていた。自分で発した言葉ではあるが、咲には「麻雀牌を積むからくり」というものがどういうものか想像もついていなかった。

そもそも「機械」というものがなく、「自動で牌を積む」という発想すら現れようがない時代だ。

それでも「自動卓を作りたい」という南方の言葉にこういう反応を示すことができるのは、普段から南方が「未来からきた人間」であることを前提にコミュニケーションしている咲だけかもしれない。

南方は説明を続けた。

「そうです。実は私が未来から持って来た麻雀牌には磁石が埋め込まれていて、機械が自動で積むための細工がされているんです。この牌を作るのは容易ではないと思いますが、この牌を使った自動卓を作ることは可能じゃないかと思うんです」

おはぐろどぶの脇で健と自動卓の話をしたとき、南方は自動卓を作ることを思いついていた。そして、自分がその仕掛けの片割れとなる磁石入りのアルティマ用麻雀牌を五セット持っていることにもすぐに気づいた。

その後、南方は自動卓の仕掛けを紙に起こしていた。現代の自動卓の仕組みを思い出しながら、江戸時代でも作ることができそうな機構を設計していた。

「これが私が考えた自動卓の設計図です」

南方は文机に和紙に墨で書いた設計図を開いた。

「先生、設計図...なるものがふたつございますが...これはどう違うのでございますか？」

咲は素朴に疑問をぶつけた。

「ええ。現代では何通りかの自動卓の方式があるんです。そのうち大きく二つの方法を書いてみたんです。どちらが実現しやすいかは私ではわからないので、実際に作る人に選んでもらおうと思って」

南方は一枚を取ると説明を始めた。

「これはどちらの方法にも共通した問題なのですが、積む前には牌を全て裏返して整列させなくてははいけないわけです。そのためには...」

南方は卓の下に落とした麻雀牌のたまり場から取り込み口を作り、そこに取り付けたコイルに電気を流して磁力を発生させ、そこで牌をそろえて取り込む仕組みを図を見せながら説明した。

「すごいですね、先生...これが出来れば、確かに公平な勝負ができるようになりますね...」

咲は話の内容はよくわからなかったが、この話を聞いてそうつぶやいた。

「それで、咲は何をすればよろしいのでしょうか？」

咲は南方に向き直ってストレートに聞いた。

「はい。この仕組みを実現するには、足りないものが二つあります。一つは、『電気』、もう一つは電気をつかったからくりを作ってくれる『からくり師』です。この二つに心当たりがあったら教えてほしいのです」

設計していくうちに、自動卓を作るために不足しているパーツは「電気」と「からくり師」の二つだということまで南方は行き着いていた。電気を使った牌の取り入れ口さえ作れば、あとはなんとか作れるのではないかと南方は考えていた。

「あ、あの...先生。『電気』とは、どのようなものにございますか？」

咲は南方に素朴な質問を投げかけた。江戸時代には電気は身近にあるものではないので、当然といえば当然の質問だった。

「この時代には、平賀源内という人が長崎で見た『エレキテル』という静電気の発生装置を作ったと聞いています。咲さん、そのことは知っていますか？」

「電気とは平賀源内先生のエレキテルのことでございますか？それは存じ上げておりますが...平賀源内先生はもう百年ほども昔の方でございますし、その後エレキテルがどうなったかは何も存じませぬ。」

南方の問いに、咲は残念そうに答えた。

「そうですか...では、『からくり師』に心当たりはありませんか？」

「これも百年ほど昔の方で『からくり半蔵』というからくり師が江戸におられたということは聞いたことがございますが、今は『からくり師』と呼ばれるお方は江戸では聞いたことがございませぬ...」

「そうですか...」

「お力になれず、申し訳ございませぬ」

そう言うとき咲は深々と頭を下げた。

「いやいや、咲さんに話せただけでも大収穫ですよ」

南方は咲に笑顔を見せた。

（とはいえ、どうしたらいいのかなあ...）

南方が考え込んだところで、咲が口を開いた。

「坂本様にお話になってみてはいかがでしょう？坂本様は長崎に亀山社中がございますし、異人とも交流がございます。わたくしよりも見聞が広うございますゆえ、何かしらのお考えもお話いただけるのではございませぬか？」

（なるほど、龍馬さんか。確かに、この時代こういうことをやるのに龍馬さんほど頼りになる人はいないかもな）

南方はそう思った。

「咲さん、ありがとう。そうだね。早速龍馬さんに文を書くことにします」

南方がそういうとふすまがスッと開いた。

「先生。呼んだかえ」

開けたふすまの向こうには、龍馬が人懐っこい笑顔を見せて立っていた。

「龍馬さん！」

南方は文机から立ち上がると、龍馬に駆け寄った。

「どうしたんですか、龍馬さん。てっきり全国を飛び回っていると思っていたのに」

「ちょっと勝先生に用事があったの。江戸に来たきに、立ち寄ったっちゃうわけじゃ。」

「そうだったんですか...」

「で、ワシに文で伝えたいことって、なんぜよ？きいちゃるき、話してみんかえ」

龍馬はそう言うと部屋の中に入り、どっかりとあぐらをかいて座った。

「実は...」

南方は文机に座り、裏技を防止し公平な勝負をしたいために全自動卓を作りたいということ、設計を実現してくれる電気を使えるからくり師を探していることを龍馬に話した。

「ふむ。まあ、心当たりはあるがの」

龍馬はそう答えた。

「本当ですか！」

「おう。佐賀藩に、『からくり儀右衛門』と呼ばれるからくり師の田中久重という人がいてのう。この人は蒸気船まで作ったお人じゃ。この人なら先生のいう自動卓っちゃうのを作れると思うき」

「龍馬さんは、その人をご存知なんですか？」

「もちろんじゃき。わしゃあ船乗りじゃきねや。この国で蒸気船を作れるお人はこの人しかおらんし、武器も研究してつくっちゃうお人じゃき、亀山社中でも目をつけちゃうぜよ」

「龍馬さん、是非その人をご紹介願えませんか。お願いします！」

南方はそう言うと龍馬に頭を下げ、手をついて頼んだ。

「ハハハ、先生、そうまでせんでも紹介するき。五日後に品川から船が出るきに、それに乘っていくぜよ。わしも先生と佐賀藩まで行くきに」

（龍馬さん、ありがとう）

南方は龍馬の好意に感激し、涙を流していた。

「よかったですね、先生」

咲もそう言いながら、南方につられてもらい泣きしていた。

「それでは、旅の支度を」

咲はそれだけ言うと、涙をかくして部屋を出て行った。

「先生、先生、見えてきたぜよ」

そう言いながら南方雀の船室に坂本龍馬がやってきた。南方は船室の寝床に寝転がっていた。慣れない船旅で船酔いにやられて体力を削られ、げっそりやつれていた。

「...」

南方は無言で龍馬の方に顔を向けた。

「陸を見れば元気が出るぜよ。ほれ」

龍馬は南方を起こすと、半ば無理やりに船室から連れ出した。南方は龍馬に手を引かれ、よろめきながら船室を出て甲板に上がって行った。

龍馬は、品川から大阪へいく幕府の船団のうち一隻を借り出すことに成功していた。勝海舟に相談しに江戸までやってきたのはそのためだった。品川から江戸へ向かう船団は将軍家茂上洛に伴い幕府が集めたもので、「海上の大名行列」のようなものだった。

船団自体は将軍が京都にいる間は大阪に駐留する予定だったが、そのうちの一隻・観光丸だけはしばらく駐留した後に長崎へ向かっていた。南方と龍馬はそれに乗っていた。大阪にずっと駐留させておくのも将軍家の威光を示すためのものであったが、とにかく船が欲しい龍馬は勝と話をつけてその駐留船を借り、亀山社中の交易に使うつもりでいた。

このころの亀山社中は、イギリス・オランダ・朝鮮・薩摩・長州といった国々との交易をいろんな形で仲立ちしていたが、船が足りていなかった。龍馬は大胆にも幕府の船をこっそり借り受けて、長崎で交易しようとしていたところだった。

南方はそんな龍馬の策略に乗って長崎までやってきていた。

「ほれ、この正面に山と港が見えるじゃろう。あれが長崎の港ぜよ」

龍馬の言うとおり、船は港に向かって真っ直ぐ進んでいた。南方にもそのことはわかった。

（これでようやく船旅がおわりかあ...）

南方はそう思うと甲板にへたりこんだ。

当時の旅は徒歩が基本で、船というのは藩や幕府が持っているものだった。船旅などというのは当時としてはかなり贅沢な旅だった。それでも船に慣れていない南方は、長旅でかなり疲れていた。

この後は長崎から佐賀までの徒歩の旅が待っていた。だが、南方にとっては「揺れない陸で少し休みたい」というのが本音だった。

龍馬もそのことはよくわかっていた。

船乗りでもない素人が船で旅をすればたいていはこうなる。そんな人間たちを龍馬は数多く見てきた。勝海舟もそうだった。軍艦奉行並でありながら船には弱く、船の上では半病人のようになっていた。

観光丸は長い航海を終え、ようやく長崎の港に錨を下ろした。

「うーん、陸はええのお。ねや、先生」

龍馬は陸に上がると潮風を受けながら気持ちよさそうに伸びをした。南方も陸に上がったせいか、すこし生氣を取り戻していた。

「そうですね」

南方もそういうと手足を伸ばした。久しぶりに揺れない陸地に足を下ろしたこともあって、少し気分も良くなってきていた。

「ほいたら、先生。いくぜよ」

「どこへ行くんですか？」

南方は龍馬に尋ねた。

「丸山にいくぜよ」

「丸山？」

長崎の丸山というのは長崎の遊郭で、江戸の吉原、京の島原とともに日本の三大遊郭と呼ばれるほどのものだった。南方はそのことは知らず、龍馬についていった。

龍馬は、長旅で疲れた南方を休ませようと丸山に案内した。仕事のことを考えれば、まず亀山社中に顔を出すのかもしれないが、龍馬はそうはしなかった。丸山には龍馬と親しい芸妓がいるので、そちらに行きたかったという事情ももちろんあった。

「お元は、いるかえ」

「さ、坂本様...」

龍馬が丸山の引田屋に入ると、そこに居合わせたお元がこちらを見て驚いていた。お元はすぐにこちらに駆け寄ってきた。

「坂本様、いつお戻りになられたので...」

「たった今戻ったがじゃ。お元、ちくくと耳をかしちゃり」

龍馬はそう言うとお元にひそひそと耳打ちした。

「わかりました。おまかせくださいませ。」

お元はにこやかにうなづくと、土間に下りた。

「では、坂本様はおあがりくださいませ。南方様はこちらへ」

お元は南方の手を引いて外へ出ようとした。

「え？ちょ、ちょっと、どこへ？龍馬さん？」

急にお元に手を引かれた南方は少し狼狽して龍馬を見た。お元の手を引く力はとても強く、とても女性のものだとは思えなかった。

「わしゃあ、ええぜよ。ここで飲んじょくき。お元、頼んだぜよ」

「はい。坂本様」

南方はお元に手を引かれて引田屋からさらに坂の上へと上がって行った。

「こ、ここは？」

南方とお元は坂を上がったところにある、軒先に提灯の並ぶ建物の前に来ていた。南方はここが
どういうところなのかわからず、お元に尋ねた。

「湯屋でございます」

「湯屋？」

（ああ、銭湯か...）

南方はそう理解した。

「龍馬さんは、どうして一緒に来なかったんでしょう？」

「南方様が長旅でお疲れのようなので、坂本様が湯屋へお連れするようにと。坂本様は風呂がお
嫌いで。なかなかお入りになりませぬ」

「ハハッ、龍馬さんらしいな」

南方はそう言いながらも龍馬に感謝していた。当時の船旅では何日も風呂に入ることができず、
現代人の南方はストレスがたまっていた。

「では、どうぞ。お入りくださいませ」

南方はうつむいて笑いながら、お元に促されて湯屋に入った。

「いらっしゃいまし」

中に入ると襦袢を着た湯女たちが出迎えた。

（な、なんだここは...）

想像と違う出迎えに驚いていた。お元は湯女の一人を呼び寄せると、

「こちらは引田屋のお客様で。終わりましたら引田屋までお送り下さい」

と南方を湯女に預けた。

「わかりました。では、旦那。こちらへ」

湯女は南方の手をやさしく取ると、南方を奥へと連れて行った。

（これは銭湯じゃないな...ほぼソーランドだ...）

南方は裸で内風呂の風呂椅子に腰掛け、そう思っていた。湯女も湯船のそばに裸で座っていた。

湯女は湯船から桶で湯をすくい、南方の背中を二、三度流すと、桶で石鹸を泡立てはじめた。

（石鹸？江戸に来てからは初めて見たな...こっちに来てからは米ぬかばかりだったが...）

そう思い、南方は湯女に尋ねた。

「石鹸ですか？」

「旦那さん、シャボンをご存知で？長崎は異人が多いですからなあ。シャボンは長崎ぐらいにし
かないと思うとりましたけどなあ。シャボンでお流しすると気持ちいいですよ」

湯女はそういうと南方の背中を洗い始めた。

（確かに石鹸だとさっぱりするな。米ぬかではこうはいかない。しかしたまらんなあ...）

南方は極楽を味わっていた。次第に湯女の手は背中から前へと伸びてきて、南方の一物を石鹸で
やさしく洗いはじめた。

（うっ、...）

湯女の手で南方の一物は固く大きくなっていた。

「旦那さん、もうこんなに元気になって」

湯女はそう言いながら湯船から湯すくうと南方の全身の泡を洗い流した。

「旦那...こちらへ」

湯女はそう言って南方の手を取り、二人はそのまま湯船の脇で体を重ねた。

長崎の丸山に泊まった坂本龍馬と南方雀は、からくり師・田中久重に会うためにすぐに佐賀藩へと向かっていた。長崎から二日も歩くと佐賀藩内の領地へ入っていた。

「しかし、龍馬さんは早足ですねえ。私も東京人なので早足で歩くほうだと思っていたのですが、本当に早足だ」

南方は龍馬の早足に感心していた。

「まあ、わしには時間がないきねや。いろいろとやらにゃならんことがあるんぜよ。で、トウキョウちゅうがはどこの国ぜよ？そんなに早足で歩く国があるかねや？」

「いやいや...」

南方はつい「東京」と言ってしまったことに苦笑していた。

「どうやら、このようじゃねや」

佐賀藩お抱えの田中久重の家は佐賀城下の武家屋敷の一角にあった。

「御免、誰かおりませぬか」

龍馬が門を入れて呼ぶと、中から老人が一人でてきた。

「どなたですか」

「長崎は亀山社中の坂本と申す者。こちらは江戸から参りました南方雀。文をお送りしていると思いますが」

龍馬は老人を見てすこし改まって答えた。

「私が、田中久重です。文は拝見しておりますぞ。坂本殿に南方殿、どうぞ中へ」

出てきた老人がどうやらからくり師・田中久重本人のようだった。二人は中へ通された。

（なんだ、からくり師というからどんな人かと思えば、老人じゃないか。この人で大丈夫か？）

南方はすこし訝しく思っていた。

「文は拝見しちよりますけんど、一度、お話をうかがえますかな？」

田中老人は尋ねた。

「では、ご説明いたします。実は...」

南方は田中老人に説明を始めた。麻雀という遊戯のこと、イカサマを廃すため、牌を積む機能を付けた卓、自動卓を作りたいことなどを説明した。

「うーん...」

田中老人は渋い顔で腕組みをしてこう言った。

「ワシももうこの年で、作れるからくりもそう多くはない。小さいながら蒸気船も作り申した。これから作るものは次の時代のためになるものを優先して作りたい。実はワシのところには作ってほしいカラクリがあるといっちはいろんな人間がやってくる。ワシには今、そういう依頼でいっぱいなのじゃ。」

そう言って田中老人はお茶をすすった。

「遊戯の道具では、優先しかねますなあ」

田中老人はそういうと湯呑みを置いた。

「ですが、その遊戯の普及に命をかけているのが私でございます。麻雀は世の中を生き抜くための要素がしっかり詰まった遊戯だと思っています。これは人が生きていく上でとても大事なことです。これはその麻雀という遊戯が健全に発達していくために必要なものなのです...それから...これをご覧ください」

南方はそういうと自分で書いた設計図二枚と麻雀牌を取り出した。

「これが麻雀牌です。実はこの麻雀牌の背には、磁石が仕込まれております」

「なんと、この中に磁石が...しかもこの精巧な彫り物...」

田中老人は麻雀牌を見て感嘆していた。

「それを、このからくりを使って並べます。これは鉄芯に銅線を巻いたもので、コイルといいます。これに電流を流すと磁力が発生します。それを利用して麻雀牌を整列させ、並べます」

南方の説明に田中老人は驚いて尋ねた。

「エレキを使って磁力を発生させるのですか？そんなことが出来ますので...」

「出来ます。この仕組みは次世代のからくりの元になるとは、思いませんか？」

そういうと南方は田中老人を真っ直ぐに見つめた。

（こ、これは...）

田中老人はあらためて設計図を手にとって見た。

（なるほど、蒸気だけではなく、こういう電気と磁力を使えば細かいからくりにも応用できそうじゃ。それにしても、こんな技術は聞いたこともない...）

田中老人は南方の顔を真剣なまなざしで見つめ返して言った。

「わかりました。その自動卓とやらを研究して試作してみることにしましょう。それには、銅線や蓄電池が必要じゃが...」

「それはわしが用立てるぜよ」

ここで龍馬が口をはさんだ。

「必要なものは亀山社中が用立てるき。必要なものがあれば、亀山社中まで文をくれればええ」

田中老人はうなづくと、

「わかりました。では南方殿、このからくりについて、詳しく教えてくださいませんか？」

と南方に笑顔を向けた。

「はい。では、詳しく打ち合わせましょう」

二人は設計図をはさんで詳細な打ち合わせを始めた。打ち合わせは夜を徹して続けられた。田中老人も南方もこのからくりにも夢中になり、密度の濃い打ち合わせとなった。

龍馬はただ、子供のように夢中な二人を温かい目で見守っていた。

第三十五話 呼び出し

佐賀藩の田中久重に自動卓作りを依頼した南方雀は再び江戸に舞い戻っていた。坂本龍馬とは帰りの船も一緒だったが、龍馬は土佐藩に用があるとのことで土佐で船を降りて南方とは別れていた。

江戸に戻った南方は、作成した麻雀テキスト「麻雀指南」の別冊「裏技編」を元に、裏技対策を雀友堂の塾生に教え始めていた。まずは仕込み技の本質を知るため、手さばきと仕込みの指導から入っていた。

「爆弾積みは仕込み牌を手のひらに入れておいて、積むときには仕込み牌を割って間に六幢入れて積みます。こうです」

南方は仕込み牌の真ん中を割って六幢入れる積み方を見せた。配牌を実際に取りて見せると、



と綺麗に三元牌が並んでいた。

「オオー」

と塾生から感嘆の声が上がった。

「相手にこう積まれたときには、どう返したらいいと思いますか？恭太郎さん」

橘恭太郎はこう聞かれて考え込んだ。

「う、うーん...わかりませぬ」

「返し方は一つではありません。大まかには『敵の嫌がることをやる』か、『やらせておいてそれ以上の技で返す』かの二つがあります。恭太郎さん、恭太郎さんが仕込んだとしてサイを振ってみてください」

「はい」

恭太郎はサイを振った。と同時に南方は足で卓の足を蹴って卓を揺らした。サイは卓上で跳ね、出目が変わった。

「こういう仕込みはサイの目が大事です。相手はサイの目もきっちり出したい目を出してきます。こうやって出目を変えれば、サイを振る人間も変わり、積み込みも有効ではなくなります」

（な、なるほど。そんな方法があるのか）

恭太郎は目を丸くした。

「これは簡単にできるほんの一例です」

南方はそう言うとともに続けた。

「大事なことは相手の技を冷静に見極めて、機を見て臨機応変に動くことです。この『卓揺らし』も揺らす機がわからなければできません。そのためには、まず自分でこの爆弾積みを練習してみてください。いいですか。自分が使うためではなくて、返すために練習するんです。『麻雀指南』を見て実際に手を動かしてみてください。では練習を始めてください」

塾生たちは仕込みの練習を始めた。塾生たちは恭太郎をはじめ正義感の強いものが多く、この麻

雀というゲームでの不正をヨシとするものはいなかった。上野の健との勝負の話を聞き、「そんなことはあってはならない」と憤っている者も多かった。そのせいか、この「返し技訓練」には皆熱心に取り組んでいた。

（みんな、よく理解して練習してくれている...）

南方は練習を見回りながらうれしく思っていた。

すると、突然ふすまが開き、橘咲が入ってきた。

「南方先生、勝先生がお見えになりました」

「勝先生が？」

「はい。奥の間でお待ちです」

南方は意外に思った。慶応年間のこの頃、勝海舟は軍艦奉行の職を解かれ閉門蟄居（謹慎）していると聞いていたからだ。

（勝先生、もしかして謹慎が解かれたのかな？）

南方は江戸時代にタイムスリップしてきたとき、見ず知らずの自分を拾ってくれた勝に恩義を感じていた。なんとか謹慎している勝の力になりたいとも思っていた。そんな勝が訪ねてきてくれて、南方は嬉しかった。様子を聞いて何かできることをやりたいと考えていた。

南方はそんな気持ちで雀友堂の奥の間のふすまをあけると、勝は姿勢正しく座っていた。

「勝先生...お久しぶりです」

「おう、南方先生。元気だったかい？」

「はい。なんとか。勝先生こそ、蟄居されていたと聞いていたのですが...もうよろしいのですか？」

南方はそう言って部屋に入ると、勝と向かい合って座った。

「おう。先生よ、家茂公が大阪で亡くなって代わりに一橋慶喜公が徳川宗家を継いだって話は、もう知ってるかい？」

「いえ、初めて聞きました。そうなんですか？」

「それでよ、慶喜公もやる気だった長州征伐も結局手打ちになっちまってな。で、おいらが長州との和睦に行ってきたんだ。まったく、慶喜さんもこういう時ばかりオレを使いやがってよ。まあ、でも良くわかっておられる。老中の板倉だのじゃあ、戦の和睦はできねえしなあ。まあおかげで閉門蟄居が解かれて、ありがてえ話なんだけどな」

「そういうことだったんですか...」

南方は安堵し、笑顔を浮かべてうなづいた。勝はここ数ヵ月、長州征伐の和睦のために京と広島を行き来していた。京での慶喜への報告を終えて、江戸へ戻ってきたところだった。

「で、今日の用向きなんだがな...」

「はい」

勝はかわらずリラックスした様子で用件を切り出した。

「慶喜さんがよ、お前さんを京に呼んでおられる」

「えっ？」

南方は驚いた。慶喜公には青龍院の賭場で会ったことが縁で、雀友堂設立・運営の支援をして

もらっていた。「麻雀指南」の出版も、この場所の提供も慶喜の計らいで行われていた。

慶喜とは青龍院の屋根裏部屋と一緒に酒を酌み交わした思い出もある。

「それは...どういことですか？」

「慶喜さんは、お前さんと麻雀を打ちてえらしい」

「本当ですか？」

南方は当時の将軍・家茂の後見職だった慶喜の麻雀の先生でもあった。雀友堂の前身でもある青龍院での麻雀教室で慶喜の麻雀にアドバイスをしたこともある。そんな思い出が南方の頭の中を駆け回っていた。

「ああ、本当だ。京都の慶喜さんに和睦の報告に行ったときに、おいらにそう言いなされた」
そう言うとな勝は出されたお茶をぐびっと飲んだ。

「どうだい。行ってくれねえかい？」

勝は南方の顔をのぞきこんだ。

「もちろん行きます。勝先生にも、慶喜公にも、返さなくてはならない恩義もありますから」
「そうかい。すまねえな。もちろん幕府が責任を持って先生を京都に送り届ける。だがよ、先生。幕府の威信も地に落ちちまった今、京都はあぶねえ」

「そうなんですか？」

南方は勝に聞いた。

「新撰組は人をきりまくってるし、薩摩は公家の岩倉具視を使って宮中工作をしてる。天子様をお守りするためと称して京に兵隊も入れているが、あれはそんなもんじゃなくて、倒幕のための兵隊だ。もういつ動いてもおかしくねえ。もちろんそうならねえようにはするが、とぼっちりをくうかもしれねえ」

（そうか、オレは幕末の京都に行こうとしているのか...）

南方はいまさらながら気がついた。幕末の京都は倒幕の舞台であり、たくさんの血が流れた場所でもあることを思い出した。

「くれぐれもお気をつけて」

南方は勝にそう言われた。

「それからこれは出来ればでいいんだが...」

勝はそう言うとな懐から手紙を出してきた。

「これを伏見の寺田屋に届けてほしい。龍の字宛の手紙だ」

「龍馬さんへの？」

「おうよ。あいつぁ、今かなり危険な状態にある。先生も龍の字には生きててほしいだろ？これにはあいつがこの先生き延びるためのすべが書いてある。こいつを届けてくんねえか」

「寺田屋に届けばよいのですか？」

「龍の字に直接会うのは、おそらく無理だし、なにより危険すぎらあ。途中寺田屋に寄るように言っておくから、先生は届けてくれるだけでいい。実は今はそれすら難しい状態でな。先生にこうして頼むより他ねえんだよ」

「わかりました...で、龍馬さんはそんなに危険な状態なんですか？」

幕末の歴史はいろんなことが短い間に起こっていてとても複雑だ。南方はこの時期の龍馬がどのような状態におかれているかということを知らなかった。

「ああ。あいつはこの前までは薩長の間を取り持っていやがってよ。薩摩が長州征伐に兵を出さなかったのはどうやらそのせいらしい。龍の字がやったことだってことも幕府にばれちゃった。幕臣のおいらが言うのもなんなんだが、あいつは今幕府の『お尋ね者』なのよ」

勝は一息入るとまた話し始めた。

「それだけじゃなくてな。先生は龍の字と長崎にいったろ。幕府の船で。」

「はい」

「あの時あ、ヤツは帰りに土佐で降りただろ？あれは土佐の後藤象二郎に呼ばれていったらしい」

「そうなんですか？」

「おう。ヤツは倒幕のために薩長に手を結ばせたまではよかったが、力を持った薩長は武力で倒幕をしようとして京都に兵を集めてる。すると龍馬は今度は土佐の裏で動くようになった。龍馬にとっちゃあ、武力での倒幕は本意じゃねえみてえだな。ヤツは後藤と何かをたくらんでる。亀山社中も海援隊と名前を変えて、土佐藩の名前で船を調達し、商売してるらしい...ヤツはヘタすると幕府だけでなく薩長も敵に回すことになるかもしれん」

ここまで聞いて南方にもようやく状況が理解できた

（大政奉還...ということか！龍馬さんは土佐藩を動かして大政奉還を狙っている...しかも幕府だけでなく薩長を敵に回してまで...）

南方は震えた。

（龍馬さんを...なんとか助けなくては...）

南方は勝からの手紙を握り締めてそう誓っていた。

第三十六話 別れ

南方雀は京にいる徳川慶喜に会うため、旅支度をしていた。

船は勝海舟の手配で幕府の輸送船・順動丸があてられ、五日後に横浜から大阪へむけて出航予定となっていた。

「先生、持って行かれるものは、このようなところでよろしゅうございますか」

橘咲は南方の旅支度を手伝っていた。

「うん、この時代の旅支度はよくわからないので...咲さんにおまかせしますよ」

「先生、未来の旅は...どのようなものでございますか？」

咲は好奇心に満ちた目で南方に聞いた。咲は未来の時代への関心が強く、南方にたびたび質問していた。南方もそれに答えるのを楽しみにしていた。

「今回は船旅ですよ。未来にも船旅はあるのですが...船での旅はすごく時間がかかって悠長なものになってしまっていますね。」

「そうなのでございますか？今は船での旅以上に速く旅する手段などございませぬ。どうやって旅するのでございますか？」

「未来では、新幹線という速い乗り物があります。江戸から大阪まで一刻で着いてしまうのですよ。飛行機という空を飛ぶ乗り物もあって、それはもっと速いんです。地球の裏側にだって行ってしまうものなのですよ」

「それは...すごいことでございませぬ...咲には想像もつきませぬ」

南方はうれしくなってさらに続けた。

「新幹線の原型はもうこの時代にもあるのですよ。アメリカにはトレインというものがあって。今の蒸気船と同じように石炭を燃料として動くのです。新幹線はその進化したものなんですよ」

「そうなのでございますか...アメリカではもう今の世にトレインなるものがあるのでございますか...」

咲は瞳をキラキラさせながら感心していた。と、次の瞬間咲の顔が曇った。

「先生...咲は先生と一緒に参りとうございます」

咲らしく、唐突に自分の思いを告げ始めた。南方は驚いたがすぐに反応した。

「咲さん、いけませんよ。勝先生も言われてましたが、京都は今危険すぎます。恭太郎さんも栄さんも賛成するはずがありませんよ。来てはいけません」

「先生は、いつか未来へお帰りになる方でございます...長崎へ行かれたときは何とも思わなかったのですが...今回先生とお別れしてしまったら、もう二度と会えないような気がしているのでございます...母と兄はわたくしが説得いたしますゆえ、どうか、どうか咲と一緒に連れくださいませ...」

咲はそう言うと南方に抱きついた。南方はそれに応えるように咲の背中をやさしく包んで言った。

「咲さん...私はきっと帰ってきますよ...咲さんに会いに。それにまだ、私にはやる残って

います。裏技対策だって、みんなにまだまだ教えなくてはなりませんし…」

「先生、それでも咲は一緒に参ります」

咲は体を離し、南方を見上げて言った。

「これから、兄と母を説得して参ります」

そういうと咲は走って出て行ってしまった。

（さすがに咲さんは京都には連れて行けない…栄さん、恭太郎さん、何とか引き止めてくれ）
南方はそう願わずにいらなかった。

五日後、南方は旅支度をして横浜にきていた。咲も旅支度をして一緒に来ていた。

咲は橘の家を勘当同然となって南方についてきていた。

恭太郎は咲の頑固さにあきらめていたが、栄は咲以上の頑固さの持ち主だった。

「どうしても行くというのなら勘当だ」

とまで言われたが、咲は押し切って家を出てきてしまった。

「それでは、参りましょうか」

咲は嬉しそうに言った。勘当同然で家を出てきていながら、咲はとにかく明るかった。咲は南方と一緒にいられることが、ただ嬉しかった。咲は残り少ないと感じていた南方との日々を精一杯満喫するつもりだった。当時はまだそのような慣習はなかったが、咲にとっては新婚旅行のような気持ちでいた。

南方と咲は、船に乗り込むための小船に乗ろうとすると、背後から声がした。

「南方先生、咲様、ご無沙汰しておりんす」

二人が振り向くと、そこには野風が立っていた。野風はふだんの花魁の衣装や髪型ではなかった。べっ甲のかんざしも、前で結んだ帯でもなく、普通の日本髪に普通の着物を普通に着ていた。

「の、野風さん、どうしたんですか？びっくりしましたよ。あれ、花魁の衣装ではないのですか？」

南方はすこしどぎまぎしながら答えた。咲も驚いていた。

「年季が明けたのでありんすよ。あちきはもう吉原の人間ではないのでありんす。今は江戸で手習いの塾をやっているでありんす。子らに手習いを教えているのでありんすよ」

野風はそう答えた。

「今日は、どうしてここに…」

南方は不思議に思って聞いた。今日ここから京都に行くことを知っているのは限られた人たちだけだったはずだった。

「実は、麻雀を習いに雀友堂に通おうと思いんしてなあ。ちょうどお二人が江戸を発った日に雀友堂へ行きんしたら、お二人が京へおのぼりになるとのこと。もしかすると南方先生と今生の別れになるやもしれぬと思いんしてなあ。今日、こちらまでお見送りに来させていただいたのでありんす」

「雀友堂へ行ったんですか？」

「へえ、先生がなかなか吉原まで足をお運びいただけませんゆえ、あちきが南方先生に麻雀を習

いにくしかないと思ひんしてなあ。ちょうど恭太郎様がお相手してくださんした。」

（野風さん、もしかして私と同じことを考えて...）

咲はそう思った。野風も南方と今生の別れをすると感じているのではないかと、直感的に思った。

「野風さん、どうもありがとうございます」

南方は深々と頭を下げた。野風はそれを見てクスッと笑うと、南方に話しかけた。

「先生...もう少し近う...こちらへ」

「ハ、ハイ」

南方は言われるままに野風に一步近寄った。

「！」

野風は南方にすっとすり寄って襟をもって引きよせると、南方の唇にキスをした。南方は驚いてされるがままになっていた。咲も目を丸くして見ていた。現代に残してきた恋人・未来にそっくりな野風にキスされて、少し未来のことを思い出していた。

「先生...お気をつけて...」

野風は唇を離してそう言うと、つかんだ南方の襟を直した。

「せ、先生、では参りましょう。野風さんも、き、今日はありがとうございました」

咲は少し動揺したまま、南方の袖をつかむと小船に乗り込んだ。

「南方先生、咲様。おさらばえー」

野風はそう言うと、小船をただ見送った。小船は岸を離れ沖の順動丸へと漕ぎ出していき、どんどんと姿が小さくなっていった。

（南方先生...本当は私もご一緒に参りたいところでありんすが...咲様に先を越されてしまったでありんすよ...吉原には参られず、結局体を交わすことはできんせんしたが...何かこう、懐かしいような...そんな縁を感じるお方でしたなあ...）

野風はそんなことを思いながら、順動丸が見えなくなるまで二人を見送っていた。

南方雀と橘咲を乗せた蒸気船・順動丸は、二日後の朝方大阪についた。二人は幕府がつけてくれたお供の者たちに案内され、今度は「三十石船」と呼ばれる小船に乗り換えた。これも幕府が貸切ってくれていた。ここから先は淀川をさかのぼって京へいくというルートだった。

咲は横浜からずっとむくれていた。

南方は順動丸が横浜を出てから船酔いがひどく、船室にこもったままだった。咲は意外にも船酔いはまったくせず、持ち前の好奇心から船旅を楽しんでいた。甲板で潮風を浴び、釜炊きを手伝ったりもしていた。

だが、それは心のもやもやを晴らすためだった。

咲は横浜での南方と野風のキスがずっと心にひっかかったままだった。野風に不意打ちされたとはいえ、拒否しようと思えばできたんじゃないか、南方も野風のことをにくからず思っているのではないか、船室でじっとしているとそんなことばかりを考えてしまう。そんな状態だった。

咲は京都へ向かう小船の中ではこわい顔をしてうつむいていた。

「咲さん、もしかして...怒ってます？」

南方はなんとか咲の機嫌を取ろうと思っていたが、あまりいい言葉をかけることは出来なかった。南方はこと女性に関しては不器用なほうだった。

「お、怒ってなどおりませぬ」

咲はプイと横を向いてしまった。咲もまた不器用な反応をしながらも、ひそかに決意を固めていた。

夕方、三十石船は伏見に着いていた。ここからは徒歩で京に向かうことになる。

伏見の船着場で船を降りようとしたとき、見慣れた顔が目に入った。

「辰五郎親分...」

南方は思わず声を出した。新門辰五郎は慶喜の指示で京都から迎えにきていた。このころの辰五郎は慶喜の上洛後も慶喜の護衛を務めていて、町人でありながら慶喜の私的な話し相手にもなっていた。

「先生、ひさしぶりじゃねえか」

辰五郎は京都でも江戸弁でこう声をかけた。

「親分、こんなところでどうしたんですか？」

「どうしたもなにも、慶喜様に言われてよ。お迎えに来たんじゃねえか」

「そうなんですか...ありがとうございます。さあ、咲さん」

南方は船を降りる咲に手を貸した。咲も南方の手を持ってそろりと船を降りた。

「じゃあ、早いとこいくぜ。日が暮れちまうからよ」

辰五郎は咲が船を降りるのを見ると、すたすたと背を向けて歩き始めた。

（相変わらず、せっかちな）

そう思うと南方は苦笑していた。

「じゃあ咲さん、こちらも急いで行きましょう」

南方は自然に咲の手をとっていた。

「は、はい...」

手をとられた咲は少し顔を赤らめながら南方についていった。

辰五郎はを組の若い衆を三人ほどつれて迎えに来ていた。を組の若い衆に荷物をあずけ、船着場から少し歩くと、「寺田屋」という提灯が下がっているのが見えた。

（ここが寺田屋か...）

そう思いながら寺田屋の建物を眺めていた。南方は何度か龍馬宛の手紙をこの寺田屋宛てに出したことがあった。

（そうだ、手紙を届けないと...）

南方は勝から龍馬宛の手紙を預かっていたことを思い出した。龍馬宛の手紙はとりあえず寺田屋に預けておけば、いずれ間違いなく龍馬に届く。

「親分、ちょっとこの船宿に寄り道していいですか？」

「そいつあ無理だな。早くいかねえと日が暮れちまうぜ。そんな暇あねえよ」

「わかりました...すみません」

（仕方がない。またここに届けにくるか...）

南方はあきらめて一緒に歩き始めた。歩きながら南方は寺田屋のことを考えていた。

（そういえば龍馬さん、あそこで暗殺されるんだよな...「あそこの船宿は危ない」って会って言わなきゃ...）

南方は幕末の歴史に詳しくなくて、少し勘違いをしていた。このころ龍馬は寺田屋ですでに一度襲撃を受け、命からがら逃げおおせた後だった（[寺田屋襲撃事件](#)）。寺田屋は龍馬が定宿にしていた伏見の船宿で、京都での活動の拠点としていた。ここにくれば龍馬のことが聞ける、そういう場所だった。

（龍馬さんに会うには、まずこの寺田屋を訪ねるのが最初のとっかかりだな...）

南方は寺田屋の前を歩きながら、また訪ねようと心に決めていた。

南方と咲は辰五郎に連れられて先斗町に来ていた。

（ここが先斗町か...現代でも来たことなかったな...今もこんな感じなのかな...）

南方はそんなことを思いながら、江戸時代の先斗町をしげしげとながめていた。細い路地にはお茶屋さんや旅籠が並んでいた。咲もはじめてくる京都の町をものめずらしそうに眺めながら歩いていた。

「これは...なんでございますか？」

咲は軒下にある竹の格子のようなものを指さして聞いた。

「これはイヌヤライでございますよ」

隣を歩いていたを組の若い衆が答えた。

「イヌヤライ？」

「ええ。犬の小便を防ぐものらしいです」

「なるほど。京にはそのようなものがあるのですね...」

咲は犬矢来を見ながら感心していた。

「先生、ここだぜ」

先頭を歩いていた辰五郎は、右手にある旅籠を指差すと自ら中に入ってしまった。

「御免よ」

「へえへえ。これはこれは辰五郎の旦那、おこしやす」

旅籠の女将は丁寧にお辞儀をすると、京都弁ではんまり答えた。

「女将。今日世話んなる南方先生と咲様だ。よろしくたのむぜ。明日の朝、迎えに来る。じゃあ、先生、咲様。あっしらはこれで。おい、いくぞ」

辰五郎はそういうとさっさと出て行った。せっかちな江戸っ子らしい立ち回りだ。

「んふふふ、なんともせっかちなお方どすなあ」

女将は口元を袖で隠しながら、笑顔を浮かべていた。

「南方先生、咲様、こちらへおかけくださいな。お荷物はこちらへ置いとくれやす」

女将に促されて、二人は上がりかまちに腰掛けた。まもなく、旅籠の小僧がたらいを持ってきて二人の足を洗い始めた。

（京都弁というのは、なんともいいものだな...）

足を洗ってもらいながら、南方はそんなことを思っていた。

先斗町の旅籠では、南方雀と橘咲は「慶喜様の客人」ということで手厚くもてなされた。

南方たちには旅籠でも最も見晴らしの良い、鴨川沿いの二階の部屋をあてがわれた。十月ということもあり少し寒い時期ではあったが、鴨川のゆるやかな流れが見え、せせらぎの音が聞こえていた。まだ紅葉時期ではないが、対岸にはすこし葉が色づき始めた樹木が見え、間近に自然の伊吹きを感じられるところだった。

風呂から上がってきた南方は、浴衣姿で窓を開けて鴨川を眺めていた。少し冷たい風が心地よかった。

（現代でも京都のこの景色はあまり変わらないのかもしれないな...現代の京都は行ったことないけど、女の子たちが京都に行きたがるのもなんとなく分かる気がするな...江戸とはまた違った風情がある...）

南方は鴨川を見ながらそんなことを考えていた。

（咲さんも、京都に来てこの風情を感じられただけでもよかったかもしれないな...ずっと江戸にいたらこんな体験はできないだろうしな...）

南方はそう思うと無意識に微笑んでいた。

「旦那はん、そなんしはったら風邪を引いてしまいますえ」

気がつくのと、旅籠の女将が部屋に入ってきていた。

「今、お連れさんがお風呂入ってますさかいに、上がらはったら夕げの準備しますよって。こちらでお食べにならはります？」

「そうだね、そうしてくれるかな」

「へえ、よろしおすえ。ほな、あとでまいりますさかい」

女将はそう言うと、座ってお辞儀をし、女将らしく礼儀正しく部屋を出て行った。

（景色だけじゃない。人も話し言葉も風情があるんだなあ。京都に来てよかった...）

南方は京都という土地を気に入っていた。

「お湯加減はどうですか」

「はい。よろしゅうございます」

咲は湯船につかりながらそう答えた。外では女中が薪をくべていた。

「ふ〜」

温まった咲は深く息をつき湯船から上がると、体を洗うためのぬかぶくろを探した。

（今日は...きれいにしておかねばなりませぬ）

咲はそう思っていた。

「申し訳ございませぬ。ぬか袋は...ございませぬか」

「うちはぬか袋はあらしまへん、長崎より取り寄せたシャボンがあると思うんどすけど」と女中は答えた。

「シャボン？」

「へえ。四角い、白いのがあらしまへんか？それがシャボンどす。手ぬぐいにこすりつけると泡が立ちますよって、それで洗うとくれやす。洗わはったらお湯で流しとくれやす。さっぱりしおすえ。」

「わ...わかりました。ありがとうございます」

咲は半信半疑ながらも手ぬぐいに石鹸をこすりつけあわ立てると、体を洗い始めた。

（これは...気持ちの良いものでございますね...）

はじめて石鹸で体を洗った咲は初めて体験する心地よさを感じていた。咲は自分の体を足の先まで丹念に洗いはじめた。洗い終わって湯をかけ体の泡を洗い流すと、全身がさっぱりした感じがした。

（何か、体がすごくキレイになったような気がいたします...）

咲はもう一度湯船につかった。

「シャボンとは...気持ちの良いものでございますね」

咲は外の女中に問いかけた。

「シャボンで洗うと体がさっぱりとするんどす。これで洗うと、もうぬか袋には戻れまへんえ」

「確かに...そうかもしれませぬ」

咲はそう言いながら、湯船の中で決意を固めていた。

（今晚...咲は南方先生のものになります...）

咲は南方を今晚床に誘うつもりでいた。南方と一緒に京に行くと決めてから、ひそかにそうしようと思っていた。咲は外の女中に礼を言って風呂場を出ると、浴衣を羽織った。咲は南方にアピールするため、少し浴衣の着方を変えようと考えた。

（前を少し浅めにいたしましょうか...今日は娘のような着方ではいけませぬ）

咲は浴衣の前を浅めにあわせ、胸元に鋭角なVの字を作り少し開けて着た。帯も普段のように上目に締めるのではなく、少し下目に締めた。

（これで...よろしゅうございますよね。先生...）

浴衣を着た咲はくしを手にとると、髪を整え始めた。ドキドキとワクワクが入り混じり、咲は自然と笑顔になっていた。

「先生、咲です。入ります」

咲が南方の部屋に入ると、女中が夕食の準備を終えたところだった。

お膳が二つ相向かいあって配置され、おひつから女中が白飯を盛っていた。お膳には普段とは違うご馳走がのっていた。焼き魚に野菜の煮物、加茂茄子の田楽、茶碗蒸しに香の物、白味噌の味噌汁などだった。

「あとは私がやりますゆえ...」

「へえ。よろしおすか」

咲は女中からしゃもじを取り、飯を盛り始めた。女中はお辞儀をして部屋を出て行った。

「先生、どうぞ」

咲は南方にすり寄ると飯を盛った茶碗を差し出した。

「あ、ありがとうございます」

（今日の咲さん、なんか妙に色っぽいな...胸元も少し開けてるし...風呂上がりのいいにおいがする...）

南方は茶碗を受け取りながら、そんなことを感じていた。

「先生、ではいただきます」

「そ、そうですね。では、いただきます」

「いただきます」

二人は礼をして食べ始めた。

「先生、お酒もついております。おつぎいたしましょう」

咲は提子（ひさげ）をもって南方のそばに寄ってきた。

「い、いや、私はお酒は飲めないんで」

「では、咲がいただきます」

咲はお膳から猪口を取ると、提子を南方に差し出した。南方はちょっと驚きながらも提子を受け取ると、咲に酒を注いだ。

「いただきます」

咲はそう言って猪口の酒を飲み干した。飲み干すと、上気したのが顔が少し赤くなっていた。少し開いた胸元と相まって、咲は色っぽさが増していた。

（参ったな...）

南方は今日の少し色っぽい咲にドギマギしていた。今まで付き合っていた清楚な武家の娘・咲とは別人のようにも思えた。

咲は酒を飲んだからか、すこしうるんだ目で南方を見つめて言った。

「先生...咲は...今晚、部屋で先生をお待ちしております」

「え？」

南方は目を見開いた。

「今晚...咲の部屋にしのんでいらしてくださいませ。」

「さ、咲さん、本気ですか？」

「咲は...本気でございます」

二人は真剣な目で見つめあい、沈黙が流れた。

（咲さんは本気だ...）

南方は少しうつむいた。いつこの時代からいなくなるかもしれない自分が、世話になった武家の娘に手をつけるということに、良心の呵責を覚えていた。現代には恋人の未来もいる。

長崎の丸山では湯女とそういうことをしたが、あれはあくまで遊びだった。だが今回は事情が違う。南方は「ここで咲に手をつけてはいけない」と感じていた。

「咲さん、私には未来の世に...その...」

「かまいませんぬ」

「えっ」

「先生ほどのお方、未来の世に決めたお人がいるかもしれませぬが、この時代ではわたくしとお

決めくださいまし。いずれ未来にお戻りになる日が来るでしょうが...それはそれでかまいません
」

「でも、咲さん、咲さんは武家の娘さんですよ？傷ものだと言われてもよいのですか？」

「咲はもう、武家の娘ではございませぬ。咲にはもう、帰る家もないのでございます」

南方は、咲の気持ちに圧倒されていた。

第三十九話 京都の夜

夕食を終えると、橘咲は酒と恥じらいで少し顔を赤らめながら部屋を出た。

「先生...それではまた後ほど...」

咲はそう言ってふすまを閉じた。

部屋に一人残された南方はこの後どうするかをじっと考え込んでいた。

（オレは...どうしたらいいんだ？咲さんは強い意志を持って覚悟を決めている...でも、オレはいついなくなるかわからない人間だ。江戸の世に若い武家の娘さんを傷ものにしていいのか？咲さんのことを本当に思うなら、こんなことはしちゃいけないんじゃないか？第一、栄さんに申し訳が立たない。でも、オレだって咲さんのことを...）

南方は葛藤していた。咲を思う心と義理や倫理観、肉体的な欲望が入り混じった複雑な感情でいっぱいになり、頭を抱えていた。

ふと気がつくと、鴨川のせせらぎの音が耳に入ってきた。

（そうだ、ここは京都なんだよな...咲さんと京都に来てるんだ...）

南方はあらためて今の状況を思い出した。自分は咲と一緒に京都に来ているのだと。おそらくこのようなことはもうない。南方はこの旅が咲との最後の旅になるような気がした。

（いくしかないか。これをオリるわけにはいかないだろ）

南方は腹を決めた

亥の刻（夜十時頃）の鐘が鳴った。ちょうどその頃、南方は咲の部屋のふすまを開けていた。咲は布団の上に座って南方を待っていた。そんな咲を南方はいとおしく思った。

「咲さん...」

「先生...来ていただけたのですね...咲はうれしゅうございます」

浴衣姿の咲はうるんだ目で南方を見つめた。南方はゆっくりと咲に近づき、黙って咲を抱きよせた。咲のうなじからは石鹸の匂いがしていた。

（心臓の鼓動が早い...咲さんはものすごく緊張している）

南方は咲の鼓動が大きく速くなっているのを体で感じていた。おそらく咲は初めてだろうと直感した。

（ていねいに扱わなくては）

南方はそう思うと、咲をやさしく寝かせ自分も横になった。咲を抱きながら浴衣を脱がせると、暗闇に白い体が浮かび上がった。

「綺麗ですよ...咲さん」

南方はお世辞でもなんでもなく、心底そう思って言った。咲は恥ずかしさから顔がほてり、白い首筋がピンクに染まった。

南方はやさしくゆっくりと愛撫を重ねていった。咲の体が熱くなり反応が変わってきたころ、南方と咲は一つになることができた。

「んっ...」

その瞬間、咲は背中をのけぞらせると、咲の目からは涙がこぼれた。

「咲さん、大丈夫ですか？」

南方はのけぞった咲の背中を抱きながら聞いた。

「先生...咲はうれしゅうございます...」

「咲さん...」

二人は見つめあい言葉をかわすと強く抱き合った。咲が大きな目を閉じると、さらに大粒の涙があふれた。

南方は鴨川のせせらぎと障子から差し込む朝日で目を覚ました。昨晚南方は何度も咲を抱き、そのまま咲の部屋で眠ってしまっていた。咲はまだ南方のとなりで寝息を立てていた。

（咲さん...）

南方は咲の寝顔を見ながら微笑んでいた。咲への愛おしさが自然とあふれ出てきていた。

「お客はん、入りますえ」

女将の聲がしてふすまが開いた。南方はあわてて布団から飛び出した。咲も女将の聲で目を覚ました。

「あ、いや、これは、あの...」

咲の部屋で寝ているところを見つけた南方はあわてて畳の上に正座していた。

「ん...あ、いえ...」

咲も起きたが女将の姿を見ると赤面し、はだけた胸元を布団で隠して向こうを向いてしまった。

「ンフッフ、お客はん、うちらは別にかましまへんえ。旦那はんのお部屋にあさげ（朝食）の支度ができてますさかい。よろしゅうに」

女将はそう言ってふすまを閉めた。

（まいったな...）

南方は頭をかきながら苦笑いし、咲は赤面して背中を向けうつむいていた。南方は目を覚ました咲に話しかけた。

「咲さん、おはようございます」

「お、おはようございます」

咲はあいさつを返すと、胸元を布団で隠したまま南方の方を向いた。

「では、あさげを食べにいきましょか」

「は、はい、では支度を」

咲は顔を赤らめ、はにかんで答えた。たったこれだけのやりとりだったが、南方は咲との間に新たな絆が芽生えたことを実感していた。咲も全く同じ思いだった。咲ははだけた浴衣の胸元を直すと、くしで御髪を整え始めた。

鴨川の水の音が小さく部屋の中に聞こえていた。

朝食を取り終え、巳の刻（午前十時頃）になると、新門辰五郎が子分をつれて旅籠に二人を迎え

にきた。二人は今日は将軍・徳川慶喜に会うため、二条城に登城する予定だった。南方と咲を乗せるため、駕籠も二つ来ていた。咲と南方があがりかまちを降りると、女将が挨拶に来た。

「旦那はん方、いってらっしゃいまし」

「はい、ありがとうございます。咲さん、いきましょか」

「はい」

咲は静かな声で少しはにかみながら答えた。

（あれ、南方先生と咲さん、昨日と少し雰囲気がちがわねえか？もしや、昨夜お二人は...）

辰五郎はそんな気がしていた。南方と咲の間の空気が昨日とはあきらかに違っていた。

（へえ、南方の旦那もなかなかやるもんだねえ）

辰五郎はそんなことを考えると片頬で笑った。そして南方と咲が駕籠に乗るのを見届けると号令をかけた。

「よし、手前ら、行くぞ」

「へい」

子分と駕籠かきは威勢よくそう答えると二条城へむけて歩きだした。辰五郎は手をふところに入れ片頬で笑ったまま、肩で風を切るように歩き始めた。

第四十話 二条城

南方雀と橘咲は新門辰五郎たちによる護衛のもと、駕籠にのせられてお池通りを西に向かっていった。

今回の上洛については、南方はあまり納得してはいなかった。慶喜への恩義から今回京都までやってきたが、慶喜がなぜ南方を呼んだのか、実際のところはよくわかっていなかった。南方は駕籠の横を歩いている辰五郎に聞いてみた。

「辰五郎親分、慶喜様はなぜ私を...」

「慶喜様は...かなり追い込まれていなさる」

辰五郎はそう言うと苦虫を噛み潰したような渋い顔になった。

「慶喜様が？」

「おう。オレは慶喜様の話し相手をさせてもらってるんだが、だいぶまいってるねえ」

「そうなんですか...」

「慶喜様はキレるお人で、権現様（家康）以来の俊英だ、なんて言われていなさるが、幕府の中にも外にも敵が多すぎらあ。話好きなお方なんだが、話を聞ける人間もロクにいやしねえ。四賢候なんて言われてるヤツらも慶喜様の話はロクにわからねえんだよ」

辰五郎は慶喜を心配していた。そして、あきらかに怒っていた。

「で、私は何をすれば...」

南方はおそるおそる聞いてみた。

「慶喜様が、何を考えておられるかはオレにもよくわからんが...いずれにせよ、お前さんは慶喜様の味方になって一緒に麻雀しながら話しを聞いてくれりゃあ、それでいいのよ」

辰五郎は自分では聞いてあげられない話を南方にするのだろうと感じていた。そう感じながら話す辰五郎の横顔はすこし寂しげだった。

南方と咲を乗せた駕籠は、二条城の東大手門をくぐり、二の丸御殿の車寄に着いてとまった。車寄は二条城の玄関のようなところだ。駕籠が降ろされ、二人は駕籠を降りた。

（ここが二条城か...しかし広いなあ...建物も豪華で、しかも何か品があるなあ）

南方はそんなことを考えながら、あたりを見回した。

「広いところでございますね...江戸のお城もこのように広いのでございましょうか」

咲も同じようにあたりを見回していた。

（さしずめ私たち二人は「おのぼりさん」と言ったところか。オレたちは江戸の田舎もんだな）苦笑していると、奥から出てきた女中の出迎えを受け、さっそく二条城の中に案内された。建物の中も豪華で、様々な彫刻や絵画で彩られていた。

西洋のように絵画や彫刻が飾ってあるというものではなくて、ふすまには大きな松や虎などが直接ふすま絵として描かれ、欄間にも梅や松などの植物や鳥、動物が彫られていて、部屋全体が芸術のかたまりのようなものだった。

さらに外には二の丸庭園が見えた。池には橋がかかり、庭石や樹木は手入れがなされ、綺麗な日

本庭園の風景が存在していた。

目に映るどれもこれもがすばらしいものだということは、素人の南方でも一目でわかるものばかりだった。

（これはすごい。こりゃあ国宝になるはずだわ...）

南方は中学生の頃、修学旅行で京都に来たときに二条城も見たはずだったが、改めて訪れた二条城に感動していた。もしかすると現代よりも新しく豪華に見えたからかもしれない。

「お城の中とは、すごいものにございますね」

咲もそう言いながらあたりを見回していた。

「兄から江戸のお城の中はすごいと聞いてはおりましたが、こんなにすごいのでございますね」

南方は咲にそう言われ、

（そうか、江戸の人でもこれはやっぱりすごいものだと思うんだ）

とわかると、笑いがこみ上げてきてクスクスと笑った。

（咲さんにとっても修学旅行みたいなものだな。咲さんと一緒に来て本当によかった。）

楽しそうな咲を見て、南方は心からそう思っていた。

南方たちは女中に案内されて二条城・二の丸御殿のかなり奥の方まで来ていた。

「こちらでお待ちくださいませ」

と女中に通された部屋は襖絵や欄間も見事で、外の庭園も楽しむことができた。その部屋には麻雀卓が置かれていた。

この部屋は「黒書院」という部屋で、慶喜の書斎ともいうべき部屋だった。慶喜の執務のための部屋で、慶喜が公式ではない私的な対面を行う場合には、この部屋が使われていた。

「やっぱり...麻雀打つんですかね」

南方は辰五郎に聞いてみた。

「そりゃあそうなんじゃねえか？京都にはどうもいい面子がいなくてな。うちの麻雀が強い若い衆はみんな雀友堂にいるからな。齒ごたえのある麻雀を打ちてえんじゃねえかなあ」

（なるほどねえ...慶喜様は頭の良いお方だからな）

南方がそんなことを考えていると、廊下からこちらの部屋へ足音が近づいてきた。

（慶喜様だ）

三人はそう思った。咲は足音聞こえるほうに向かってかしこまり頭を下げた。まもなく、ふすまが開き、慶喜が入ってきた。

「おお、南方殿。久しいのう。よくぞ参られた」

慶喜は南方を見ると笑みを浮かべて南方のそばに座った。

「慶喜様、お久しぶりでございます」

「こちらは、どなたかな？」

頭を下げてかしこまっている咲を見て慶喜は聞いた。

「はい。こちらは私が世話になっている旗本の橘家の娘さんで咲さんといいます。雀友堂の手伝いをさせていただいております」

「おお、雀友堂の...そのような礼はよい。表をあげよ」

咲は頭を上げなかった。一度目はあげないのが武士の礼儀で、咲はそれを守っていた。

「はっはっは、咲さん、この將軍様はよ、徳川二百六十年の中でも、一番気さくな將軍様でな。この黒書院ではそういうのはナシってことになってるんだよ」

辰五郎は頭を上げない咲を見て笑った。

「えっ、そ、そうなのでございますか？」

咲は驚いて顔を上げた。上げた顔がきょとんとしていたのを見て、三人は大笑いした。咲も顔を赤らめうつむきながらも照れ笑いをしていた。

「では、南方殿、咲殿。さっそく囲むとしようか。場決めをいたそう」

慶喜はそういうと慣れた手つきで風牌を手のひらでつつみ、自らシャッフルしはじめた。

第四十一話 御前対局

四人はそれぞれ風牌をつかみとった。慶喜がサイを振って五の目を出し、慶喜が出親に決まった。南家が新門辰五郎、西家が南方雀、北家が橘咲だ。

「すまぬが、此度の対局、東風戦一回ということにしてくれぬか。このご時世、余も少々忙しゅうてな」

慶喜は苦笑いしながらそう言った。

「も、もちろんでございます。慶喜様のよきように、おはからいくださいませ」

咲は緊張しながらもそう答えた。咲は麻雀を打つことでだんだんと肝がすわってきていたが、さすがに將軍慶喜との麻雀には緊張の色を隠せなかった。対照的に辰五郎と南方は、まるで友達と卓を囲むように笑顔で座っていた。

辰五郎は慶喜のプライベートな相談相手であったし、義理の父でもあった。辰五郎にとって慶喜は身内でもあったからか、慶喜を息子を見るような目で見ていた。南方も青龍院の隠し部屋と一緒に酒を飲んで以来、慶喜とは共通点が多いことに気づいていた。

慶喜は將軍でありながら、気さくで、新しいもの好きで、凝り性な男だった。

麻雀についても「これは面白い」と見るや、南方に「麻雀指南」を書かせ、自らも麻雀を勉強して麻雀卓まで作った。慶喜は京でも辰五郎はじめ身の回りのものと時々麻雀を打っていた。麻雀を面白いと感じはまりこんでいく慶喜を見て、南方は自分と同じ性質を持っていると思っていた。

酒に弱いのも南方と同じで、南方は慶喜に共感を覚えていた。

「では、始めるか」

慶喜はそう言ってサイを振り、配牌を取り出した。

対局は、慶喜に不利な状況で進んでいた。

東一局の親は南方に七百・四百で流され、東三局にはラス目の辰五郎の追っかけリーチに遭い、リーチ負けして満貫を振り込みラス目になっていた。

（ラス目か。今の幕府と、何ら変わらぬな）

辰五郎に点棒を渡しながら慶喜はそう感じていた。

（公家どもは攘夷だというが、そんなことはできるはずもない。幕府にすり寄ってくるフランスは味方のようなフリをして実はこの国を喰い物にしようとしている。徳川は武力倒幕をたくらむ薩長を押さえることすらままならぬ。幕府はいまや、朝廷にも薩長にも外国にもかなわぬ存在に成り下がっている...）

慶喜は片頬で笑った。

（さて、最後はどうするかな）

そう思いながら慶喜は配牌を取った。ドラは一索。ラス親はトップ目の咲だ。もうこの一局しかない。オーラスの点差はこうなっていた。

咲 ： 3 7 6 0 0

慶喜 : 1 8 3 0 0



「ポン」

「ポン」

四萬 五萬 六萬 八萬 八萬 三萬 北

三萬 四萬 五萬 六萬 八萬 八萬 七萬 七萬 六萬 六萬 五萬 五萬 四萬 三萬 二萬 二萬 一萬 一萬

「ツモ」

六萬 六萬 六萬 四萬 四萬 四萬 三萬 三萬 三萬 二萬 二萬 二萬 東 西 東 一萬 一萬 一萬

「二千、四千です」

点棒を払い終わると、しばらく沈黙が流れた。この沈黙を破ったのは慶喜だった。

「咲殿...三一六萬待ちではござらぬか。五萬手出しでもう切れなくなったのだが...」

「左様でございます。実は赤五萬をツモって参りまして...ツモ切ろうかとも思ったのですが」

咲はそういうと手を開けた。



「南方殿。このような場合は当たるやもしれぬが六萬を切るのが良いのではござらぬか」

慶喜は手牌を開けてそう言った。南方は慶喜の手牌を確認すると、こう答えた。

「慶喜様。雀友堂の生徒なら、そのように指導する場合があります。ただ、慶喜様は優れた観察力をお持ちで鋭い読みができるお方ですから、その場合は読みを信じて八萬を切ればよいと思います。ただし...」

南方は一息ついてから話しはじめた。

「もう、そこでその手は観念して降りねばなりません」

「手を回さず、降りろと申すのか」

慶喜は冷静に言った。

「はい。その三萬一六萬は咲さんが八索をポンして入ったものではありませんか？」

「いかにも」

「おそらく慶喜様が普通の打ち手なら、タンピン三色になった時点で六萬を勝負して、咲さんの勝ちになったはずです。そのような牌を流される打ち手には、時の勢いがありません」

「時の勢いが無い？」

「はい。慶喜様の動きによって、勝つ人間が誰かは変わりますが、慶喜様が勝つことはありません。申し訳ないのですが、慶喜様のこの対局での役割はそういう役割だったのです」

（余には...やはり時勢がないのか？）

慶喜はクールな表情を崩さなかったが、心の中でそう思っていた。

「ハッハッハッ、こいつはおもしれえや」

黙ってみていた辰五郎が笑い出した。

「三萬切りなら、実は頭ハネでおいらの勝ちだったんだけどなァ」

辰五郎は自分の手牌を倒した。



「東風戦だからな。ダブ西、ドラ1でどこから出ても良かったんだがなァ」

「アッハッハッハ」

今度は慶喜が笑い出した。

（時勢がないとはこういうことか。牌がどう流れても他の誰かが勝つようになっているのか）

慶喜はそう確信すると笑わずにはいられなかった。

「南方殿、今日は遠いところをすまなかった。おかげで余の腹は決まった。改めて礼を申すぞ」
そう言うと慶喜は改めて座りなおし、南方に向かって頭を下げた。

「よ、慶喜様、私はそのようなことは」

「いや、南方殿のおかげで余に時の勢いがないことがよく分かった。余は...徳川は...容堂の言う
とおり、政を朝廷にお返しすることにいたそう」

（えっ）

一同は驚き、声も出なかった。咲や辰五郎はその意味もよく理解できなかった。庶民は、徳川が
朝廷から政を委任されているということさえ、よく理解していなかったからだ。ただ、そのこと
がとてつもないことだということは理解した。

「板倉、居るか」

「はっ」

後ろのふすまが開き、控えていた老中・板倉勝静が返事をした。

「余は政を朝廷にお返しするとたった今決めた。京に駐屯する幕府役人、各藩の諸侯を集めよ。
皆には余から話す」

「はっ」

板倉はふすまを閉めると、その場を去っていった。

「慶喜様、それはどういうことなのでございますか？」

咲は「政を朝廷にお返しする」という意味が分からず、慶喜に尋ねた。

「先ほどの余の手と同じじゃ。『時の勢いがないからオリる』ただそれだけのこと。それが余の
役割であるのじゃ」

そう話す慶喜の顔は、憑き物が落ちたように晴れ晴れとしていた。そんな慶喜に普段クールな辰
五郎も安心したのか、片頬ではなく顔全体が笑っていた。

徳川慶喜による大政奉還が成立し、京の街は騒乱状態になっていた。

庶民は「ええじゃないか」と踊り狂い、京都見廻組や新撰組といった佐幕派の武士たちはピリピリして京の街を歩き回り、倒幕派の薩長は倒幕の勅許まで手に入れながら、振り上げた刀の降ろしどころが分からずにいた。この時の京の街は様々な人たちの正と負のエネルギーが充満していた。

南方雀と橘咲は、慶喜との対局後は先斗町の旅籠で足止めを喰らっていた。

「危険なので、京の街が落ち着くまでしばらくはじっとしているように」

という慶喜の配慮だった。

だが南方には勝から龍馬宛の手紙を届けるという任務があり、一刻も早く届けなくてはと考えていた。

（今日あたり、行くか）

南方は任務を果たすため、こっそり抜け出そうとしていた。南方と咲には幕府の警護がついていたので、それらの目をかいくぐろうと、チャンスを狙っていた。

「咲も一緒に参りとうございます」

南方は昨晚咲が言った言葉を思い出していた。

南方と咲は最初こそ別々の部屋を取っていたが、慶喜との対局後は同じ部屋で寝泊りするようになっていた。

南方は昨晚も咲を抱いた後、寝物語に未来のことなどを話していた。

「未来ではメールというものがあってね...文があっという間に相手に着いちゃうんです」

「左様で...では、このたびの勝先生の用向きなども無くなってしまうのですね」

咲は少しさびしそうに答えた。

「そういうことになりますね...」

「そのような用向きがなくなってしまうと...私は未来では先生とこうして枕を重ねることもできぬのでございましょう...」

「未来は確かに便利ですが...こうやって人手で手間をかけてやることも大事なこともかもしれませんね」

「この時代に先生が来られて、咲と同じ時を過ごされましたこと...咲はうれしゅうございます」

咲はそう言う顔を赤らめ、南方に寄り添った。

「そろそろ...お役目を果たさなくてはなりませんね。明日、伏見の寺田屋に行ってきます」

南方は胸元に寄り添う咲を見て、頭を撫でながら優しく言った。咲は南方を見上げた。

「私は...」

「咲さんはここで待っていてください。今の京は危険ですし、護衛の方もいらっしゃいますから」

「咲も一緒に参りとうございます。私だけ置いていくなんて言わないでくださいまし。もう先生

と離れることなど考えられませぬ。咲にはもう帰る家もないのでございます。」

（そうだった...）

南方は咲が家を勘当同然になってこの旅についてきたことを思い出した。普段咲があまりに明るいののでつい忘れがちになっていたが、そもそもこの時代の旅は危険なもので、決して学校の修学旅行のようなものではないのだ。南方はこの旅が「咲の修学旅行になってよかった」というように考えていたが、咲にとっては命がけの旅だった。

「咲さん、わかりました。護衛の目が外れたところについて、二人で抜け出しましょう。仕掛けるタイミングは裏技と同じです。相手の盲点をつくんです」

「本当に...これも勉強でございますね」

咲は安心したのか、安らかな微笑みを浮かべていた。

幕府の護衛が食事のため旅籠の台所に入った隙を狙って二人は表へ出た。二人は伏見から辰五郎に連れられて歩いた道をたどって寺田屋へ向かって歩いた。

一刻も歩くと寺田屋に着いた。二人が寺田屋に入ると寺田屋の女将・お登勢が出迎えてくれた。

「すみません、江戸から来た南方と言いますが...」

南方があいさつをすると、

「これはこれは南方先生。遠いところよくきてくれはりましたなあ。わたくしが女将のお登勢です。とりあえず、そこへかけておくれやす。坂本はんからお話は聞いておりますえ。まあ、今日は奥方はんもご一緒ですか」

お登勢は京女らしくやさしく迎えてくれた。咲は「奥方」と言われて顔を赤らめた。名物女将らしい客あしらいだった。南方はお登勢に聞いてみた。

「いや、今日は泊まりに来たわけではないんですよ。実は龍馬さんに用があって...」

「坂本はんに？」

「はい。どうしても一刻も早く龍馬さんに渡さなくてはいけないものがありまして...」

「そうですか...それやったらとりあえず中へあがっとくれやす」

「はい、それでは...」

南方と咲はあがりかまちに腰掛けた。お登勢は周りをきょろきょろと見回すと、小声で南方に話しかけてきた。

「南方先生、坂本はんは今大変なときですさかいに...ここでお話するわけにはいかへんのどす。誰が聞いてるかわからしまへんさかいなあ。中で内々にお話させておくれやす」

「わかりました」

南方もつられて小声で答えた。まもなく店の女中が足を洗う桶をもってやってきた。

「ほな、中でお待ちしとりますさかい。足あろうたら奥まできとくれやす。お龍はん、足あろうたらお二人を中に案内しとくなはれ。頼みますえ」

「はい」

女中は南方の足を洗いながら答えた。

（お龍はん？ということは、この人が龍馬さんの奥さんの...お龍...さん？）

南方は自分の足を洗っている女中を見て一人で勝手に驚いていた。咲は南方の行動がよくわからず、首をかしげてきょとんとしていた。

「南方先生、坂本はんにはどのようなご用向きで」

南方がお龍に案内されて寺田屋の女将の部屋に座ると、お登勢はこう切り出した。

「実は、江戸の勝先生から文を預かっております。勝先生がおっしゃるには、龍馬さんのこれからを乗り切るすべが書かれていると。これを一刻も早く龍馬さんに届けなくてはと」

南方がそう訴えると、しばし沈黙が流れた。お登勢は少し考えて、後ろで控えているお龍に話しかけた。

「お龍はん、どうしはります？南方先生は坂本はんも信頼してはる先生やさかい、教えてもええんとちがうやろか。お龍はんは坂本はんの居所、知ってはりますのやろ」

お登勢にそう諭され、お龍は考えていた。龍馬はお龍だけに居所を知らせていて、お龍は龍馬の命にかかわることと思い、お登勢にも話してはいなかった。お龍は思いつめた顔をしていたが、意を決して口を開いた。

「京都四条蛸薬師の醤油屋、近江屋にあります」

「お龍さん、ありがとうございます。京都四条蛸薬師というのは、どの辺りですか？」

京都の地理に詳しくない南方は聞いた。

「南方先生はどちらへ泊まってはるんどすか？」

お登勢が横から口をはさんだ。

「先斗町の旅籠ですが…」

「あー、それやったら、先斗町の筋から二つほど西の通りどすなあ。四条通りから上がりはったらよろしおすえ」

「ありがとうございます。ちょうど近くですからこれから戻ります。咲さん、京に戻りましょう」

南方と咲は手荷物を持つと立ち上がり、慌しく寺田屋を出て行った。

（龍馬さん、そんな近くにいたのか…早く戻らなくては）

南方はそんなことを思いながら、来た道を京の街へと戻っていった。

そんな南方と咲を尾行する、二つの影があった。

実は南方と咲は先斗町の旅籠からある人間に尾行されていた。南方が龍馬と親しいことは京都見廻組には情報が伝わっていて、先斗町の旅籠を抜け出した南方と咲は見廻組にずっと尾行されていた。寺田屋から急いで京に戻る南方を見て、その先に龍馬がいることは容易に想像がついた。

実は寺田屋も龍馬の行方を探るため、見廻組にマークされていた。

先斗町から尾行してきた男は寺田屋で別の男と落ちあい、寺田屋からは尾行が二人となっていた。

この刺客は慶喜が準備したものではなかった。慶喜は人を斬りすぎる新撰組や見廻組のことは嫌

悪していて、南方の警護には幕府の役人をつけていた。見廻組は独自に「政治犯」としての龍馬を追っていただけだった。

南方と咲は見廻組の尾行をつけたまま、大急ぎで近江屋へと向かっていた。

南方雀と橘咲が近江屋へついた頃、もう日はとっぴりと暮れていた。近江屋で二人を迎えてくれたのは、籐吉という元力士だった。籐吉は龍馬に気に入られ、龍馬の身の回りの世話をしていた。

籐吉は二人が刺客ではないと分かると、龍馬のいる二階へ案内してくれた。

「龍馬はん、はいりませ」

籐吉はふすまを開けた。龍馬はどてらを着てふとんをかぶり、火鉢にあたりながら男二人と話をしていた。龍馬は二人を見ると、人懐っこい笑顔を浮かべた。

「おお、先生、咲さんまで。ようきたねや。」

そう言って向けた顔は赤く、熱もあるのかすこし力のない感じだった。

「龍馬さん、どうしたんですか」

南方はそう言いながら龍馬に駆け寄った。

「ちくくと、風邪をひいてしもうたようでのう。まあ、養生をしちよるところぜよ」

「そうなんですか...」

「おう、先生、紹介するぜよ」

龍馬はそういうと双方を紹介し、互いにあいさつを交わした。龍馬と話していた男二人は、土佐の中岡慎太郎と京都の書店・菊屋の峯吉という若旦那だった。

「で、先生は京くんだりまで、なにをしにきたんぜよ。今時の京の街は、ワシに限らず危ないぜよ」

龍馬はそういいながら鼻をほじっていた。南方は相変わらずの龍馬に少し安心して用件を切り出した。

「勝先生からの文を預かってきました。龍馬さんがこの危うい状況を生き抜くためのすべがいろいろと書いてあるそうです。」

それを聞いた中岡慎太郎は厳しい顔になった。中岡もまた、今の危うい状況をどうしのぐかを考えていたところだった。南方は龍馬に勝からの手紙を龍馬に手渡した。

「...」

龍馬は無言で勝からの手紙をちらっとながめると、口々に読みもせずになにふところになった。危機感の強かった中岡は龍馬を叱りつけた。

「龍馬、それは勝安房守がおまんを心配して書いたものだろう。ヤツは切れ者じゃき、それはしっかり読んだ方がええぜよ。ワシもおまんの身が心配じゃき。身を守る方法はいくつあってもええぜよ」

南方も中岡に同調した。南方はもうその時が近いということが分かっていたし、実際に感じてもいた。

「そうですよ、龍馬さん。ちゃんと読んだ方がいいですよ」

「風邪でちくくとつろうてのう。後でよむき、ええじゃろ。それより精をつけたいき、軍鶏が食いたいぜよ。峯吉、ちくくと言って軍鶏をこうてきてくれんかのう」

龍馬はそう言うと言吉に金を渡した。

「へえ。ほな、いってきま」

言吉が立ち上がると、咲も立ち上がった。

「私も参ります。軍鶏鍋には、セリや水菜といった軍鶏に合う野菜が必要でございますから。私がみつくろってまいりましょう。」

「そら、助かりますわ。うちはようわからんさかい。ほな、咲はん、行きまひよか」

「はい、参りましょう」

咲と言吉は軍鶏鍋の材料を買いに出かけた。

「拙者、十津川郷士の中井庄五郎と申す者。坂本殿にお目通り願いたく」

咲と言吉が買出しに出かけてからしばらくたった後、十津川郷士を名乗るものが近江屋を訪ねてきた。言吉がぐり戸をあけると、外の男は中へ入ってきた。

「こちらどす」

言吉がそう言って入ってきた男を案内しようと背を向けた瞬間、男は居合い抜きで言吉を袈裟懸けに斬った。

「ぎゃああ」

言吉は叫んだが、すぐに返す刀でとどめをさされてしまった。言吉はそこで息絶えた。

「ほたえな」

言吉の悲鳴は二階にまで聞こえていたが、龍馬は言吉がふざけているものだと思い、「ほたえな（静かにしろ）」と叫んでしまった。

言吉を斬った男は龍馬を斬りにきた刺客だった。刺客は二人連れで、一人は中岡をつけてきた男、もう一人は南方をつけてきた男だった。京都見廻組は、幕府のお尋ね者である龍馬の居所を突き止めるため、周囲の人間を張りこんでいた。ちょうど近江屋で落ちあった二人は龍馬を斬るために近江屋に乗り込んだ。咲と言吉が買出しに出て、人数が減ったのを確認し、ここを機会とみて乗り込んだのだった。

龍馬の叫び声を聞き、刺客二人は龍馬が二階にいることが分かった。

刺客二人はそっと土間から上がると、声のした方へ続く階段を静かに上っていった。

「言吉、咲殿、もう買うてきたがかえ」

龍馬は静かに階段を上がってくる刺客の気配を感じ、声をかけた。当然返事はない。刺客二人はすこしドキとしたが、落ち着いてふすまの前に立つとスッとふすまをあけた。

南方は刺客を見たが、誰かよくわからずきょんととしていた。

「先生、刺客じゃ。逃げい！」

龍馬は刺客が鯉口を切ったのを見て叫んだ。

「に、逃げるって…」

南方が狼狽していると、龍馬は布団をはねのけて立ち上がり、南方を抱きかかえると窓から外に

投げ捨てた。窓の障子がやぶれ、南方は外に転げ落ちた。

龍馬は南方を外に投げ捨て、刺客に向き直ったところを横に払われて額を深く斬られた。飾ってあった屏風に龍馬の血しぶきが飛んだ。

中岡はもう一人の刺客を相手にしていたが、あまりにも分が悪かった。置いていた刀を引き寄せる前に袈裟懸けで一度斬られていて動きに精彩がなかった。なんとか刀を抜いて応戦したものの、腕、足、背中など十数か所を斬られ、血まみれになって力尽きた。

龍馬は額を割られながらも、床の間の刀を取ろうと後ろを向いたところを頭頂部から背中にかけて深く斬られた。執念で刀を抜いたが応戦する力は残っていなかった。さらに頭から刀を打ち下ろされ、前のめりに倒れた。

「これでよかろう」

龍馬を斬った刺客はもう一人にそう言って目で合図をした。二人の刺客は刀を振って血のりを払い、懷紙を取り出すと刀についた血のりを丹念にぬぐった。

刺客が近江屋を出てからまもなく、峯吉と咲が軍鶏と水菜を買って帰ってきた。くぐり戸から中に入ると、二人は土間に籐吉が倒れているのを見つけた。

「ひ、ひええええ」

峯吉はそのまま腰を抜かして座り込んでしまった。

（せ、先生！）

咲は南方の安否を確認しなくては、とすぐに感じた。倒れそうなところを必死の思いで二階へ駆け上がりふすまを勢いよく開いた。

そこには地獄絵図が広がっていた。血で畳が真っ赤に染まった中に龍馬と中岡がうつぶせに倒れているのが見えた。龍馬にいたっては頭を割られ真っ赤な血の上に脳みそが流れ出ていた。周りの壁にも何箇所も血しぶきがかかっていた。

生々しい惨劇のあとを見てしまった咲は、そのままへなへなと廊下に座りこむと、気を失いそのまま倒れた。

気を失っていた南方雀は、意識を取り戻した。

周囲を見ると、さっきとは風景が何から何まで変わっていた。天井には明るい蛍光灯が見え、左側には点滴が見えた。自分はベッドに横たわっていた。

（ここは...病院？しかも、現代？ええっと、オレどうしたんだっけ？）

南方は自分の記憶をたぐっていた。江戸時代の京都の近江屋で見廻組の襲撃を受け、龍馬に外に放り出されたところまで思い出した。南方は改めて自分の衣服を確認した。南方は病院で入院患者が着る病衣を着ていた。

（ん？どうして着物じゃないんだ？あそこからまたタイムスリップしたんじゃないのか？）

南方は混乱していた。すると部屋のドアがずっと開き、友永未来が入ってきた。

「ジャン、意識が戻ったのね！もう、心配させないでよ」

未来は南方のベッドの横にある椅子に腰掛けた。

（未来...また会えるなんて）

南方は無意識のうちに目に涙をためていた。もう会えないと思っていた未来にまた会うことができたのだ。南方は思いがけない再会に感動していた。

「未来...」

「もう、泣きたいのはこっちの方よ。麻雀牌運んでてすっころんで階段から落ちて意識までなくしちゃってさあ。私、長崎の実家まで電話したのよ。ご両親もうじき来るわよ」

（そうだ、そうだった）

南方は江戸にタイムスリップする前のことを思い出した。麻雀牌の搬入をしていて、転んで階段から落ちたのだった。

（じゃあ、なんだ。江戸時代の記憶は...あれは夢だったのか？）

南方はそう思ったが、あまりにリアルすぎる体験とも言えるような夢を否定する気にはなれなかった。と同時におかしなことに気づいた。

「未来、長崎の実家って、誰の実家のこと？未来は実家住まいじゃなかったっけ？」

「何言ってるのよ、あなたの実家じゃない」

「オレの？」

「そうよ。あなたの実家」

「オレの実家、千葉なんだけど」

「もう、頭打って記憶が少し混乱してるみたいね。まあ、病院の先生もそういうことがあるかもしれないとは言ってたけど」

未来はそういうと一息つき、仕方ないなあという雰囲気でお話始めた。

「いい？あなたの実家は長崎なの。あなたに昔聞いたところでは、実家は長崎の丸山っていう花街の裏にある小料理屋で、花街で働いている人たちがよく飲みにくる、そんなお店を代々やっているお家なの。わかった？」

（長崎の丸山だって？）

南方はそう聞いて思い出した。江戸時代に龍馬と一緒に長崎の丸山に行き、お元に湯屋につれていかれて湯女を抱いたことを。

（ま、まさか、そんなことは...）

南方の頭には恐ろしい想像が渦巻いた。もし、湯屋で抱いた湯女がそのまま南方の子供を生んでいたとしたら？そしてその湯女や子孫がその花街の裏手に小料理屋を開いたとしたら？それで歴史が変わっていたとしたら？

（オレの先祖は、オレってことになるんじゃないのか？あの湯屋はソーブランドみたいなもんだと思ってたけど、よく考えてみれば、確かに避妊もなにもあったもんじゃない時代だし...）

ただひとつ間違いないのは、南方が帰ってきたこの現代の世の中が、南方が知っている現代とはすこし様子が違うということだった。だとすると、江戸時代の記憶もどうやら夢ではなさそうだ。自分自身の江戸時代の行動が歴史を変えてしまったのだと思えてきた。

（オレが帰ってきたこの現代は、いったいどういうことになってるんだ？）

南方はとても不安になった。

「ねえジャン」

未来は南方の横でりんごをむきながら話しかけた。

「ジャンさあ、なんか記憶が混乱してるみたいだからさ。あの日のこと話して整理してみて。

間違ってたらアタシが正すからさ」

「なるほど。じゃあ話してみるよ」

南方は少し上体を起こした。

「えーと、あの日は前日に雀竜位戦があって、オレが二連覇した翌日なんだよな」

そこまで言ったところで未来がりんごをむく手を止めて笑い出した。

「もう、本当面白いわ。記憶ってこんなに混乱するものなのねー。アタシ、手切っちゃうわよ」

「え、オレなんか面白いこと言った？」

「言ったわよ。なによ『雀竜位戦』で。そんなタイトルどこにもないわよ。あなたが二連覇したのは名人でしょ？」

「え、名人なんてあるの？それ、どこの団体のタイトル？」

「どこの団体って...プロ団体なんだから一つしかないでしょ。日本雀院よ」

「え...日本雀院？プロ団体って一つだけなの？」

南方は素朴な疑問を投げかけた。南方がかつていた現代ではプロ麻雀界は分裂していて、主要なプロ団体だけでも五団体あった。むしろ一つしかないなんてことは信じられないことだった。

「当たり前じゃない。そんなたくさんプロ団体があってどうするのよ。ひとつだけでも狭いマーケットでなんとかやっていくのに必死なのに、そんなにたくさん存在できるわけがないじゃない。それじゃ対局料も払えないわよ」

「え、対局料が出るのか？」

南方は驚いた。南方には対局料が出るプロの対局なんて考えられなかったからだ。

「出るわよ。主要タイトルは新聞社なんかがスポンサーについてて、それを原資にしてるわ。て

「うか、対局料が出るからプロなんでしょ？」

未来は当然のこのように答えた。

（そうか、この現代はそういう麻雀界なんだ。そうだよ。その通りだよなあ）

「そうだね。その通りだよ未来。ハハハハハ、本当そうだよなあ」

南方は自然に大笑いしていた。分裂していた麻雀界があっさり一つになってるなんて、南方には思いもよらないことだった。

「で、名人の他にはどんなタイトルがあるの？」

南方がいた現代とは麻雀界の構造からして違うことが分かった。当然タイトルも全く違うはずだ。南方はそう考えて未来に尋ねた。

「そうね、名人、鳳凰、發王（りゅうおう）、王位、王座、雀王、雀聖。これが七大タイトルね。」

「へえ、まるで将棋みたいだな」

南方がそう言うと未来は笑いだした。

「麻雀が将棋みたいなんじゃなくて、将棋が麻雀みたいなんでしょ？将棋は麻雀のマネなんだから」

「え、そうなの？」

南方は驚いた。段位制にしてもタイトルにしても囲碁や将棋の世界を真似て作られたのが南方の知っている麻雀の世界だった。それがこの世界では逆になっているというのだ。

「そうよ。もう、二連覇の名人様がこれで麻雀界は大丈夫かしら。奨励会からやり直したほうがよくない？」

「奨励会もあるのか！」

「そうよ。麻雀プロになるには奨励会で四段に昇格しないとなれないわ。在籍期間の制限もあるからかなり厳しい制度よ。ていうか、ジャンは通ってきた道じゃないの？それも忘れちゃった？」

未来はすこしあきれ顔になっていた。

「麻雀プロの世界と将棋の世界の関係は、歴史をひもとけば一目瞭然よ。麻雀は幕末に江戸に広まって、明治時代にはもうプロ団体の基礎があったわ。当時は橘流と呼ばれてたけど」

（橘流だって？まさか...）

南方は思った。そのまさかだった。

「橘流を始めた橘恭太郎って人がプロの競技麻雀の元祖みたいな人なの。当時は『道』としての麻雀なんて呼ばれてたらしいけどね。かなりストイックな人だったらしいわ。ちなみに私の先祖もこの橘恭太郎の麻雀塾『雀友堂』で麻雀を学んだ人で、女流プロの元祖みたいな人だったのよ。『友永野風』って人なんだけど。武家の友永家に嫁いできた人なんだけど、明治維新で武家でなくなってからは競技麻雀の普及に努めた人なの」

（そうか、恭太郎さんや野風さんが...それに野風さんはやっぱり未来の先祖だったんだ...）

南方の胸には恭太郎や野風への感謝の気持ちがこみ上げてきて、涙をこらえるのに精一杯になってしまった。未来はさらに続けた。

「将棋は江戸時代に家元制度があって、一般庶民にも普及していたわ。でも、明治維新で家元の後ろ盾がなくなって低迷期に入るの。麻雀はそのあたりは恵まれてて、江戸時代は徳川慶喜が御前対局をさせるほどの麻雀好きだったこともあって熱心に支援してたわ。明治維新の後には勝海舟なんかが麻雀を支援するよう、新政府に働きかけてくれていたのね。橘流はそういう後ろ盾があって、明治時代にプロの競技麻雀団体を確立することができたの。将棋はプロ棋士の組織が出来るのは大正時代になってから。それも橘流が作った麻雀の組織を真似て作ったの。タイトル戦の名前や組織が似てるのもそのためよ」

（そうか、そうだったのか...勝先生が...ありがとうございます）

南方は恭太郎や野風、勝海舟に感謝の気持ちでいっぱいだった。麻雀界が一つになっているのも、きっと彼らのおかげだ。未来の話には納得し今の麻雀界についてもわかったが、ひとつ疑問が浮かんた。

（慶喜公の前で御前対局をしたのも、雀友堂を作ったのもオレなんだけど、どうしてオレの名前が一つも出てこないんだ？咲さんは？）

南方雀は病院の天井を見ながら考え事をしていた。もう病院の消灯時間は過ぎていた。

（この世界はオレが以前いた現代とは様子が違う。特に麻雀界については...）

南方はもともと競技者として優れていた。雀竜位を二連覇したのは天性の観察眼と聡明な頭脳を持っていたからだともいえるだろう。

南方はさらに「志のタネ」も心に秘めていた。麻雀界のために何かがしたい。具体的に何かをするという考えには及んでいなかったが、「何かしなくてはいけない」という志の元になるようなものは持っていた。

南方は麻雀というゲームを愛していた。だが麻雀は「ゲームの王様」と言われるほど面白いゲームでありながら、博打扱いされ一段低く見られている。そんな世間の待遇には不満を持っていた。

（この変化はおそらく、オレが江戸でやったことが原因だ...統一団体ができているのもオレが恭太郎さんに麻雀を教え、恭太郎さんが頑張ったから出来たことだろう。他は...何がどうなっているんだ...）

南方は自分がやったことの結果が出ている恐怖と、現代の麻雀界への好奇心が入り混じった、複雑な思いでいた。合格発表を待つ受験生のような感じかもしれない。

「おいおいわかるさ...」

南方はそう声に出して自分の気持ちを無理やり鎮めていた。横向きになりふとんを頭からかぶって目を閉じた。

カーテンが開き、病室に差し込んできた朝の光で南方は目を覚ました。

「南方さん、朝食です」

気がつくやうに病院の看護師さんが朝食を持ってきてくれた。

「今日退院なんですね。おめでとうございます」

看護師さんはベッドにしつらえたテーブルに朝食を置くと、南方にそう話しかけた。南方の朝食には病院からのメッセージカードと赤飯が添えられていた。

「ありがとうございます」

南方が笑顔で返すと、看護師は笑みを返しながら病室を出て行った。その看護師さんと入れ替わりに友永未来が病室に入ってきた。

「ジャン、おはよう。あ、お赤飯ついてる」

「あ、未来、おはよう」

南方があいさつすると、お膳を覗き込んでいた未来は笑顔を向けた。

「ジャン、いよいよ退院ね。今日はどこいこっか。記憶を整理しなくっちゃでしょ？」

「ああ。『ジャンスリー』に行きたいよ。自分の店だからね」

「そうね。それがいいわ。店に行って体動かすといいと思うわ」

南方はお膳に手を合わせ「いただきます」とあいさつし、箸をとり味噌汁のお椀を持った。

「どうしたの？ジャン？」

未来は驚いたように南方に言った。

「ん？オレ、今何かしたか」

「したわよ。今、手を合わせて『いただきます』って言った。今までそんなことしたの見たことないわよ」

「そうか？最近、言うようにしてるんだけど」

南方はとぼけてそう言うと味噌汁をすすった。

（ハハハ、江戸じゃ毎日やってたからな。つい出ちまった。でも、これはこれからもやろう）

南方はとぼけた顔のまま、赤飯を口にしていた。

南方と未来は会計を済ませると、病院の正面玄関で待っていたタクシーに乗り込んだ。未来は運転手に行き先を告げた。

「運転手さん、湯島聖堂まで」

「はい、湯島聖堂ね」

（湯島聖堂？）

変に思った南方は未来に尋ねた。

「『ジャンスリー』に行くんだろ？池袋じゃないのか？」

南方がタイムスリップする前は南方の経営する雀荘「ジャンスリー」は池袋にあった。階段から落ちて現代から江戸にタイムスリップしたのも池袋だ。

「フッフ、そこは混乱したままなのね。いいわ、教えてあげる。雀荘『ジャンスリー』は日本雀院の直轄店よ。湯島聖堂のあたりは、明治時代に政府から土地の権利が与えられたところなの。

『ジャンスリー』もそこにあるわ」

「へー、なるほどねえ」

（恭太郎さんや勝先生のおかげでそうなるってことか。お二人にはますます頭あがんないなあ）

南方は苦笑いしながらも嬉しそうだった。

十五分も走ると、タクシーは本郷通りを北上し、湯島聖堂近辺に差し掛かっていた。

「あ、その辺で止めてください」

未来は湯島聖堂の交差点でタクシーを止めた。二人はタクシーを降りると、交差点を渡ってわき道に入った。

「そこよ」

未来は前を指差した。先にあるビルには「ジャンスリー」の回転看板が出ていた。

（ここって...）

南方は思い出した。江戸時代のこのあたり一帯は旗本屋敷が並んでいたところで、橘家も雀友堂もこの一帯にあった。「ジャンスリー」の二軒となりには「日本雀院」の看板も見えた。

江戸時代の麻雀の起点はこの湯島近辺にあった。そして恭太郎や勝の尽力により明治維新の動乱期を生き抜き、今もその中心はこの湯島にある。南方は胸にこみ上げるものをおさえながら、未

来の後ろについてビルに入っていった

南方はジャンスリーの中に入ると中を見回した。ジャンスリーは合計十五卓ある大きめの雀荘だった。店はまだ開店直後で、メンバーズ入り入りのフリーが一卓だけ立っていた。

「結構大きい店なんだね...」

南方がつぶやくと、未来は笑いながら答えた

「大会の会場なんかにも使うから、このぐらいの卓数はないとね。二階には日本雀院直轄の『二番館』もあるから、二つ使えばかなり大きい大会でも対応できるわ」

「なるほどね...」

南方は頷き、さらに見回して店内を観察した。

（ん？なんだこれ？）

南方は自動卓が以前とは違うことに気づいた。近くの卓に歩み寄ると、自動卓を確認しはじめた。

（T O S H I B A？東芝？東芝製？）

自動卓のパネルには「T O S H I B A」と書いてあった。以前のジャンスリーでは大洋化学社製のアモス・アルティマがメインで、東芝製の自動卓というものは入れていなかった。というよりも、東芝製の自動卓というものは存在していなかった。

（なんだこれは...）

南方がそう思いながら自動卓をあれこれ見ていると、未来がそばに歩み寄ってきた。

「どうしたの？この自動卓そんなに珍しい？」

「珍しいって...東芝製の自動卓って...」

「何いってるの。東芝は全自動卓では一番の老舗よ。一番メジャーなんじゃないかしら？」

「本当に？」

「そうねえ、日本雀院の直轄店だと、ほとんど東芝製ね。昔っからそうらしいわよ」

「そうなの？」

「そうよ。明治の中頃にはもう自動卓ってあったらしいわ。橘恭太郎が裏技防止のために、東芝の創業者の田中久重に制作を依頼して開発したのが最初よ。日本雀院と東芝はそれ以来のお付き合いだそうよ」

（田中さん、自動卓作ってくれたんだ...）

南方は胸がつまる思いだった。そして思い出していた。龍馬と田中久重を訪ねて佐賀に行ったときのことを。目の前に田中久重の顔が浮かんだ。

南方は感情が高まり、胸がつまるのを必死にこらえていた。しばらくこらえた後、あることに気づいた。未来は「橘恭太郎が裏技防止のために」依頼したと言っていたが、裏技対策も自動卓の制作依頼も行ったのは自分だ。南方はもう少し未来に話を聞いてみることにした。

「なあ未来。田中久重さんに自動卓の制作を依頼したっていうのは、いつ頃の話？」

「そうねえ。橘恭太郎が『麻雀指南』の裏技編を書いた頃らしいから、幕末じゃない？」

「そ、そうなんだ...」

この現代に帰ってきてから薄々気づいてはいたが、南方は改めて実感した。自分が江戸でやったことは、歴史上全て橘恭太郎がやったことになっている。どうやら南方が江戸で行ったことは歴史のつじつまを合わせるために「なかったこと」になっているようだった。「麻雀指南」を書いたことも、田中久重に自動卓の制作を依頼しに行ったことも、雀友堂を作ったことも、徳川慶喜と御前麻雀をしたことも全て修正されていた。

（まったく、うまく修正するよなあ...まあ仕方ないか）

もしかすると、自分の江戸での存在が何かしら残っているのではないか？と思っていたが、おそらく調べても何もでてこないんだろう。南方は自分の名が残っていないことを少しだけ残念に思いつつも、自分の江戸での行動が統一団体を生み、麻雀界があきらかに良くなっていることを誇らしく思っていた。

「はいラスト！優勝会社です。失礼しました！」

フリーで立っていた卓が終了し、友永未来が場代を取りに行った。

（ん？）

場代を徴収する様子を見て南方雀は違和感を覚えた。普通は場代込みで精算し、トップを取った人が全員分の場代を払うのだが、未来は四人からチップを受け取っていた。しかも卓上ではチップが動いていなかった。

（ノーレートなのか？まあプロ団体の直轄店だったら仕方ないか）

南方はそう考えた。以前のジャンスリーは点五とピンのツーレートで、ノーレートはなかった。ただ、ここは日本雀院の直轄店だ。さすがに金を乗せるわけにはいかないだろう。

南方は戻ってきた未来に話しかけた。

「ノーレートなの？」

「うん、あの卓はね」

未来は場代のチップを片付けながら答えた。

「あの卓は？ってことは、ここでもレートを乗せることもあるの？」

「もちろん。麻雀だもの」

未来はあっけらかんとして答えた。

「でもさ、ここって日本雀院の直轄店なんだろう？さすがにまずくないか？」

「何言ってるのよ、直轄だから賭けていいんじゃない」

「え？」

南方が不思議そうな顔をしていると、未来はいたずらっぽく笑った。

「そこは忘れてるのかね。しょうがないなあ。教えてあげるわ」

「お願いします、未来先生」

南方はすこしおどけて頼んだ。未来は先生っぽく咳払いをひとつすると説明を始めた。

「普通にその辺の雀荘で賭け麻雀をすれば賭博罪で警察に捕まる可能性があるわ。でも、日本雀院の直轄店は別なの。もちろんレートの上限はあるけど、東南回しでピンのワンスリーまでなら認められているわ」

「そ、そうなのか？でも、どうして日本雀院の直轄店なら認められるんだ？」

南方は少し興奮していた。南方がいた現代では賭け麻雀は麻雀界が抱えている闇の部分みたいなもので、誰もそれに触らずにいた。プロ麻雀団体のメンバーは大半が娑婆の雀荘を経営したりそこで働いたりして生計を立てているにもかかわらず、麻雀界はその現実から目をそむけていた。

「麻雀ていうのは四人でやるもので、誰か一人がいいかげんな打ち方をすると場が壊れちゃうし面白くなくなっちゃうわよね。プロは対局料も出るしプライドをかけて打つから金銭を賭ける必要はないけど、娯楽で打つ麻雀は何か賭けるものがないと、そうはいかないわよね。セットならともかく、フリー麻雀は知らない人同士で打つわけだから、場を壊さず打つためにはみんなに共通する重しが必要なの。そのあたりは国にもちゃんと説明されていて、『日本雀院の直轄店』に

限り許可されてるってわけ。個別に申請もできるけど、公安委員会の厳しい審査が入るわ。変な団体に許可だすわけにはいかないですからね」

未来はそこまで話すと、手元のウーロン茶を少し飲み、口を潤した。

「そうなんだ...でも、よくそこまで実現できたな...」

南方が感心していると、未来はウーロン茶を置いて答えた。

「そりゃあ、日本雀院ですもの。江戸時代から真摯に『道としての麻雀』を追求しつづけ、同時に娯楽としての麻雀の普及に努めてきた団体ですからね。まあ、将棋あたりと比べても団体の信用力が高いのは間違いないわ。あとは橘宗家のコネと勝ち金の5%分の賭博税払ってるのも大きいわね。コネがないと話も聞いてもらえないし、それに国はやっぱり税収が欲しいから。」

未来はそこまで答えると、カゴにあるチョコレートをお口に放り込んだ。

（そうか、オレがいた現代とはそこまで変わってるのか...未来がよく食べるのは変わってないけどな）

南方はそう思うと、未来を微笑みながら見つめた。チョコをお口に含んだ未来は幸せそうにその甘み渋みを味わっていた。

「それにしても、橘宗家ってのは力持ってるんだな。政治家にまで話通せるなんて」

南方と未来は立ち番をしながら話を続けていた。

「そうね、麻雀における橘宗家っていうのはある種ブランドみたいなところもあって。よその業界からも一目置かれる存在ではあるわね。明治政府のころから政治とも関わりは持っていたようだし、そういうコネは持ってるのよねえ」

南方はそれを聞いて苦笑いした。

（江戸時代も麻雀広められたのは慶喜さんのおかげみたいなのところがあるからなあ。恭太郎さんはそういうことの大事さを分かったのかもしれないな）

そんなことを考えていると、エレベーターの向こう側に少しざわついた気配を感じた。ふっとエレベーターの方を見ると扉が開き、小学生らしい男の子と女の子二人が元気よく入ってきた。

「こんにちはー、よろしくお願ひしまーす」

普段見ない光景だけに、南方は戸惑っていた。

（いや、さすがに雀荘に小学生は入れないよなあ）

やさしく小学生を帰そうと言葉を選んでいると、未来が対応した。

「こんにちは。いらっしゃい。今日はこっちの卓でやるからね。席について待っててね」

「はい」

小学生たちは未来が指した卓に向かうと、席に大人しく座り、牌をもてあそび始めた。

「み、未来、小学生はさすがにまずいだろ」

狼狽する南方に未来はあっけらかんとして答えた。

「何言ってるの、ジャンの大好きなキッズ向けの教育麻雀よ」

（教育麻雀だって？）

南方は未来に言われて思い出した。江戸の町で子供たちに麻雀を教えていたことを。雀友堂に着

物姿の子供たちが出入りし、麻雀を打っている風景が南方の目の前に甦ってきた。

「でも、風営法はいいのか？」

南方の知っている現代では風営法で18歳未満は雀荘に出入りできなかった。麻雀プロの資格に18歳以上という条件があるのはそのためだったはずだ。

「日本雀院が行う教育麻雀については、風営法から除外されてるわ。そのあたりはぬかりはないわよ。」

南方はほっと胸をなでおろした。

「指導は未来がやるのか？」

「普段は私がやることもあるけど、今日は教育麻雀を専門にやってる人がやることになってるわ。そろそろ来るはずよ。橘宗家のお嬢が」

（えっ、橘宗家の？）

南方がそう思った時、エレベーターの扉が開き、淡いピンクのスーツを着た一人の女性が入ってきた。

「こんにちは。橘美咲です。今日はよろしくお願いします」

女性はそうあいさつして会釈した。南方はその女性を見たまま固まっていた。

淡いピンクのスーツを着たその女性は、日本髪こそ結っていないがツヤのある黒髪、清楚な出で立ちや顔立ちは橘咲そのものだった。

南方の脳裏には雀友堂で子供たちをやさしく指導する咲の姿がありありと甦った。未来の説明がなくとも、目の前の女性が今日の教育麻雀の講師であることは南方にとってはあきらかだった。南方の胸のうちに抑えていた熱いものが一気にあふれ出し、涙が流れた。江戸の町で出会い、献身的に南方を支え、もう会えないと思っていた咲と時を越えて会えたと感じていた。

（咲、さん...）

南方は心の中で声にならない叫びを上げていた。

（完）

あとがき

これを書いてたのは2011年の7月から2012年の2月まででした。初めて書く長編小説で、

「いったいつになったら書きあがるんだろう」

と思いながら書いてました。2012年2月26日に最終回をブログに出したとき、「やった！」というよりは正直「やっと終わった」という感がすごく強かったのを覚えてます。ストーリーやプロットは早くに出来ていたので「あとは書くだけ」という感じで作業していたのですが、実際にやってみるとなかなか大変でした。

ちょうどその頃は同時進行で次の長編のストーリーやプロットを練っていたのですが、

「早く次が書きたい」

という衝動が強くて、最後の方は衝動を我慢しながら書いてました。

今回、このepub版を作るのに自分で最初から読み返してみたのですが、特に最初の方は文章がひどくて

「こんなの書いてたのかよ」

と自分で赤面してしまいました。多少は直しを入れたのですが、読みにくかったことと思います。大変申し訳ありませんでした。

これに懲りずに次回作やブログにある掌編も読んでもらえると嬉しいです。またどこかでお会いしましょう。

■□■□どうぞお気軽にコンタクトを！何かお言葉をもらえるだけでもとても嬉しいです！■□■□

上野の健

twitter [@nogamiken](https://twitter.com/nogamiken)

メール nogaminoken@mbr.nifty.com

ブログ <http://jangblo.cocolog-nifty.com/>